

眼
花
短

眼光如炬

K29
(2冊) K

春光如炬

大正三年一月
 宗澤齋通
 書之

群馬縣は極めて名物に富める地なり、温泉には伊香保、四萬、草
 津等あり、名山には赤城、榛名、妙義あり、機業地には桐生、伊
 勢崎、館林あり、蠶業は高山、碓氷、甘樂、下仁田の諸社あり
 共に縣下の誇りたるに止まらず、以て名聲を世界に馳するに足れ
 り、然かも人文の開發、商業の殷賑、交通の完備に至りては、前
 橋、高崎の二市を推さざるべからず、蓋し此二市は、數百年の尊
 重すべき歴史を有し、夙に交通上の要衝を占め、恰かも隋圓形の
 二中心の如く、縣下の政治、産業、風尚等、悉く此二市に歸趨す
 るを見る、友人栗田君筆を載せて、任を前橋に在ること年餘、頃

者、報知新聞紙上に『前橋と高崎』を連載して、各方面より二市を比較論評するや、其視察の精透、奇警にして、其行文の流達輕快なる、大に讀者の注意を喚起したり、趣ち斯る努力の迹を、散逸せしむるに忍びず、之を剖劂に附して、播讀に便せんとするを聞く、思ふよ本書に依りて、興味と利益を獲べき者、獨り前橋高崎の二市民は止まらず、全縣民をして、其歸趨点たる二都市の實相を知らしむべき好指針たるべし、適々余の序を徵すること急なり、便ち聊か所見を記して卷端を汚す云爾、

於報知新聞社樓上

大正二年九月

生駒 翱 翔

序

畏友栗田君忙裏の小閑を偷んで『前橋と高崎』の一冊子を著す、其内容僅かに數百頁に過ぎざるも、一管の筆克く兩市の包含せる總てを網羅批評し、就中君が獨壇上たる人物月旦に至りては、才華横溢近來罕に見る好文章たり、今や新涼郊墟に入り、簡編親しむ可きの候、本書の如きは讀書子の爲め、驩迎せらる可き第一書たるを疑はず。

一盆の秋いろくの眺めかな

大正癸丑初秋

辱知 根 岸 香 溪

自序

前橋と高崎とは等しく群馬縣の管轄に屬して、其間大利根の流一つを隔て、僅かに二里、人口に於ても富の力に於ても殆んど大差はないが、大利根の流れ一つを隔て、居るが爲めに、兩市の氣風状態は全然其趣きを異にして居る、本書は著者が報知新聞の一記者として、任を前橋に在る年余、危憚なき兩市の比較研究を、報知新聞群馬版紙上に掲載したものを集めて一卷となしたもので、兩市の地理歴史關係に筆を起し、兩市の將來に説き及ぼし、花柳界に筆を收めたもので、卷末に附録として所載の兩市の代表的人物三十餘名は、直接間接兩市の爲めに盡されて居る功勞者で、四季の伊香保は、其季節々に天下の遊園地を味つた著者の感想を其儘序したもの、此書の卷末に納めた所以は、兩市が共に天下の遊園地伊香保の咽喉を扼し、重大の關係を有するが爲めである。

終に望み著者は、本書の編輯に對し多大の援助を與へられた、報知新聞地方部長

生駒翱翔、全關東各版編輯安村省三兩先生の好意と、七日會員諸氏の深き盡力とを感謝して自序とする。

報知新聞前橋支局にて

曉 湖 識

大正二年九月

目次

一、兩市の地理的關係……………	一							
(一)大利根の流を挾んで群馬縣を東西に分割す……………	(二)前橋を利するも大利根にして亦害するも大利根の激流也……………	(三)高崎市の交通機關は果して同市を利し居るか……………	(四)前橋の發展は人力に依り高崎市の發展は地の利に依る……………					
二、兩市の歴史的關係……………	一一							
(一)代々の武將前橋を政治的重要地となす……………	(二)家康が親藩を前橋に封じた理由……………	(三)高崎市が關東の商權を握つたのは地の利に依る……………						
三、水と兩市の關係……………	一九							
(一)豊富な水を有する前橋は飲料水の缺乏に苦んで居る……………	(二)高崎市の水道施設は市民が覺醒し居る證據だ……………							
四、兩市の氣風……………	二二							
(一)上州名物鳴天下と空つ風……………	(二)兩市民果して自覺せる哉……………							
五、兩市の財政經濟……………	二八							
(一)高崎市民の負擔額は前橋市民の一倍半也……………	(二)前橋市民の負擔額は金持に薄く高崎は之に反す……………	(三)……………						
六、兩市の産業……………	三七							
(一)數字上で見た兩市の産業と輸出入額……………	(二)前橋製絲業の發展及高崎織物の今昔……………							
七、兩市の銀行會社……………	四五							
(一)前橋市に於ける銀行會社の營業狀態……………	(二)高崎市に於ける銀行會社の營業狀態……………							
八、電燈會社……………	五三							
(一)兩水力電氣の比較……………	(二)利根發電會社の創立……………	(三)高崎水力電氣の創立……………	(四)兩電氣會社の重役……………	(五)利根發電の經營者……………	(六)高崎水電の經營者……………	(七)利根發電の營業狀態……………	(八)兩會社將來の運命……………	(九)兩電車の比較……………
九、兩市の旅館……………	八五							
十、兩市の將來……………	八七							
十一、前橋の神社佛閣……………	九〇							
十二、前橋の名所舊蹟……………	九二							
十三、高崎の名所舊蹟……………	九四							
十四、兩市の新聞界……………	九八							
(一)地方新聞と東京新聞の關係……………								

十五、兩市の花柳界

- (一)前橋三ヶ町艶史……(二)前橋の料理店と見香の變遷史……(三)高崎花柳界の沿革と變遷……(四)高崎見香の變遷略史……(五)外形上の進歩と内部の墮落……(六)當世流行の早判りは私娼と對抗の必要か……(七)兩地藝妓の收入一ヶ月平均七十圓……(八)兩地藝妓一ヶ月の支出如何……(九)兩地藝妓の比較、踊は高崎藝は前橋……(十)兩市花柳界の代表的藝妓……(十一)兩市花柳界現在藝妓の比較

十六、兩市の料理店

十七、四季の伊香保

- (一)伊香保温泉略史……(二)初夏の伊香保……(三)眞夏の伊香保……(四)秋の伊香保……(五)冬の伊香保

十八、大光院吞龍寺

- (一)位置と參拜の道順……(二)兒育吞龍出來記……(三)寺運再興の功勞者

十九、各地の温泉

- (一)四萬温泉……(二)草津温泉……(三)磯部温泉

二十、兩市の代表的人物

前橋と高崎

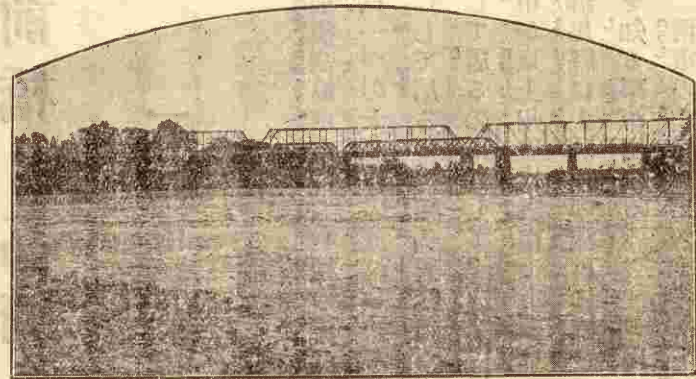
栗田曉湖著

一、兩市の地理的關係

(一) 大利根の流を狭んで群馬縣を東西に分割す

前橋高崎兩市は大利根の流を挟んで僅かに二里、瀛車で往來すると十分間であるが、只一つの大利根の流を挟んで居る爲めに、市民の氣風から市の状態が全然其趣を異にして居るのは頗る興味ある現象である、前橋市が群馬縣の政治的中心地として發展して居るのに對して、高崎市は群馬縣商業の代表者として活動して居る、と同時に前橋市が東上州の代表市であるならば、高崎市は西上州の首都とも見る事が出来る、即ち群馬縣は大利根の流に依つて東西に分割され、各々異つた方面に發展しつゝあるのを知る事が出来る。

兩市の差異はザツと東京と大阪であらう、東京が帝國の首都として政治的中心地で



利根鐵橋

あるのに對して、大阪は商業的代表市として其名を語はれて居る如く………で畢竟前橋と高崎の關係は恰度東京と大阪の縮少圖とも見る事が出来やう………更に前橋が赤城山の麓に位置を占て居るのに對して、高崎市は榛名山を背負つて立つて居る。而して赤城の雄大と榛名の秀麗とは最も好く兩市の性格を實際的に證明して居る、即ち赤城山は何處迄も男性的である、熱血のであるが、榛名山に至つては處女的で優しく又冷やかな美人的である。前橋の市民は此赤城の男子的熱血の氣を受けて育てられ、所謂上州男子の氣概を以て居る丈に兎角感情に走り易く、其活動振は政治的趣味を帶て居るが、高崎市に至つては榛名山の處女的な優しい氣に依て育てられて居るから、其心は頗る冷靜で

眼前の利を見るに敏、其活動には必ず利害問題が伴ひ商業的趣味を持つて居る。斯の如くして前橋と高崎とは數百年來大利根の中に挟んで、兩々相對し互に弟たり難く兄たり難き地位を占て居つたが、社會の進運に伴ふ人智の發達は果して何時迄も兩市をして大自然の力にのみ任せて置くであらうか？人智の發達は遂に此大自然の力を壓し去り、數百年來の歴史的關係を打破し、地理的關係の上に一大變動を與ふるが如き事はないであらうか。研究子は此結論を得んが爲め現在の前橋、高崎兩市の比較研究を試みんとするものであるが、此試みを實行するに當つては餘りに世間に知られ過ぎた事實であつても順序として前橋、高崎兩市の歴史の大略を記さねばならぬ。

(二) 前橋を利するも大利根にして害するも亦大利根の激流也

前橋は群馬縣の中央から稍南關東平原の盡頭に位し、赤城山を背景として關東平原の展開を見せ、大利根の流れから引水して居る二大用水の廣瀬川は、市の中央部を貫流し、桃木川は其東部を流れ、又其支流は市内到る處水の前橋を形成し、其面積は東西三十二町南北一里廿三町、〇、七四六方里三百四十八萬二千五百四十五坪に達して居る、

高崎は上毛の中央から稍西方に位して、前橋と共に關東平原の主力を此處に集中し、烏川の激流は西北地方から舊城跡斷崖の南方を流下して神通川に合し、大利根の前橋に於けると同一の形を現はして居るのも奇なる現象と云はなければならぬ。而して其面積は方〇、二九里、坪數百三十四萬九千四百五十五坪で東西一里南北一里二十町に達して居るが、其面積に於て高崎が前橋の半分にも達し得ないのは、前橋には多くの村落を含んで居るが、高崎市には殆ど其附近の村落を市の區域中に加へて居らぬが爲めで、一面から見ると前橋よりは高崎の方が比較的人口が稠密であるとも見る事が出来る。と同時に前橋には市の領域中に尙ほ多くの戸口を増加せしむる餘裕を存して居るが、高崎に至つては市其物には既に戸口を増加するの餘地が極めて少い、即ち前橋は現在の儘で尙多く發展の餘地があるが、高崎には附近の部落を市の區域内に編入せざる限り發展の餘地に缺けて居る。

然も之を交通機關の上から見るといふか、前橋には市の西部に大利根の激流が關東平原を二分して、交通機關の發展を阻害する事が頗る大である、若し前橋にして利根川と云ふ大難物がなかつたならば、舊日本鐵道の起點の如き又は信越線の起點の如き

何れも高崎を中心としないで、當然前橋迄延長され前橋は是等交通機關の分岐點となるのであつたらう、然るに大利根の難工事を控へて居るが爲め、當然來る可き交通機關の全部を高崎に奪はるゝに至つたのである、否前橋が關東商界の覇權を握る事が出來得ないで之を高崎に奪はるゝに至つたのも、亦此大利根の激流が交通機關の發展を阻害した爲めで、勢ひ前橋市は此商業に代る可き工業と政治とを生命として發展するの止むべからざる運命を賦與せられたのである。

斯の如くして一面に於て大利根の流れが前橋の發展を阻害して居る事は頗る莫大であるが、又一面に於ては之に依つて前橋の受けて居る利益も宏大なものである、實に前橋は本縣の政治的首都であると共に工業的中心地たる可き運命を持つて居る、前橋に於ける製糸業の異狀な發達の如きは實に此大利根の賜物である、大利根から分流失れた水の賜物である、若し前橋にして此水がなかつたならば恐らく高崎の半分も發展する事は出來なかつたかも知れぬ。

嗚呼眞に前橋發展の障礙を爲すものは大利根の流れであつて前橋の發展を助くるものも亦此大利根の流れである、然らば大利根の流れが前橋を利する事と害する事と果

して何れが大であらうか。

(三) 高崎市の交通機關は果して同市を利し居るか

前橋の發達が利根川に依つて助けられ、又其發展の幾分が利根川に依つて障礙を與へられて居ると同じ様に、高崎市の發達は交通機關即ち鐵道に依つて助けられ、又此鐵道に依つて障礙を與へられて居るのも面白い對照である、即ち高崎の交通は東は上野高崎間の官設鐵道で東京市に達し、西北は信越線並に北陸鐵道で長野、新潟、富山の三縣に通じ、又中央線に依つて名古屋から京阪地方に迄達するの便を得て居るのみでなく、篠井線に依つて南信及山梨縣にも至る事が出来る、更に兩毛線は栃木縣と連絡を取り上野鐵道は上甘樂郡の連絡を保ち、高崎電車に依つて天下の勝地伊香保と連絡して居るが、高崎市を起點とする鐵道は四線の多きに及び、何れも高崎の周圍を包んで恰も高崎は是等の鐵道に依つて村落とを區轄されて居る。

斯くの如く高崎が廢藩後縣下首都の資格を備ふ可き縣廳を前橋に奪はれ、之に附屬せる總ての官衙も亦前橋に奪はれて居るのにも拘らず、依然として前橋と共に上毛の二大都市として、同一勢力を保ち得る所以のものは即ち此交通機關の賜物であるが、

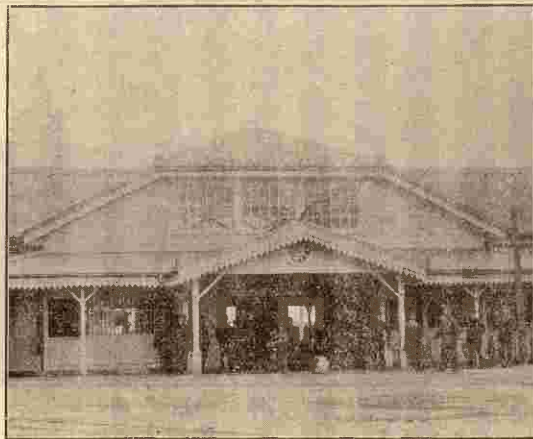
同時に此餘りに發達した交通機關が又高崎を害して居る事は蓋し少々ではない、即ち此交通機關の發達しない時代に於ける高崎は關東の大市場で、信越方面富山方面に至る間の商人は何れも高崎に來て各種の商品を買受けて居つたのが、交通機關の發達と共に是等諸商人は何れも商品を買受けて居つたのが、交通機關の發達した結果、高崎は漸次小賣商に變ずる運命に際會して來た、即ち高崎は漸次其商業の範圍を交通機關に依つて狭められて居る。

今一つには前にも言つた通り高崎は市の三方が鐵道線路に依つて取圍まれ、西の方には烏川に依つて遮斷されて居るが爲めに、市の領域を擴張して其發展を助くる上に於て少からぬ不便を感じて居る、即ち高崎の南北東の三面は市に連絡した平地であつて發展の餘地尙充分であるが、是等三方面とも市と村落との境に鐵道線路がある、何れの市を見るも左様であるが、市の發展なるものは鐵道線路を越えて發展する事は極めて稀である、即ち現在の高崎市が發展の餘地の最も多い地域の南と東の方面には多くの發展を見る事が出来ないで、狭い地域の北へ北へと細長く家屋が増加して行くのも此鐵道の障礙が南と東に多い爲めである、北部も鐵道はないでもないが、是は市街地と

同じ平地に敷設してある爲め其及ぼす障碍が比較的尠い結果である、夫でも尙他の都市に比較するも市の區域が廣まつて行く程度は極めて遅々として居る。
嗚呼前橋は大利根と云ふ水に依つて助けられ又水に依つて障碍を與へられて居るのに對して高崎は鐵路に依つて助けられ又此鐵路に依つて惱まされて居る、其對照奇とすべきではあるまい乎

(四) 前橋の發展は人力に依り高崎市發展は地の利に依る

何處の市街地でも停車場前の光景に依つて、其市の實力並に發展力の如何を窺ふ事が出来ることは、常に市勢研究者の口にせられる處であるから、兩市の比較研究をなすに當つても、亦兩市の停車場前の光景を述べて置く必要があると思ふ。
初めて前橋驛に下車したものは滿洲か朝鮮の平原地に見る新設停車場を想ひ起すであらう、實際前橋の停車場前は五萬の人口を有し群馬縣の首都として餘りに殺風景である、餘り廣からぬプラットホームを改札口に出で直ぐ目に映るものは二三の襍らししい休憩所兼帶の旅館と、四五の運送店と不作法に出来上つたパタク式の前橋電車庫で、停車場通り本町の曲り角になつて居る油屋旅館前に至る迄數町の間には、只



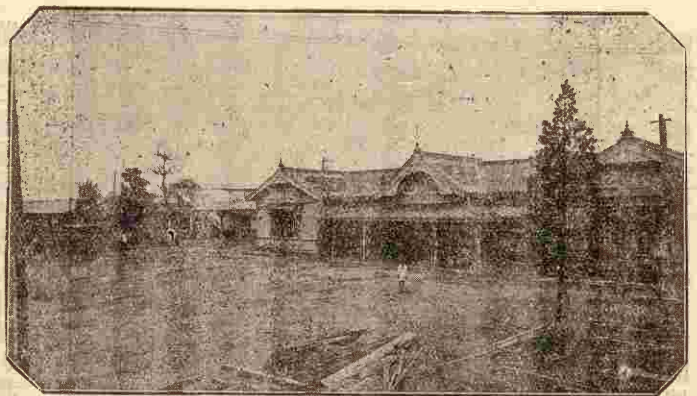
高崎停車場

前橋の停車場前が恰も新開地の停車場のやうな感じがするに反し、高崎の停車場前は

僅かに前橋稅務省の洋館が我は顔に捺へて居る外は十數軒の民家があるのみ、其他の

土地は麥畑でなければ雜草の繁茂つた荒地のみである、是が群馬縣の首都として五萬の人口を有する市の玄關口とは思はれぬ程の見窄らしいものである。

夜の九時過には僅かに一町置きに點火された電柱の薄暗い光りで往來を照して居るのみで、東京の場末を見るより尙寂しく、恰度野中の一寒村でも見る様な思がする、而かも之が既に二十有餘年間殆ど同一状態で、廿有餘年間の永い年月何等の發達も何等の進歩もして居らぬ、依然として舊態を存して居る處を見ると、前橋の前途が思ひやられるではない乎。



前橋停車場

大に其趣きを異にして居る、先づ瀛車を降りて停車場のプラットホームに靴跡を印すると共に目につくものは、中央線と信越線の分岐点となつて居る丈に停車場の構造の宏壯な事である、此停車場の構へのみを見た者をして前橋と高崎は批評せしめたなら恐らく何人とも前橋と高崎との勢力が相白仲して居ると見るものはないであらう。

更に改札口を出ると停車場前には二三の此市に耻かしからぬ旅館と待合所とが行儀よく立列び之と並行して兩側には各種の商店及び運送店が軒を連ねて市中に接続し、恰も高崎市の繁榮を語つて居るかと思はれる前に言つた通り停車場前の光景如何が其市の發展力を示すものであるとの断定を眞理としたならば、高崎の方が前橋に比較して發達力を有し多くの實力を有する事となる可筈だが、果して前橋と高崎との實際は如何

であらうか、研究子は此問題の解決を實際に上兩市の人口の比較によつて見やうと思ふ

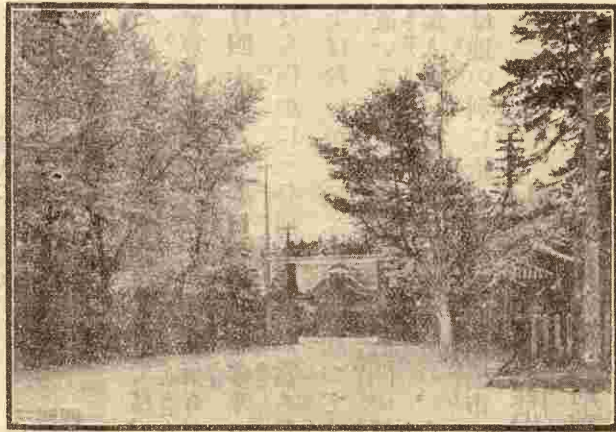
三十六年	前橋人口	四、四六六	高崎人口	三、五七三	前橋人口	四、三六五	高崎人口	三、〇七〇	
三十九年	前橋人口	四、九四六	高崎人口	三、七二九	三十七年	前橋人口	四、七五五	高崎人口	三、七四七
四十二年	前橋人口	五、二二五	高崎人口	三、九三〇	四十年	前橋人口	四、八七〇	高崎人口	三、九五一
大正元年	前橋人口	四、〇〇六	高崎人口	四、八三三	四十三年	前橋人口	四、〇七〇	高崎人口	四、〇七〇

右の如く明治三十六年に於ては、前橋の人口は高崎に比較して七千〇八十二人の多きを算して居つたのが、大正元年には六千三百三十三名となり、十年間に高崎市の方が九百四十九人丈人口の増加を多くせしめて居る、九百四十九人は四萬の人口に比例したなら僅かに三分何厘にしか當らない、停車場前の整頓して居る割合には發展力が少いではないかと云ふ疑問が起つて來るが、是れには大に理由がある即ち高崎は放任して置いても或程度迄は交通機關の爲めに發展する運命を持つて居るが、前橋の發展は飽迄人力に待たなければならぬ、自然の發展を希望する事は出來ぬ、之を要するに高崎は地の利に依つて發展し前橋市の發展は一に市民の努力に依る。

二、兩市の歴史的關係

(一) 代々の武將前橋を政治的重要地となす

前橋市は其昔厩橋と云つて今の佐波、新田の兩郡を經下野國足利郡に通じ、更に東北



なつた時、上野國には業平朝臣の後裔長野左衛門尉宗覺が箕輪城に根據を定め、厩橋

に至る官道の一驛路であつた事又は古記にも現れて居るが夫れ以上の事は知る由もな

群馬縣廳即舊城跡眞窟

い、最も關東平原を東西に分割して居る大利根の流れが萬葉集にも見えて居る處から察するに、關東の大平原中に大利根の流れも清く、右手に榛名左手に赤城の兩峯を控へた雄大な光景は頗る詩趣畫興に富んで居る處として多少其名を知られて居つたには相違ない、が然し恐らく此時代は野武士共の荒すに任せ、之を取締る可き領主も亦領主の住む可き城廓もなかつた事は察するに難くはない此誌趣縦横、畫興横溢の土地が武備上にも政治上にも關東の一大重要地として認められて來たのは應仁の亂以後の事である、帝都永く兵燹の巷と化し、公卿百官流浪の運命に陥つて諸國に散々に

城は其出城となつたのが抑も前橋に城の出來た最初で、夫れより應永の世迄三百年、牧笛の一寒村は漸次市街の形をなして來た其後文明十二年に至つて太田道灌が管領上杉憲政の命を奉じて築城したのが凜々しい武裝の始まりで、戰國時代に至つては北條武田、上杉三家爭奪の中心點となつて居つたのは疑ふ可くもない、と同時に此時代から前橋は關東に於ける政治上の重要地點として認められて居つたのを證據立てる事が出来る。

天正十年織田信長が武田勝頼を天目山に滅して此方、此地に瀧川一益を封じし關東の管領となし、天正十八年徳川家康關東を領するに及んで、其臣平岩親吉を封ずるに三萬石を以てし、關東軍團の監軍としたが、義直が甲斐に封せらるゝに及んで親吉は其傳となつて甲府に轉じ、武州川越の城主酒井河内守重忠之に代り封三萬三千石を受けて居つたのが、其子雅樂頭忠世老中に列し十萬石の加増を受け其子忠行、忠行の子忠清二代に八萬石を加増され總高二十一萬三千石の大諸侯となつた、而も其昔重忠が此地に封せらるゝに當つて、家康は「汝に關東の華を興へん」と謂つたと傳へられて居るのを見ても、如何に代々の武將が前橋を重要視して居つたかを知る事が出来る

が、今築城以來の城主を調べて見ると。

- 初代 太田美濃守資持(上杉家)
- 二代 長尾彈正鎌忠(上杉家)
- 三代 北條丹後守長國(北條)
- 四代 北條安房守(北條)
- 五代 西條治部少輔(武田)
- 六代 瀧川左近將監一益(織田)
- 七代 松田兵部正明(北條)
- 八代 平岩主計頭親吉
- 九代 酒井河内守重忠

(二) 家康が親藩を前橋に封じた理由

酒井河内守重忠が前橋の城主となつた頃は、既に豊臣秀頼は大坂城に滅亡して天下は徳川の政治の下に、弓は袋に刀は鞘に治まる春ど目出度き泰平の時代であつた、二代雅樂頭忠世、三代阿波守忠行、四代雅樂頭忠清、五代雅樂頭忠舉、六代雅樂頭忠相、七代雅樂頭親愛、八代阿波守親本、九代刑部雅樂頭忠恭に至る迄、殆んど代々老中に列し幕政に參與して居つたが寛延二年公用人犬塚又内、國家老本多民部左衛門と共に雅樂頭忠恭を説き播州姫路に國替をなさしめむとした時に、忠臣無二の河合勘解由左衛門は腹黒き兩人の計畫を見破つて涙乍らに忠諫して言ふ様

家康公の上意に、關東の花を汝に取らす、前橋は江戸表の繩張を以て取立し事なれば比類なき城なり、必ず永代所替致す可からずさあり依て當君迄九世幕府の藩屏として忠勤を擡でられ次第に加増ありて今は十五

萬石を領せらるゝに至る、故に一朝事あれば諸藩に率先して幕府を護らるゝこそ當家の職分なるべし、然るに遠く姫路へ移りては緩急何の用をか爲さん

と然し勘解由左衛門の苦諫も其効なく遂に酒井家は姫路に國替となつたので、勘解由衛門は姫路に於て犬塚、本多の兩名を斬つて捨て自分は潔く割腹を遂げた、頭井家に次で前橋の城主となつたのは松平大和守であつた、明治維新となつて藩政は廢止され二十二年町村制施行と同時に前橋町となり廿五年市制を布いて現在の前橋市が成立したのである。

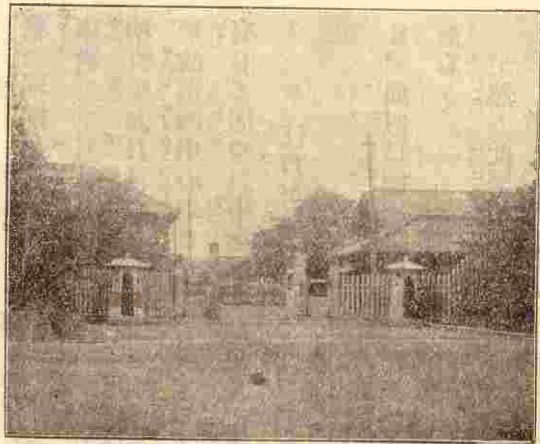
前橋の戰國時代北條、上杉、武田の武將連が爭奪の中心地となり織田信長は其四天王の一人瀧川一益を此の地に封じ、徳川氏の代となつて酒井家と云ひ松平家と云ひ、何れも其親藩を此の地に封じたる如き前橋が關東の軍事上政治上に如何に重大視せられて居たか判る、高崎市に至つては往古から東北と江戸との交通の要點を占め軍事上亦決して輕んず可き土地ではなかつたが、未だ今日の如く文明の機關の備はらなかつた時代に於ては、寧ろ平原中の裸体城で敵の爲めに攻落される危険が多かつたに違ひない、それに反して前橋城は背後に大利根の激流を控へ、それを利用して築城した丈

けに數千の兵、數萬の大軍を引受けるも敢て難事ではなかつたであらう、家康が酒井松平等の親藩を此地に封じた魅膽は、一朝變事を生じて交通の要路に立つて居る高崎城を敵の爲めに奪はれ、敵軍が江戸に向つて攻寄する事がある際には、前橋として其背後を壓せしめ、江戸の軍勢と共に之を挾撃させ様とするの周到なる用意から出たものであつたかも知れぬ。

何れの點から考へて見るも前橋が昔から關東の重要地と目せられて居つたの一點の疑を挾む可き餘地もない

(三) 高崎市が關東の高權を握つたのは地の利に依る

中古時代に於ける高崎市は赤坂莊と稱へた微々たる一部落に過ぎなかつたのが、鎌倉時代の始め即ち順徳天皇の建曆三年、和田義盛が北條氏の專横を憤つて之と兵を合せたが戦利あらずして戦没し、一門亦多くは戰場の露と消えた時義盛の八男義國獨り重圍を脱して群馬郡白川郷に潜み、後堀川天皇の寛喜二年に赤坂莊に移り、其子正信に至つて大に郷黨から敬慕され、茲に和田の家名を再興し、其孫信高の代になつて赤坂莊を改めて和田宿と命名し、正長元年に至つて和田義信始めて城を築いたのが即ち



今日の高崎城の濫觴である、義信の子孫は上杉北條武田三氏の旗下となり、漸く繁榮

を來たして居つた天正十八年小田原落城と共に滅亡した。

徳川家康が關八州を領して後數年、慶長三年に高至りて中仙道が開通され、和田宿は江戸と信越方面の交通の要路に立つ様になつたので、家康は時聯の箕輪の城主井伊直政をして和田城址に築かしめ即其城主とした、茲に於て直政は地名を高崎と改め舊城街路を拓き町の區割を定め溝渠を通じ、箕輪の民を移して今日の高崎市の基礎を完備した。

其後城主を交代する事數代に及んだが、關東人が善光寺に至るには必ず高崎市を通過し、又信越方面の人々が江戸に出づるにも此地を通過せなければならぬ交通の要路に當つて居るのに加へて、財力の豊かな近在を數多く有して居つ

たので、高崎は古くから此地の利に依つて關東の商權を握るに至り、四方の商估が此
 樞要の地に蟻集して漸次大市街を形勢した、加ふるに代々の領主亦高崎市が商業上關
 東の霸權を握る可き自然の運命を擔ひ居るを觀取し、之が奨勵をしたのは疑ひもない
 事實で、彼の元祿三年八月藩主補助の下に田町へ染織市場を設立したる如き、又天
 明五年九月法令を發布して仲買申合せ規約十二ヶ條を制定せしめたるが如き、高崎市
 が政治的中心地として發展するよりも、商業的重要地として發展す可き自然の運命を
 有して居つた事を知るに足るであらう 當時信越方面を旅行したもの、唄に

江戸が見た、ば高崎へござれ

上州高崎や江戸まさり

と、如何に徳川幕府時代に高崎市が繁昌して居つたかは此の俗諺で知る事が出来るで
 あらう。

が然し此繁昌なるものは決して政治上から來た繁昌ではなく、商業上の重要地點と
 なつて居つたが故で、其昔から江戸に比較するよりは寧ろ大阪に比較す可き者であつ
 た、往時に於ては關東人で大阪を知つて居るものは極めて稀で高崎を知つたものが亦

關東人であつたが爲めに、高崎の繁昌が江戸に比較されたのであつた。

三、水と兩市の關係

(一) 豊富な水を有する前橋は飲料水の缺乏に苦しんで居る

前橋も高崎も共に其固有名詞が既に水と離れる事の出来ない關係を有して居る、然も
 其關係は切つても切れぬ縁である、前橋は此水の爲に苦しむ此水の爲に楽しんで
 居るのだが、尙前橋と水との關係は京都の鴨川に於ける様な優しい間柄ではない、寧
 ろ東京の隅田川に於けるが如く前世からの悪縁である、大利根は西から來て南に流れ
 て居る、前橋市は水に於て何等の不便不自由を感じない筈である。
 足一度前橋の土を踏んだ者の羨望して止まないものは其發達した製絲工業でもなけれ
 ば、雄大な赤城の山でもなく此豊富な水力である、實際前橋は此豊富な水力に依つて
 生活して居ると云つても敢て過言ではなからう、前橋は縣下生絲業の中心地である、
 前橋と云ふ名に依つて聯想されるものは其發達した製絲業である、此發達した製絲工
 業を有する前橋が尙比較的多くの煙筒や、蒸氣機關を見る事の出来ない所以のものは
 即ち此水あるが爲めである、眞に前橋は蒸氣の都ではなくて水力の市である。

斯の如くして水力は好く前橋を活すものではあるが又此水が一面に於て前橋を殺すものである、即ち水力は之を文明的に利用する事を考へなかつたなら、文明的に出来た蒸氣力と其力を競争する事の出来ぬのは當然で、前橋市の生産業が其大部分個人的で、其規模の極めて小なる所以のものは即ち此水力を文明的に利用する事を知らない爲めである、然も見よ、大利根の激流一度怒れば堤防を破壊し、田地田畑を押し流して市民の財布亦之が爲めに軽くなるのを感じるに至つては、現在の大利根の流れが前橋を益するよりも寧ろ害する事の大なるもので、屢々群馬縣の首都の運命を危くする魔流であるとも言へやう。

然も尙此豊富なる水を有する前橋が一方に於ては水なきに苦しんで居ると言つたなら、前橋の實際を知らないものに取つて頗る不可解な現象と思ふであらうが、此豊富な水を有して居る前橋が、水無きに苦んで居るのは實際である、即ち水の前橋に住して飲用水に不足を感じない處は神明町の一部から桑町、本町、向町、紺屋町、榎町、立川町の如き西北部のみで、其他前橋三分一の東南部には全然飲用水が缺如し、近きも一二丁遠きは十數丁の處から飲料水を運搬して居ると云ふ有様、尙且つ夫れも不可

能な處では桶の中で砂を溜り石を滑り塵埃多き汚水に味を付けたもので、水の前橋に住居して居ながら水に困難するが如きは實に本氣の沙汰ではない、而かも、文明の今日此豊富な水を善用し得ない前橋市民は無氣力であるか將亦退嬰主義者の群か？

(二) 高崎市の水道施設は市民が覺醒し居る證據だ

前橋が大利根の流れを有して居る様に高崎は烏川の流れを控へて居る、昔の高崎は此烏川の水流を利用して商業的中心地となつたので、奮時信越方面の米穀及び諸物貨は高崎に集まり、更に烏川に依つて京阪地方に搬出され、信越方面の需用を満たす可き食鹽は亦此烏川に依り高崎を経て信越方面に輸送されたものであつた。

が然し斯の如く豊富な水を有して居つた高崎市民は、昔から又前橋と同じ様に飲料水の缺乏に苦しんで居つた、然も前橋は三分の一は不便だとは云ひながらも、其儘使用に堪ゆる井水を有して居つたが、高崎は全市殆ど飲用水に苦しみ、何處へ行つても桶の中で人工を施した水しか飲む事が出来なかつた、高崎が關東唯一の交通の重要地点を占め、其商權を握つたが更に進んで烏川の豊富な水力と此交通機關とを利用して工業上の重要地となる事が出来なかつたのは、即ち他にも種々なる原因が存して居る

のは云ふ迄もないが、清涼水の缺乏が確かに工事の發達を阻害した大なる原因であるに違ひない。

然るに星移り物變り現今では高崎が昔の様に地の利を占めては居るが爲めに、自然的に獲得した商權を交通機關の完備した今日も尙依然として掌握する事は不可能な問題となつて來た、即ち全國の交通機關が完備し、信越方面の商人が高崎との取引を廢して原産地から諸物貨の買入れをなす事となつて、高崎の商業は一日も其版圖を狭められ、現今では問屋商賣を廢して小賣商人に變じて來た、と同時に高崎市は自然に放任して置いても發展した時代の夢から醒め、高崎の發達は人力に依る時代となつたのに想到した、高崎を人力に依つて發展せしむる言へば、商業地から工業地に變ずるの外はないが、其前に於て之をなす可き根本問題たる清涼水を如何にするかの問題を解決しなければならなかつた。

此結果として久しい間の宿題となつた高崎の水道工事は、明治四十年頃其計劃に着手し四十三年十月竣工を見るに至つた其工事費豫算は五十八萬圓であつたが五十四萬圓で出來上つた、高崎水道の水源は烏川の上流碓氷郡佐和村で、高崎市迄約三里である、淨水所を其中間に設けて自然流下ではあるが尙其壓力は常に七十五封度を保つて居る、給水量は一人一日二十瓦を使用するとしても尙五万人の需用を満たす可く充分である、で高崎從來の人口増加率から見れば今後十年間は此儘でも高崎は水に不便を感じる様な事はない、高崎が此水道を敷設した所以のものは其飲料水の缺乏が直接原因をなしたものであるが、將來の高崎は只單に自然に來る可き運命を待つて居る事が出來なくなり、時代は高崎をして人力的發展に向はせたのを證據立て、居るのである。

四、兩市の氣風

上州名物嬾天下と空つ風、兩市民果して自覺せる哉

『上州名物嬾天下空風』……昔から言ひ來つた定套語ではあるが此一語、如何に上州氣質を言ひ盡して居るであらうか、三國峠から吹き下す雪を含んだ風が身邊三尺を胃すの時、住馴れぬ都人をして如何に物恐ろしく感せしむるであらう、と同時に又其内房の勢力の強大なるには一驚を喫するであらう、が然し考へて見ると上毛の生命であり又兩市の生命である殖産事業即ち製絲でも織物でも何れも女性的の仕事である、織

密な女子の手で製産されて居る、上毛の殖産界から此二ツの女性的製産品を奪つたならば上毛殖産の生命は失はれる事となるのだ、否換言したならば上毛の天地から女てふ物を取去つたならば其生命の七八分を失なつて了ふ事になるのだもの、嬭天下が上州名物と言はれるに至つたのも無理からぬ次第である、と同時に茲が上州人の偉い處であるかも知れぬ、即ち彼等は産業發達の爲めに、否上毛の生命の爲め方便として嬭天下を世に謠はしめ、虚榮に満ちて居る女子をして勞力を惜ましめぬ方便に使つたのではあるまいか。

前橋と高崎とは上毛の天地を二分して其氣風を代表するものである以上嬭天下の特長を離れる事は絶対に不可能である、實際に於て兩市は女學生だの所謂新しい女よりも工女が多い、否實用的で經濟的な女が多い、極端に言つたならば兩市の女には伊呂波のいの字は知らないでも絲のいの字機械のはの字を知らぬ者は稀であらう、實際兩市の女は机に寄る事よりも絲挽鍋に向ふ事が機械臺に登る事の方を前に教られて居るのだ甚だしいのになると女子教育とは絲挽を教へ機械を習はせる事と解釋して居るものも尠くはないであらう！或は中流以下の娘になると絲取る事が機械の事を知つて居らな

かつたなら嫁に行く資格に於て缺けて居るが如くに思つて居るものも尠くはないだらう此觀念が女の頭に殘つて居る間は……此習慣が兩市に在る間は兩市の女から嬭天下たるの勇將を奪ふ事は出来ぬと同時に兩市の殖産事業の前途も亦悲觀す可きではない。兩市の女が生産的である、兩市の女は花顏柳腰的美婦人が尠くて下女の否勞役的である好實例は特に花柳の巷に於て之を認める事が出来る、即ち兩市の料理店の女中に於て之を認める事が出来る、實際兩市の料理店には美しい女中が極めて稀である、否殆んど皆無と言つても宜い位だが、之は聽て兩市の女が女中となるよりも工女となる方が利益が多いからである、否永い間の習慣性は女をして女中たらしむるよりも、工女たらしむる方が喜ばれて居るのである、即ち兩市の女は不生産的に仕上げる事は好まれて居らぬのである。

前橋は本縣の政治的中心地であると同時に産業の中心地であるのに對して、高崎市は本縣商業の代表地である事は前にも云つた通りであるが、從つて前橋の人間が事業に向つて進んで居る傾向は放膽的である、其行方は幾分政治的色彩を帯びて居るが、高崎市民の進み方は何處迄も商人根性である、華々しい活動をしなない代りに際

立つた成功を見る事は出来ぬが、然し何處かに堅實な處を見せて居る、之と同時に前橋市の人間は近來頗る共同の力の必要を認めて來て居るが、高崎の人間に至つては今尙其多くが個人主義に傾いて居る、特に此傾向は高崎の元老即ち老人組の方に多い、尤も若手の活動家は時勢の要求と共に協同一致の必要を認めて居るが故に、前橋も高崎も若手の側に於て甚だしい差異を認める事は出来ぬが、老人の側に至つては個人主義で堅められて居るとも見る事が出来る。

由來高崎市は前橋市に比較して自然の力を受けて居る事が大である、即ち彼等は天然に地の利を占めて居つたので放任して置いて、或程度迄は自然に發展す可き運命を有して居つたが、前橋市は昔から市民が協同して發展の方法を講じなければならぬ運命を有して居つた、此点に就ては確に前橋市民中には自覺を有して居つたものが多い様である、前橋の各種事業の跡を辿つて見ると常に資産家が其發動の中心地となつて居るのにも之を證明する事が出来る、更に故下村善太郎氏や竹内勝藏氏等が一身の利害を度外視して、市の爲めに働いた功勞は前橋公園に銅像として永く市民の忘れぬ事の出来ぬ事實ではない乎、實際前橋市は是等有志の偉大なる

力に依つて今日の勢力を維持する事が出来たのである、若し明治の初年時代に於て前橋市に市の前途を思ふ篤志家がなかつたならば、恐らく今日の前橋市は天然に地の利を占めて居る高崎市の爲めに行政機關の全部を奪はれて、群馬縣の首都たるの光榮を擔ふ事は出来なかつたであらうと思ふ、即ち前橋市は自覺せる市民に依つて今日尙地の利を占めて居る高崎よりも常に一步を進めて居る事が出来たのである。

高崎市民に至つては有力家は何れも相當の仕事をして居るが、其の活動力は何れも個々別々で一致する力が極めて尠い、天然に地の利を占めて居る高崎市に於ては從來餘りに多く協同一致の力を必要としなかつたのである、彼等は餘り天與の恩澤に馴れ過ぎて、個人主義に化せられて居るのだ、即ち高崎市民の個人主義は高崎市民其者の罪ではなくて、賦與された地の利に依つて生ずる罪であるが、果して高崎市民は今後永久に此天與の地の利を占むるに安心して眠つて居る事が出来るであらうか？ 否今や確かに、高崎市民は其の自覺期に入つて居る、時勢の變化と交通機關の發展とは將來の高崎市を決して従來採り來つた商業のみで進んで行く事は出来ぬ商業政策から工業方面に一轉化す可き機運に向つて居るのである。

五、兩市の財政經濟

(一)高崎市民の負擔額は前橋市民の一倍半也

前橋市に市政を施行したのが明治廿五年四月一日からで、高崎市は之に遅る、事八年の明治卅三年四月であつたが、今最近十年間に於ける兩市の歳出決算を見ると次の様である。

年	前橋市之部		高崎市之部	
	歳出額	一人平均額	歳出額	一人平均額
三十五年	五、七〇七	一、六四七	七、三三三	二、三〇五
三十六年	五、〇三八	一、六三三	七、七四四	二、二八〇
三十七年	五、〇三八	一、四四七	六、四八七	二、一〇〇
三十八年	五、二五五	一、二四七	六、五五五	二、一四四
三十九年	五、八〇六	一、一八三	六、三三六	二、三九〇
四十年	七、〇〇〇	一、二八二	六、三三六	二、三三六
四十一年	七、六五七	一、六八八	七、八三六	二、三三〇
四十二年	九、九一〇	一、七六一	三、三三六	三、二一一
四十三年	一、九七、六六一	三、四六八	四、七〇四	二、七三三
四十四年	一、八二、六六一	三、四四二	二、〇一、六六一	六、九六九
四十四年	三、七、〇七三	二、七、四二一	四、七、三〇一	三、七、四二一



前橋市役所

となり居りて四十二年以降の最出額が兩市共に急激なる増加を示し居れるは、共に共進會の設備並に負擔の増加に依るものにて、特に高崎市の豫算が五十萬圓以上に達し居るは水道敷設の爲めに五十六萬圓の市債を起したるに依るもので、四十二年以降三年間の決算額合計から五十萬を差引くも尙市費は前橋市と同一歩調の下に増加し居るを見るを得べく、更に大正元年並に同二年度兩市の豫算に於て之を見るに

年	前橋市 圓	高崎市 圓
大正元年	一〇五、八〇五餘	一六一、九一〇餘
大正二年	一五二、二三〇	一四、八三七

であつて、高崎市は人口及戸數の點から見ると常に前橋市に比較して六七千人少數ではあるが、市費歳出に於ては何れの年でも平均前橋市の市算額に比較して一二萬圓乃至五六萬圓多くを費して居る、従つて一人平均負擔額の如きも三

十五年度の前橋市が一圓六十四錢七厘なのに高崎市は約一倍半の二圓五十錢となつて居る其他何れの年を見ても高崎市の一人負擔額は前橋市の負擔額に比して必ず三割乃至五割の多き負擔に堪へて居るが、是は一つは人口の少いものにも依るのであるが、平均して高崎市の豫算が前橋市よりも多額に上つて居るのは争はれぬ事實である、然らば高崎市と前橋市との豫算は甚麽處に相違があるか、古い處で之を見る事は困難であるから最近の豫算即ち大正元年度及大正二年度の豫算に就て之を見ると、前橋市では大正元年度には經常部七萬三千百七十六圓八十錢、臨時部三萬二千六百二十八圓八十五錢であつたのが、大正二年度には經常部は五千九百二十圓十錢を減じて、六萬七千二百七十四圓七十錢、臨時部は五萬二千三百二十六圓五十七錢を増して、金八萬九千五百五十五圓四十二錢に増額して居るが、臨時部に於て縣立高等女學校移轉費の寄附が四萬五千七百二十一圓九十錢、及び小學校増築費一萬餘圓を含んで居るが爲めで、之を高崎市に見るに大正元年度の豫算は九萬四千八百四十圓八十一錢が、四千二百二十二圓九十六錢を減じて、九萬六百二十五圓八十五錢、臨時部六萬七千六百二十二圓一萬六千八百五十一圓十四錢を減じて、五萬二百二十一圓八十六錢となつて居るが、其れ

でも尙前橋の豫算中女學校の寄附額を減じたるのに比較すると四萬圓程の増加になつて居る。

(二) 前橋市の負擔額は金持に薄く高崎は之に反す

過去十年間に亘りたる前橋と高崎との歳出額並に一戸一人負擔額は屢に報じたるが更に大正二年度の豫算額に就て明細な比較をするのは兩市の財政の研究をする上に於て必要と信じ左に項目を掲げる。

財産收入	前橋		高崎	
	前橋	高崎	前橋	高崎
寄附金	六三三、七〇	一、七二、七三	使用料及手数料	二、三三、三〇
縣補助金	三〇五、〇〇	五、〇五、〇六	國庫補助	五〇〇、〇〇
財産賣拂代	四一、〇〇、〇〇	一、五六、一六	寄附金	六〇、〇〇
雜收	六、九一〇、〇四	四、五七四、六一	繰越金	七、〇一〇、八七
國稅營業稅附加	一一、五七、七五	七、三二、三三	地租附加稅	六、三三、三三
賣藥稅附加	七、四一	七、二五	所得稅附加	三、〇三、三三
縣營業附加	三、九四四、八五	二、三三六、〇四	家屋稅附加	四、一七、七〇
特別戶別制	四三、一六		雜種稅附加	三、〇四、三三
計			計	一三、一〇〇、三三
				一四、〇八七、七一

是に依つて兩市の財政状態は前橋市が高崎市の豫算に比較して二三萬圓位宛少額であ

つたのが、俄に其位置を轉倒して一萬餘圓の増加になつて居るが如くであるが、實際は此表の中にもある通り前橋市の豫算中には財産賣却代金四萬圓が含まれて居る、是は例の高等女學校に七萬圓の寄附をした代償として、縣から交付された舊師範學校建物及敷地の賣却代金三萬圓及外一ヶ所の土地賣却代金であつて、此四萬圓を控除すると高崎市の豫算は依然として、遙に前橋市の上に出て居る。

使用料及手数料に於て高崎市の収入が前橋市の其れに比較して十五倍に達し居れるは、水道使用料の収入が此中に含まれて居るが爲であるから別問題として、其他の收入を比較すると、家屋税附加税に於て高崎市の前橋市の下位に居る外、其他の諸税では前橋市の倍額を算して居るが、之は果して前橋市民が高崎市民に比較して負擔力に富んで居るが爲めかどうか、平均の賦課率に依つて見ると是は前橋市民の爲めに悲まざるを得ない。

地租附加税に於て高崎市の宅地租金二萬三千九百五十七圓八十四錢に對して制限内の百分の九の課税をなし、其他の地租へも同様制限内の課税をして居るのに對して、前橋市は宅地税二萬五千三百圓四十二錢へ百分の十三、五で制限外四、五の賦課を敢

てし、其他の地租に於ては百分の三一、五即ち制限外一〇、五の課税をなして居る、國稅營業税附加税及び所得稅附加税に於ても、制限外十即ち百分の二十五の賦課をなし、居るのに對して、高崎市は何れも之を制限内に止めて居る、更に縣稅雜種稅附加及縣稅營業稅附加率に於ても、高崎市は百分の五十を賦課して居るのに、前橋市は百分の七十を賦課して高崎市に比較して二割の増税を負擔させられて居るが、只獨り家屋稅附加税に於ては前橋市は縣稅一圓に就き二圓九十錢一戸平均五圓二十四錢八厘の賦課をして居るのに對して、高崎市は縣稅一圓に就いて四圓五十錢を賦課して居る、之を以て見るも前橋市は市稅の徵收が比較的資産家に薄くして無資産者に重き傾きを呈して居るのに對して高崎市は之が反對の傾向を示して居る更に高崎市は小學生徒の授業料を徵して居らぬが前橋市では尋常小學生徒の授業料一人金十錢宛を徵して居るが如きは特に實際に之を證明し盡して居るのだ。

(三) 兩市民の負擔額と貯金額との比較

兩市の歳出入に就いては前號記載の如くであるが、更に國稅、縣稅、市稅の三者を合した兩市民の負擔額を比較すると、前橋の市民は大正二年度の豫算に依つて之を見る

と即ち次の様な結果を得た。

	前橋	高崎
國稅地租	三、七三、六	二、七〇、四
同所得稅	五、〇九、六	四、八五、六
小計	三、〇九、〇	三、〇九、〇
同家屋稅	一、五、五五、〇〇	二、五五、五五、〇〇
同雜稅	一、九、四四、〇四	一、六、一〇、六〇
小計	六、〇、八七、三	三、〇、五、一六
合計	三、七、八四、三	二、五、六、七、五
同營業稅	四、二五、六	四、四九、五
同賣藥稅	一、四、〇〇	一、四七、〇〇
縣稅地租制	二、九三、八	八、四七、〇、七
同營業稅	五、六〇、五〇	四、六三、〇、八
其他縣稅	八、五七、七六	一、〇、三、七、五
市稅總額	三、八三、〇一	八、三、六、三、七〇

是に依つて見ると前橋市民の負擔額は平均一人に就いて五圓九十八錢六厘であるが、高崎市は六圓十三錢に當つて居る、此稅額の負擔の點より見ても高崎と前橋との資力即ち富の力は大なる差を認める事が出來ぬが、而し前橋市の富は普遍的でなく一部の資産家に依つて握られて居る傾きがあつて、其資産は多く一ヶ所に固定して居る、縣下で一二を争ふ様な大資産家がある代りに、中以下のものに至つては其貧困の程度は寧甚だしいものがある、高崎市に至つては前橋市の様に大資産家は無いが、其富の程度は平均的で、十萬十五萬内外の資産家の數が頗る多い、是は往昔から高崎市が商

業地として活動して來たが爲めに、其資金は常に轉々として富の力も亦一般に平均されて來たのが町の景氣が前橋よりも高崎の方が活氣附いて居ると云はれて居るのも亦之が爲でもあるまいか？
然らば次には兩市の貯金額は何れものであるか今四十五年一月現在の統計に依つて之を見ようと前橋に於ては。

業種	人員	預金額
商	四、一六四	一〇三、〇八一、一一三
農	三、六六二	九〇、六五一、四四〇
工	一、四三三	二一、七六五、三一〇
雜業	六、六〇〇	一六七、三〇四、九三〇
計	一五、八五九	三八二、八〇二、七九四

更に之を預金額別に區別すると。

人員	預金額
百圓以上	八四〇
五十圓以上	五一〇
五十圓未満	一四、四九九
計	一五、八四九
二八九、〇三六、〇二五	
三八、四九〇、三五五	
五五、二七六、三七四	
三八二、八〇二、七九四	

▲高崎市にては

商業	五一九
農業	三九七
工業	二四九
雜業	三八六一
計	五、〇二六
預金額別	一〇四、八八五、一四〇
一圓以上	一五、三六七、二四九
一圓未満	一二、七四〇、二三〇
計	四九、四五五、八九〇
一圓以上	一〇四、八八五、一四〇
一圓未満	一〇四、八八五、一四〇
計	二〇九、七七〇、二八〇

更に預金額別にすれば。

百圓以上	二四五
五十圓以上	二二五
五十圓未満	四、五五六
計	五、〇二六
一圓以上	六二、八九八、一九〇
一圓未満	一五、二八九、二八〇
計	二六、六九七、六七〇
一圓以上	一〇四、八八五、一四〇
一圓未満	一〇四、八八五、一四〇
計	二〇九、七七〇、二八〇

となりて之を預金者一人の平均額にして見ると、前橋市は廿四圓十五錢三厘高崎市は廿圓八十七錢となつて居るが、預金者の數の上から見ると前橋市は市民三人に就いて一人の預金を有して居るが、高崎市は一人の預金を有するに過ぎない、更に之を全市民の平均預金額に配當して見ると、前橋の市民は一人平均七圓九十七錢一厘であるのに對して、高崎市の市民は一人平均二圓〇一錢七厘で恰も高崎市民の預金

六、兩市の産業

(一) 數字上で見た兩市の産業と輸出入額

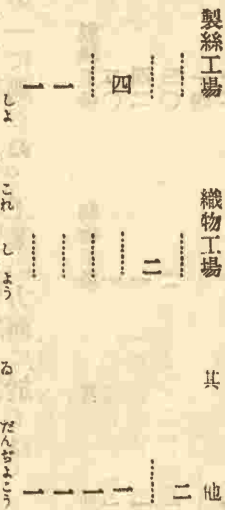
額は前橋市民の預金額の四分の一にしかならぬ、由來前橋市民は上州男子の意氣を代表するものとして江戸風に宵越の金を持たぬと謠はれて居つたに拘らず此數字の上に於て其地位を反對にして居るのは頗る面白い研究す可き現象ではあるまいか。

兩市の財政状態は大体以上で盡して居ると信ずるから、産業方面に轉じて農工商三者の比較を數字の上で表はすと、前橋市の農家戸數は自作小作を合せて千二百戸之に従事する従業者は千九百人に達して居るが、高崎市は農家戸數二百八十四戸従業者六百二十六名で前橋市の三分の一に過ぎぬ。工業の方面に於ては。

五人以下	二〇〇	製絲工場
十人以下	四二	細物工場
廿人以下	三〇	其
五十人以下	一四	一他
百人以下	一四	一
百人以上	二	一

▲高崎市

五人以下
十人以下
卅人以下
五十人以下
百人以下
百人以上



であつて前橋市の總數は百卅一ヶ所で、之に使用して居る男女工は四千三百名を越えて居る、高崎市に至つては其工場數は僅かに十三ヶ所に過ぎないが、其男女職工數の總數は五千百三十六名の多きに達して居る、此男女工の中には生絲生太織女工三千五百二十五人及び下駄表職工の百八十五名迄を合算して居る、前橋市に於ても自家に於て座繰製絲を營み居るもの及び其他の職工をも合算したならば、其の數は恐らく七八千乃至一萬にも達するであらう、是等の農民及び男女工に依つて生産されて居る兩市の重なる物産並に其價額を比較すると。

米 前橋 圓 一二〇、四八八
高崎 圓 五七、八三四

麥	六三、三一〇	二二、〇三六
養蠶	四一、一〇二	六、三〇〇
生絲	一九一、六五七	五九六、九九〇
玉絲	七五〇、九七五	一〇六、七〇〇
鑄物	二、七二八、八〇三	一八、五八〇
眞綿	二四、〇〇〇	一、三〇〇
機織	一三〇、八五〇	四八三、七二五
酒類	三二、四二八	九〇、〇〇〇
醬油	三二、四二八	三〇、〇〇〇
其他	四七、三九七	一三六、七一五
計	五、九〇一、四三八	一、五五一、一八〇

即ち前橋市の生産額は約五百萬圓に達して居るのに對して、高崎市の生産額は百五十萬圓で、貯金額と同じ様に高崎市の生産額は前橋の四分の一にしか當つて居らぬ、一轉して商業の方面より見るも。

前橋市	仲買小賣 人	仲買兼小賣 人	計 人
高崎	二五三	一、三九七	四七五
	二二〇	二、三五〇	五二五
			三、一〇五

であるが更に兩市の縣外よりの輸出入額を見ると。

輸 入

前橋市 七、二六〇、一一三
高崎市 八、四一一、五二二

輸 出

五、一五〇、九〇五
二、八〇三、七七〇

で輸入品に於て前橋市が高崎市よりは百萬圓を減じて居る、輸出品に於て二百三十萬圓を増して居るが、前橋の輸入品は繭及び生絲の三百萬圓米の六十萬圓、砂糖の四十萬圓肥料の五十餘萬圓等を重なる物として多くは工業用原料品であるのに高崎市は米二百二十萬圓を最多として織物百萬圓砂糖五十萬圓肥料五十萬圓で其多くは何れも商品である、前橋が生絲で其生命を保ち高崎市は商業に依つて居るのを數字上で説明し盡す事も容易であるが不幸にして研究子は未だ此統計を調査するの機關がないのを甚だ遺憾とする。

(二) 前橋製糸業の發展高崎織物の今昔

前橋と高崎兩市の研究をなすに當つて忘れざる事の出來ぬものがある、夫れは前橋の製糸業と高崎市の絹織物である、前橋の生糸が前橋市の工業を代表して居るが如く、高崎市の絹織物は高崎市の代表的工業で、其古い歴史と生産額の多いのとで全國に其名

を誇はれて居ると同時に本邦産業史の幾頁かを飾る價値がある。

抑も前橋が生糸の賣買を初めたのは、天和二年時の城主酒井河内守が生糸市場を本町に開いて毎月四九の日を市日としたるに初まつて居るが、生糸業の淵源は更に幾百年かの昔であるのは疑ひもない、而も文化五年前橋在原之郷村の高山要七氏夫妻が信州小縣郡の有志の聘に應じて、梓其他の糸挽道具を携へて彼の地に至り、製糸の方法を傳授したと傳へられて居るが如き、前橋の製糸業が既に其當時全國に冠たるを知る事が出来る、其の初めて外國取引を開始したのは安政の六年道具屋又藏へ下村善太郎氏の手代一氏が、佛國二十番館内に百匁にて三千兩の生糸の賣買をしたのが外人取引の濫觴であつたが、此直取引で利を見た製糸家は忽ち粗製濫造を初め、其聲價漸く地に墜ち様としたので元富岡製糸所長となつた速水堅曹氏はこれを嘆いて、神戸在住の瑞西人シ・ミラーを教師に聘し、今の岩神町に製糸工場を建設し六人繰の機械を据付け九月廿五日開業して改良製糸を初めたが、是は實に本邦製糸改良の先驅であつたと同時に世論未だ新事業に親まない當時萬難を排して前橋藩士が政府の企畫に先んじ、新業を起した着眼點と勇氣とには敬服せざるを得なかつたが、不幸にも速水氏は遂に

損益相償はない故を以て閉所するに至つたので、縣廳は小野組に托して縣營業として經營するに至つたが是亦意の如く改良の實を擧げる事が出来なかつた。

茲に於て明治十年前橋藩士深澤雄象、松本源五郎、久野小作、匂坂邊の諸氏は速水氏に計つて一製絲社を創立して桐華組と稱した次いで高須泉平、鈴木昌作、野口七之平の諸氏廣瀬組を設立したが、現在前橋の製絲界に雄飛して居る交水株式會社は是である、續いて沼田組が起つたが十一年に至つて桐華組、敷島組及勢多郡の亘瀬、黒川、山田の各組を併合一精絲原社なるものを創立し座繰製糸の改良を創めた。

斯の如く一面に於ては盛んに製糸の改良を謀つて居る間に一面に於ては勢多郡水沼村の星野長太郎氏は直輸出の有利なるを思つて苦心の結果、千葉の佐藤百太郎氏が米國より歸省し生糸、茶の直輸出を爲すの計畫を聞いて、實弟欽一郎氏をして生糸を携へて同行せしめた處が頗る米人の好みに適し更に四百餘斤の注文を受けるに至つたのが、我國生糸直輸出の嚆矢で、現在に於ける製造品並に製産額を見るべきの様である。

十人未滿	戸數	釜數	職工
八四〇	九九一	一〇二四	人

然して四十四年度中に於ける産額を見る。

五十人未滿	四七	一、一三〇	一、一三一
百人未滿	二〇	一、二八四	一、一八五
百人以上	六	八四五	八〇五
合計	九一三	四、二五〇	四、二三五

實

圖

で之を五年前の四十年度の産額百九十九萬圓に比較すると約五割の激増を示して居る高崎市に於ける染織物の起原は元祿三年の八月、時の領主が産業獎勵の爲めに田町に市場を設けた當時の如きは頗る發達を極めて居つたと推測を下す事が出来るが其後天明五年九月に至つて、仲買申合規約十二ヶ條を制定した點より見るも、年々歳々異常の發達を告げて居つたのは疑ふの餘地もないが、天保十二三年の頃に至り時の老中水野越中守が町人百姓は華美的服裝を禁する旨の告示をして此方、絹物を身體に纏ふ事が出来なくなつた結果、急に産額が減少した、然し再び此告示も寛大となつて斯業も

生絲	三六、二七四	一、九二二	六五七
玉絲	二九、四五〇	七五〇	九七五
屑物	二六、八二七	六五	二七一
計	九二、五五一	二、七二八	九二二

漸次發達の域に向つて居つたのが明治維新の大變革に遭遇して是が影響を受け、加ふるに生絹貿易の大發展が人心を傾注せしめた結果、産額は減少するに至つたが其後明治九年一月に熊谷縣勸業課の奨励に依つて改良の歩を進め、明治十八年には群馬縣の布達に基いて改善進歩を計つた結果逐年増加の傾向を示して、明治三十六年には二十三萬八千疋此價格七十七萬八千四百四十圓の多額に上つた、其後は年々歳々減額するのみで四十四年末の統計の示す處に依ると十一萬六千二百五十二疋此價格四十六萬一千三百八十二圓に減じ、十年間に約五割の減額を示した如き高崎絹の爲め寒心に堪へない、今十年間の統計を示すと

三十六年	二三五、八〇〇	七七八、一四〇
三十七年	二二六、一九〇	六七八、五七〇
三十八年	二四三、〇〇〇	七二九、〇〇〇
三十九年	二〇〇、四三〇	七〇一、五〇〇
四十年	一七五、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇
四十一年	一八〇、〇〇〇	九〇〇、〇〇〇
四十二年	一三六、二五〇	四八三、七二五
四十三年	一二二、〇三一	四七八、三四〇
四十四年	一一六、二五二	四六三、三八二

正 圓

斯の如く高崎市の絹太織が年々歳々退歩の勢ひを示して來たのは、商業地として自然の地の利を占めて來た高崎人士は、工業方面に向つて腦力を働かす事極めて尠ない結果、日進月歩の社會の需要と一致す可き改善に就て何等研究する處なく、依然として昔の儘の生産品を製造して居た結果、華美に流れて居る社會の要求が高崎絹の需用を減少した事は疑ひもない、二三年此方高崎市民も商業地として永久に今日の高崎を維持して行く事の出來ない事を感知したもの、如く、漸く覺醒の氣運に向つて來た様だから改良發展の期も亦近きにあるだらうと信ずる。

七、兩市の銀行會社

(一) 前橋市に於ける銀行會社の營業狀態

前橋市に於ける銀行會社の現在數は本社五支店二、之が資本總額は四百三十萬圓、内拂込資本額三百二十六萬二千五百圓、會社總數は株式會社六、合資會社七、合名會社四、合計十九社、此資本總額八百五十五萬六千圓で今四十五年一月の調査に懸る是等銀行會社の細別をして見ると次の様である。

▲群馬縣農行銀行 創立は明治卅年八月で、卅一年五月五日營業を開始し今日に及びたるが、其資本金額は百萬圓拂込額六十二萬五千圓、債券百九十二萬七千八百三十圓合計二百五十五萬二千八百七十圓の資本金を運轉して居る、同行の積立金は正元年下半年期現在法定特別の兩部を合して三十萬二千八百五十圓に達し、頭取は創立以來南條新六郎氏就任し全國農銀中の範模とされて居つたが、大正二年二月一書記の爲めに十二萬餘圓の行金費消事件が惹起し、職を退いたが現在の重役は即ち次の如くである。

取締役頭取 葉住 利藏 取 締 役 武藤 金吉 高津仲次郎
 江原桂三郎 松井八十吉 塩田 清平 本間千代吉
 監 査 役 高橋諄三郎 小澤 宗平 佐藤 量平
 支 配 人 齋藤義太郎

▲三十九銀行 は明治十一年九月舊藩士の公債を資本と創立したもので、當初の頭取は稻葉秀作氏支配人は松田孝氏であつたが、現在の頭取は江原芳平氏で資本金は七十五萬圓全額拂込みである、其重役は

頭 取 江原 芳平 取 締 役 森村 藤八 牧 清見
 監 査 役 品川 伍作 北爪 善吉 稻葉 秀作
 支 配 人 兼田欽一郎

▲上毛物産銀行 創立は明治十四年六月十五日で、資本金二十萬圓拂込額十五萬圓、積立金六萬〇五百圓を有し、縣下に於ても信用ある商業銀行の一つである、其重役は

取締役頭取 江原 芳平 取 締 役 竹内 勝藏 今井善兵衛
 森村 堯太 江原桂三郎
 監 査 役 竹内清次郎 木村寅十郎 支 配 人 森村 春麗

▲上毛貯蓄銀行 創立は明治卅年三月十五日で、資本金は五萬圓積立金四萬四千五百圓を有し年々一割の配當をして居るが、其重役は

頭 取 藤井新兵衛 専務取締役 南雲 實平
 取 締 役 本間千代吉 森村 堯太
 監 査 役 中野 森太 本間 三郎 田村 平衛
 支 配 人 南雲仁八郎

▲前橋商業銀行 創立は卅一年九月十日で、資本金は全額拂込の五万圓積立金二萬二千圓を有し、八朱の配當をして居るが、其重役は次の如くで同行の信用は實に頭取平田健太郎氏に依つて維持されて居る。

- 頭 取 平田健太郎 取締役 宮崎 吾一 佐賀山鎌太郎
今井 文七 監査役 島田 銀二 江原榮二郎

▲第二銀行支店 本店を横濱市に有し、明治二年政府の獎勵に依り設立された横濱爲替會社が其前で、銀行條令の發布と共に第二國立銀行と稱し、當初の資本金は廿五萬であつたが、營業の發展に伴つて資本金を五十萬圓に増資し、廿九年十一月國立銀所滿期となり私立銀行として營業を繼續する事となつたが、現在の資本金額は百五十萬圓積立金百萬圓を有して居る、其前橋に支店を設置したのは廿年十一月廿八日で現在の支店長は田原尚氏である。

▲群馬商業銀行前橋支店 同行は本店を佐波郡伊勢崎町に有し、資本金は百萬圓拂込額五十萬圓で、積立金四萬七千圓を有し、頭取は安田善衛氏で前橋支店長は若菜福朗氏である。

▲本所銀行支店 本店を東京本所區元町十二番地に有し、十萬圓の株式組織で現在拂込資本額は四萬五千圓、前橋市に支店を設置したのは明治四十四年三月で、當時の主任は土屋福丸氏であつたが、本年二月現在の主任石原庫之助(三十三)氏と交替し漸次信用を收め來れるが、石原氏は四十年の高商卒業生で、目賀田男に従ひ朝鮮に於て銀行業に従事した敏腕家である。

▲東華銀行前橋支店 同行は本店を東京橋區南傳馬町に有し資本金五十萬圓積立金九千三百圓社長は中藤彌太郎氏にして、現在預金百〇四萬圓を有する信用ある銀行で、前橋支店長稻葉秀作氏は前市長たり將亦三十九銀行の監査役として、前橋市の實業界に多大の信用ある手腕家である、同行が前橋市に於て漸次其信用を増加し來れるは實に稻葉氏の力である。

更に會社方面に就いて見ると別表の様である。

株	組	名	稱	位	置	設立年月	營業	目的	資	本	額	拂	込	金
上毛倉庫株式會社	全	内國通運株式會社前橋支店	田中町	明治五年六月	運送	業	100,000	100,000						

有し、高崎支店の設立されたるは明治廿八年十二月で、支店長は創立以來現在に至る迄松尾好國氏が之に任じ、副支店長は同市の有力家山田昌吉君である。

群馬商業銀行支店 同支店の創立は明治四十一年二月の創立で、支店長は鈴木福郎氏である。

會社の部

名	稱	所在地	營業種別	設立年月	拂込資本金	積立金
上野鐵道株式會社		鶴見町	輕便鐵道	明治二十八年七月	五〇〇,〇〇〇	二四,五七〇
合名會社田村染色店		住吉町	染織	全四十四年四月	二,〇〇〇	六,三四四
合名會社伊勢田商店		砂見町	油香	全四十四年一月	一,五〇〇	—
天田合名會社		常盤町	製紙	全四十四年三月	三,〇〇〇	五,〇〇〇
高崎水力電氣株式會社		新盤町	電燈	全三十六年六月	九三,〇〇〇	三,七六七
高崎新聞雜誌株式會社		堰代町	新聞雜誌	全四十四年五月	五,〇〇〇	五,〇〇〇
株式會社見晴館		田町	席商	全四十四年十月	四,〇〇〇	—
合名會社山田商店		本町	煙草賣物	全四十一年七月	三,〇〇〇	一,六〇〇
高崎煙草合名會社		柳川町	病產	全四十四年八月	三,〇〇〇	一〇〇
株式會社高崎病院		連雀町	海產	全四十四年七月	一〇,〇〇〇	〇〇〇
合名會社今勇商店			物院			

三鱗合資會社支店	内國通運株式會社高崎支店	合資會社山崎運送店	山崎合名會社	合名會社三河屋商店	飯塚倉庫合資會社	中島合資會社	淺見合資會社	合資會社笹本運送店	東陽株式會社高崎出張所	共榮合資會社	合資會社信永運送店	高崎火止石油製造合資會社	高崎倉庫株式會社	高盛座劇場株式會社
下和田町	八橋町	大橋町	柳川町	田砂町	大橋町	寄合町	九藏町	八島町	堰代町	堰代町	八島町	赤坂町	旭島町	八島町
運送	運送	運送	糖菓子洋酒	糖菓子洋酒	染織及	織物	織物	運送	錢貸	託貸	運送	油製	倉庫	劇場
全三十三年七月	明治五年六月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月	全四十二年七月
五〇〇,〇〇〇	六,三三〇	五〇,〇〇〇	七,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	六〇,〇〇〇	五,〇〇〇	一,八五〇	五〇,〇〇〇	六,〇〇〇
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

六、電燈會社

一、兩水力電氣の比較

現在六百萬圓の資本金を有し群馬縣第一の大會社として、前橋市の一角から遂に縣經

濟界に一起一伏を注目されて居る利根發電株式會社は、高崎水力電氣株式會社の創立に遅る、事約七年の明治四十二年五月廿五日の創立に係り、其當時の資本金は現今の資本金の十分の一、即ち六十萬圓に過ぎなかつたのが、四十四年の七月電氣供給區域の擴張と共に之が資本金を倍加して百廿萬圓とするに同時に、其年の十二月七日利根郡沼田町の利根電力株式會社を三萬五千圓にて買収し、越えて大正元年栃木電氣株式會社拂込資本金廿萬圓と合併し、同年十二月十四日資本金十三萬五千圓の前橋電氣株式會社及、渡良瀬水力電氣株式會社の資本金五十萬圓を六十萬として合併し、茲に六十萬圓の一小會社は二百十三萬五千圓となり、更に大正二年四月一日に至り同會社の第二工事たる片品村の岩室發電所に於て、約一萬馬力の水力電氣工事を起すが爲めに是が工費並に營業資金として此資本金を六百萬圓となし、舊株一株に對して新株一株六分の割當をなし、四月に至り第一回の拂込を了し、創立當時は僅かに六十萬圓の小資本金に過ぎなかつた利根發電株式會社は創立後僅々五ヶ年で一躍十倍——六百萬圓の大會社となり、年々九朱の配當をなし居れるが如き其發展力の速かなる蓋し全國中稀に見る處であらう。

六十萬圓の一小會社から僅かに五ヶ年に六百萬圓の大會社となつた利根發電の發展は頗る順調に進んで來て居る、其發展力は社會の進運に伴ふ自然の要求からであるのは云ふ迄もないが、此發展の裏面には亦頗る吾々が研究す可き幾多の波瀾と經營者の苦心とが此間に存して居る、かるが故に兩市の電燈の比較を爲すの前先づ、利根發電創立當時の狀況を調べて見るのも、企業に對する尙市民の意嚮を知る上に於て必要な事だと信する。

高崎水力電氣株式會社は明治卅六年六月の創立に懸つて、日本の水力電氣會社としては比較的古參の部に屬して居る、然も高崎電氣が創立された當時の群馬縣には、電力會社なるものは初めて、而も其水利權を得るのにも亦供給地を得るに就ても今日に如く嚴重な規則もなく、極めて手軽に得られたので、未だ廣い範圍に供給する程の大なる動力を有して居らぬ高崎電氣は此時代に於て、前橋をも同社の供給地として出願して之が認可を受け、電力燈火の供給をして居つたが然し、其當時の高崎電氣會社の動力は極めて僅かなもので、五萬の人々九千の戸數とを有する前橋市に向つて、市民を満足させる丈の動力を供給するのには餘りに困難であつた。

加ふるに本縣の財政状態としては、未曾有の大計畫であつた一府十四縣關東北聯合共進會は、前橋市に於て開催せられる事となつて、縣當局に於ては四十一年末以來是が設備に就て頗る多忙を極めて居つた。

二、利根發電會社の創立

共進會の開催と同時に前橋市民の最も必要を感じたのは豊富な電力であつたが、前にも云つた通り未だ當時の高崎電力會社では、共進會に要する總ての電力を供給するのには餘りに不足であつた。縣當局に於ても此點に關して種々心配を重ねて居た。

教科書事件以來縣の政界を退き新田銀行の一角に籠城して時の到るを待つて居た葉住利藏氏は同社専務取締役であつた、大澤惣藏外三四のを勧誘を受けて、利根發電會社の設立を計劃したが、當時前橋市を中心とした群馬縣下の人氣は此計畫を頗る危険視して賛成するものが極めて稀で頗る難産であつた、茲に於て葉住、大澤初め有志等は先づ東京方面に於て笠井愛次郎、橋本忠次郎、内田眞、中平治三郎、荒瀬久四郎の諸氏を説いて賛成を求め、笠井愛次郎氏を創立委員長となし、一方に於ては縣下の有志

間を説き廻つて漸く持株を東京半分の地方半分に迄漕ぎつけたが、其當時地方の持株を多くさせるに就て發起人等は一個所に十數回も足を運んで漸く十株位の賛成を得て喜んだと云ふ有様で、其苦心たるや實に容易な者ではなかつた。

斯うして四十二年五月廿五日午後三時東京橋區日吉町帝國鐵道協會に創立總會を開いて重役は次の様に決定した。

取締役社長 笠井愛次郎、取締役 羽尾勘七、橋本忠次郎、葉住利藏、高津仲次郎、竹内清次郎、内田眞、監査役 武政恭一郎、小林庄太郎、小泉善六、正田虎四郎、支配人 大澤惣藏

斯くて本社を東京々橋區彌左衛門町、支店を前橋市堅町に設置し、起工の準備に着手し四十三年九月より開催の共進會に間に合せ様と工事を急いだ、然るに此當時前橋市は高崎水力電氣株式會社の供給區域内であつたが、前にも述べた如く高崎水力が動力不足の爲に共進會に充分の動力を供給なし得るの力がなかつたので、高崎水力が先取權のあるものにも拘らず利根發電に向つて前橋市に供給の自由を許した。

之が爲めに両電燈會社は需用家募集の爲めに大競争を開始した、斯くて両會社とも甚だしきに至つては點火料を無料で燈火を供給して、四十三年から翌年の三月迄約七

ケ月間に亘つて此競争を持続したので、両會社の蒙つた損害は頗る甚だしいものであつた、若し此競争を永く繼續したならば両會社は遂に破産しなければならぬ運命に迫つて來た、両會社の株式は一日ごと下落して、前橋の利根發電の株の如きは殆んど捨値同様の有様となり、聽ては本縣の經濟界に迄波動を及ぼす可き形勢を現はして來たので、之を憂慮した警察部長岸本康通氏は兩社に向つて妥協する事が兩會社の利益である許りでなく、本縣經濟界の利益である事を説いて仲裁の勞を取るに至つた。

此結果として四十四年の十月に至つて、兩電燈の妥協成つて、高崎水力電氣から利根發電に對して前橋市全部の電燈電力の供給區域を譲る代償として、利根發電から高崎水力電氣會社に對して金十萬圓と澁川町全部の供給區域を提供し、且つ利根川の流れるを堺して利根發電は東上州に、高崎水力は西上州を供給區域とする事を約して、八月に亘つた大競争の解決を告げた、創立以來頗る其前途を悲觀されて居つた利根發電會社も、此妥協に依つて前橋市といふ根據地を得て、前途の光明を認めると共に、下落に下落をして居つた株式は急に騰貴して來た。

前橋市に電燈動力の供給の權利は當然其先取權は高崎が所有して居つたもので、自分の先取權を有して居る地に利根發電を侵入せしめた事が既に高崎水力が餘りに活動力の鈍くなつて居るのを思はしめるもので、更に此上如何に競争の上とは云へ前橋といふ唯一の根據地を僅か十萬圓の代償金で利根發電に譲つた高崎水力電氣は餘りに眼前の利を追ふに急で、永遠の利を見るの明がなかつたと云ふの外はないが、是はやがて高崎市民の氣風を現はしたものでなからうか。

三、高崎水力電氣の創立

研究子は此説明をなすの前、先づ高崎水力電氣株式會社が發展の経路を序して見たいと思ふ、高崎水力電氣は明治三十六年六月二十五日の創立で、其當時の資本金は總額十萬圓社長の現在の社長須藤清七君であつた、斯くて三十七年十二月一日營業を開始し三十九年一月事業の擴張と同時に資本金を倍加し二十萬圓となし、同年七月更に、十五萬圓を増資して三十五萬圓となし、埼玉縣本庄町、深谷、熊谷町及其沿道を供給地となし、四十年三月には前橋電燈株式會社資本金四萬圓を合併し之に續いて、群馬馬車鐵道會社資本金十三萬圓を合併して電氣軌道となし、資本金を八十二萬とな

し、四十四年十二月に箱島水力電気株式會社資本金十萬圓を合併して九十二萬圓となり、昨年十一月温川水力電気工事千二百馬力の起工を爲すが爲めに更に廿八萬圓を増資して現在の百二十萬圓の資本としたので、創立以來茲に十年其當時僅かに十萬圓の資本金で、會社として存在を認められるや否や疑問であつた一小會社は、十二倍して百二十萬圓の大會社となり、利根發電會社と共に縣下を二分して其一つを保つに至つたのは之亦右の進歩に促された自然の結果で、寧ろ其發展の遲きを怪まざるを得ないが、茲が即ち高崎市民の氣風の代表して居る會社である。

前にも云つた通り前橋市は本縣の政治的中心地で、同時に工業に依つて生活して居るが、高崎市は本縣商業の首腦地である、随つて凡ての事業に向つても前橋市民のやり方は進歩的である現代的であると同時に政治的色彩を帯び其計劃は頗る大膽であるが故に、時に世間からは危険視せられぬでもないが、其計劃は秩序立つて組織立つて居る、此氣風を代表して居るものは即ち利根發電會社である、之に反して高崎市は何れかといふと消極的である、恰度石垣でも築く様に其進み方は漸進主義で非現代的である、所謂商人氣質の露骨を表して居る是が代表者は即ち高崎水力電気會社である。

四、兩電気會社の重役

一例を擧げると前橋の利根發電は營業開始以來九朱以上の配當をした事はないが、高崎水力は三年前迄は年々一割五分の配當を續けて來た、電燈會社で一割五分の配當をして來た會社は全國中極めて稀に見る處で、其成績頗る良好であるのは云ふ迄もないが、此一割五分の配當を敢てしながら機械消却積立金がしてなかつたのが、最近三年前に或人から注意されて之が積立をする事としたが之は餘りに配當金問題に重きを置いて居る結果で此會社の經營振で高崎市民の氣風の一部が確に知る事が出来る。然らば現在に於ける是等兩會社の重役並に經營者は果して如何？利根發電株式會社の重役は。

社長 利藏	取締役 羽尾 勘七	取締役 橋本忠次郎	同 竹内 清次郎
同 武政恭一郎	同 大塚久右衛門	同 江原 芳平	同 高橋 諱三郎
同 望月 磯平	同 大澤福太郎	同 書上文左衛門	同 久保田健次郎
同 萩原萬太郎	同 兼支配人大澤惣藏	同 監査役 小泉 善六	同 小林 庄太郎
同 細谷 哲	同 長谷川調七	同 木村 淺七	同 中島 宇三郎
同 相談役 根津嘉一郎			

で高崎水力電気株式會社の方は

社長	須藤 清七	取締役	瀧川文二郎	取締役	住屋喜三郎	同	小島 彌平
同	櫻井仙次郎	同	松本 文作	同	小澤 宗平	同	同
監査役	井上保三郎	同	松山 省	同	山田 昌吉	同	同
同	内田國三郎	主事	金山鐵吉郎	同	同	同	同

で利根發電の重役は取締役十四名、監査役六名、顧問一名都合廿一名の多きに達して居るが、之は同社が六十萬圓の一小會社から六百萬圓の大會社に發展するに伴つて、前橋軌道を初めとして渡良瀬、朽木の各會社を合併した結果、是等の會社の重役が利根發電の重役となつて増員を行つた爲めで、勢ひ止むを得なかつたものであるが、二十名の重役を有する會社は恐らく全國中利根發電會社を除いては其例が尠くであらう船頭多くして船出に登るの譬がある、研究子は早晚此重役問題の爲めに何等かの考慮をしなければならぬ時代に到達するのを信ずると共に、同社將來の爲に一日も早く重役減員の途を講ずるの得策なるを信ずるものである。

高崎水力の取締役七名は此會社として適當であるが其監査役六名を有するに至つては之亦餘り多きに失するの憂がある。

五、利根發電の經營者

然らば此兩會社の業務擔當人は果して如何であるか、利根發電には社長に葉住利藏氏がある氏は現代議士で本縣に於ける實業派の總帥である、本年の憲政擁護運動當時迄は席を政友會に置いて居つたが、中央政界に於ては兎に角本縣の政界に於ては寧ろ其當時から實業派即ち非政友派に屬す可きものであつた、即ち政友派には例の憎まれ者武藤金吉氏があつて、縣の政友派中に於て多くの信用は持つて居らぬが中央政界では陣笠中一方の雄？として相當に幅を利かして居る故を以て、本縣でも一方の棟梁の位置に立つて居る、處が教科書事件以來新田銀行の一角に隠れて政界から退き機に至るを待つて居つた葉住氏は利根發電といふ大勢力を背後にして、昨年の總選舉の際代議士に打つて出で、見事勝利を得て以來再び本縣の政界に重きを置くに至つた結果、絶對に武藤氏とは相容れざる仲となつた、其性格の上に於て勢力の上に於て到底一致して行く可きものではなかつた、其結果は遂に憲政擁護運動の際、日向氏が政友會を除名せられたのを口實として斷然政友會を脱會し無所屬となつた、其當時世間では根津氏の關係から氏を新政黨に走る可きものとして注目して居つた、而も新政黨は未だ其結黨式を擧ぐるに至らないで桂内閣が倒れて終ひ政界は茲に亦一變化を來たした、彼

は新政黨に加入して政友會に睨まれるのは會社の爲めに甚だ不利であることを知らぬ程眼前の見えぬ男ではなかつたが、本縣に於ては非政友が多數を占めて居る、遂に彼は無所屬となり一躍政界を二分して其一つを保つた程の男である、要するに頗る利者である。

此社長の下には専務取締役大澤惣藏氏、常務取締役は久保田健次郎氏がある、大澤氏は初め群馬縣廳土木課の屬官であつたが、同社創立と同時に支配人となり遂に専務取締役となつたのが、其腕の牙へた事は到底官吏上りとは受取れぬ、一種の力を持つた腕の人である事務家として圓満に常識の發達した人である、電燈會社の内外の仕事は殆んど彼に依つて行はれて居る。

實際利根發電専務取締役大澤惣藏氏は本縣に於て最も成功した一人である、其手腕を充分に發揮して克く今日あるを致した所以のものは實に社長葉住利藏氏が彼の用ひ可きを知つて適材を適所に置いた爲めである、即ち彼の今日を爲したのは葉住社長の爲めである、如何に彼が扱へた手腕を有し如何に抱負を持つて居つたにしても、若し彼を信用する葉住氏の如きがなかつたならば彼の今日あるを見る事は出来なかつたであらう。

然し之と同時に葉住氏が一度退いた政界に再び乗出し、僅か二年ならずして今日の大勢力を有するに至つたのは勿論彼自身の力にも依るのであるが、女房役として大澤氏の如きがあつた爲めである、實に葉住と大澤とは好一對の夫婦である、此良夫婦あつて利根發電の今日を爲したとも言へる。

彼は頗る眞面目な男である彼は酒を飲まない女に接しない。宴會意外恐らく料理店の敷居を跨いだ事はないであらう、が然し彼は決して社交に拙なるものではない、人を見る事が頗る巧であるが氣が短くて頑固で負す嫌ひで稷角のある男である、従つて時に世間の誤解を招く事が尠くはないが同社には社交の人として主事長畑清一氏があり、其圓轉滑脱は大澤専務の短を補つて餘りがある、葉住氏の大澤氏に於けるが如く長畑氏は又大澤氏に取つて無くてはならぬ人である。

彼の道樂は仕事をす以外に何もない、利根發電會社が僅々五ヶ年間に十倍して六百萬圓の大會社となつた所以のものは、仕事家の大澤氏と活動の血に満みて居る葉住氏が一致したからで、同社の現状から考へると現在の六百萬圓の資本が一千萬圓に

達する機會の來るのは疑ひなく、其機會は又餘りに遠い將來でないのを思はしめる。
久保田常務は桐生の人、元渡良瀬電燈の専務として水力電氣には多大の經驗を積んで居るが、利根發電の常務としての君の手腕如何は未だ將來の問題に屬して、是非を云ふ時期ではないが、計數の確かな眞面目な人である、渡良瀬派を代表して同社經營の責に任じて居る手腕家である。

六、高崎水電の經營者

高崎水力電氣會社の社長は須藤清七氏で、之を助ける主事を金山鐵吉郎と云ふ、須藤社長は當年取つて七十九歳の老人であるが打見た處は六十を一つ二つ過ぎたどしか見えぬ位で、其元氣の壯な事は其身体の壯健な如く、壯者も及ばざる有様で、今時の若い者は彼の前に行つては到底問題にも何にも成つたものではない、彼の生家は高崎の舊家で兩替と製絲業を營み今も尙之を繼續して居る。
彼は明治三十六年同社創立以來の社長で、七十九歳の高齡なるにも拘はらず今も尙毎日出社して社務を決裁して居るが、彼が同社創立以來十年間如何なる日でも社を欲

勤した事がない、終始一貫自ら社務を取つて居るに至つては其熱心なるに驚かざるを得ない——彼は高崎水力電氣會社を他人に任せて置く事が出来ないのだ——従つて彼は彼の生命のある限り此會社を離れる事は出来ない、死に至る迄は社長として同社の經營を他人に任せる事は出来ないのだ須藤社長は利根發電に葉住氏が縣會議員もやれば代議士ともなつて政界に活躍して居るのに反し、曾て高崎水力の創立の前、今の八島代議士が高崎市長時代市參事會員をした事があつた位のもので生れ付きの商人である、高崎特有の血を受けた商人である、隨つて彼の經營振は頗る質素である、消極的である、利根發電が大膽に事業の計畫をして猛進して居るのに對して彼は終始一貫漸進主義を取つて居る、大なる發展をするよりも消極的に堅實に、失敗勿れ主義を取つて居る此社長を補佐して經營の任に當つて居る主事金山鐵太郎は舊高崎藩の人で其初めは小學校の教員であつた、須藤社長が上野鐵道の經營をして居る時代同會社の社員として敏腕を以て鳴つたが、遂に失敗して同社を解雇され、暫く總武鐵道に行つて居つたのを再び須藤社長が引張つて來て現在の位置に据たのであるで、須藤社長に對しては絶對服従の義務を負ふて居るのであるが然し彼は高崎人士の當軌を逸した活動

家である、彼が上野鐵道時代の失敗も亦餘りにやり過ぎた結果に外ならぬ、近來は此失敗と經驗とで全然須藤式に化せられて終つた、爲めに普通の會社では主事とか支配人とかが、仕事の計畫をして、社長は只之に向つて可否を與へるのみで、甚だしきは社長自身は十日に一度位會社に顔を出すのみで、支配人任せのものがあるが高崎水力に至つては主事なるものは只單に社長の命の儘に各種の調査をし又經營をすれば夫れで任務が盡きると云ふ有様、万事は主事の意見でなくて社長の意見に依つて決せられて居る。

従つて同社の營業振は全然須藤式である即ち高崎氣質である、高崎氣質は臆て自己本位である、前橋の利根發電が一種政治的色彩を帶て、獨り前橋のみでなく縣下の政界に大なる勢力を有するに至る迄には、市民を初め縣民に公共事業を實證する丈の利益を與へて居ると同時に、己の敵となるものは飽迄も征服して自己の勢力圈内に收めて了ふ丈の勇氣と決心とを示して居るが、之に反して高崎水力は只會社本位で會社の配當さへ多く得られたなら、他人が何と云ふても其様な事は一向頓着がないと云つた風である。

研究子は須藤社長が七十九才の老軀尙自ら社務を採つて同社の基礎日一日と堅實となつて行く事に就ては其勞を多とせなければならぬが、只今少しく自己本位を離れて發展の道を講ずる事を希望せざるを得ない。

七、利根發電の營業狀態

利根發電會社が營業を開始するに至つたのは明治四十三年九月十七日、一府十四縣聯合共進會開會の日、共進會場に電燈動力を供給したに始まり、同月廿日市内一般需用家に送電するに至つたが、其當時に點火燈數は共進會に供給した臨時燈を加算して一萬二千四百四十八燈、此十燭光換算八千三百三十五燈であつたが、四十四年四月末日現在には前橋市の外伊勢崎、境町、太田町、館林町を合せ需用家戸數九千五百八十六燈、此十燭光換算二萬二百二十四燈動力使用戸數十四戸百七十九馬力五であつた、當時の發電所は上久屋の發電所只一ヶ所、發電容量は千二百キロワットであつて、此當時の資本額は百二十萬圓であつたが、現在に於ては上久屋發電所三千キロ渡良瀬發電所九百キロ沼田發電所五十キロ合計三千九百五十キロの動力を有して居る。

る、之が供給燈火數并に動力を示すと。

上久屋	七二	五三、〇		
沼田	七八三	一、六八三、九		
前橋	六、一四〇	一三、五〇三、六	八六	一一一
伊勢	二、一七八	五、一〇八、〇	一六	三九
太田	一、六一五	二、五八二、六	七	二五
館林	一、三六一	三、一九五、三	二〇	五六
佐野	一、六五一	三、五五九、〇	九	二二
栃木	二、二八〇	四、一五一、一	二	五
小幡	六〇〇	一、〇三四、〇		
桐生	三、五〇五	八、一二七、七	七三	二五九
足利	二、八七八	八、二六一、〇	六五	二二九
高津	五二三	一、二六〇、〇	一	一〇
羽生	二九八	四九七、〇		
計	二二、八八四	五二、九八〇、二	二七九	七五七

大正二年三月卅一日現在の資本金は二百十三萬五千圓で損益計算書に依ると一期間の損益計算は

一金二十八萬九千八百二十七圓二十七錢五厘	前當期繰越金	七五七
一金三萬八千五百五十三圓四十七錢二厘	當期繰越金	二七九

需用家數 十燈換算 燈 需用家 馬力

内金十八萬千七百四十四圓六十三錢六厘
 差引金十四萬六千二百三十六圓十一錢一厘
 此配當處分は

金五千五百圓	後期繰越金	
金三千五百圓	當期繰越金	
金七千圓	法定積立金	
金九萬七十五圓	固定資本償却積立金	
差引	配當	
金四萬百六十一圓十一錢一厘	後期繰越金	

更に創立以來の配當を調べると第一回から第四回迄は無配當で、第五回即ち明治十四年十月十日に七朱強の配當をして居るが、第二回決算期には八朱、第七期には九朱となり、現在も九朱の配當を續けて居る。

斯る程に本年四月資本金を増加して六百萬圓とした、之は片品川字岩室に於て新たに一万二千キロの水力電氣を起す爲めに増資したので、既に第一回の拂込は結了したから現在の拂込資本金は三百十萬千二百五十圓の譯で、第二期工事の竣成期は豫定通に進行し早くも來年の末でなくては動力の供給をなす迄には至らぬから、之に對する配當金は勢ひ現在有する動力の四千キロを賣つた利益金でやつて行かなくてはならぬ三百十萬餘圓に對する年九朱の配當金は廿八萬圓を要する譯であるが、果して利根發

電會社は此四千キロに依つて豫期の収益を挙げ得るや否や?
現在有する動力四千キロ中の残額は目下工事中新田郡強戸町、下野國葛生町、千生町、田沼町、埼玉縣妻沼、久喜、幸手、千葉電燈埼玉電燈等に供給する筈で、之が全部供給済みとなる曉は一ヶ年に

電燈動力收入	五一五、二〇〇圓
瓦斯收入	二、七八四
電車收入	七二、九六〇
雑收	三七、〇〇〇

合計七十五萬三千八百圓の收入となり、支出は二十九萬一千三百九十圓で、差引四十六萬二千四百十圓前期の收入に比較して一ヶ年間に十七萬四千四百四十五圓四十五錢となる。是は會社側の言ふ處である、此計算通りに行つたなら三百十萬圓の資金に對して一割二分位の配當は樂に出来る筈だが、兎角豫想と實際とは一致し難いから會社に三割の懸値があるとしても、現在の配當年九朱を實行する位は困難でもあるまい。

八、兩會社將來の運命

更に目下工事に着手中の片品川第二力水岩室發電所は、水車軸で二萬三千馬力實馬力

は一萬二千キロを起す豫定で、是が送電地は主として東京である、途中に於ける漏電等を假に二千キロとするも、東京に到着し得る動力は一萬キロを有して居る、今假に一キロ一錢に賣却するとしても一ヶ年の收入は八十七萬六千圓に達する、然して是に要する營業費豫算は十五萬四千四百圓の由だから差引七十二萬四千六百圓の純益を見る事が出来る譯だが、果して然らば現在の收入と合計した得た利益が六百萬圓の資本金に對して如何なる収益を挙げ得るか?、現在の收入豫算は前述の如く七十五萬三千八百圓で、之に一萬キロの動力收入八十七萬六千圓を加算すると合計百六十二萬九千八百圓となる、然して之に要する支出總額は四十四萬二千七百九十圓を差引くも純益百十八萬七千〇十圓である、此内から積立金十二萬圓、法定積立金五萬圓、賞與金五萬圓、固定資本償却積立金十二萬圓、合計三十五萬圓を差引いた残額即ち配當金に當つ可きものは八十三萬七千圓に達し、之を六百萬圓の資本金に割當てるご一割四分に當るのであるが、以上の計算は會社側の唱ふる處であるから多少の會社本位に計算して居ると思はれない事もないが、彼の鬼怒川水力電氣の東京供給が一キロ一錢八厘になつて居るのに對して利根發電のは一キロ一錢に假定しての計算であるから、供給

動力の單價如何に依つては其利益は頗る大である、茲に於てか昨今東京へ動力供給の各電燈會社が此工事費が頗る安く出来る利根發電の前途に注目の眼を離さないのは當然の事で、之迄利根發電に對して對岸の火災視して居つた東京の各電氣會社が俄に之に對する策戰を講ずるに至つたのは事實である。

高崎水力電氣は三十七年十二月一日營業を開始したが、其當時の燈火數は供給戸數二千四百十八戸、此十燭換算三千七十七燈であつたが、大正元年末日の調査では供給戸數八千五百九十九戸、此十燭換算二萬一千三百八十三燈で、現在の發電馬力は室田發電所九百キロ、箱島發電所三百キロ合計千二百キロであるが、創立當初からの同社の配當を見ると第一回から三回迄は未配當であつたが、第四回以下の配當は別表の様である。

第四回	一割三分	第五回	一割五分	第六回	一割五分	第七回	一割五分
第八回	一割一分	第九回	一割四分	第十回	一割五分	第十一回	一割六分
第十二回	一割六分	第十三回	一割六分	第十四回	一割六分	第十五回	一割一分
第十六回	一割二分	第十七回	一割二分	第十八回	一割二分	第十九回	一割二分

で第十九回即ち大正元年十二月末の決算報告に依ると。

純益金
金五萬六千七百六十四圓六十七錢七厘

前期繰越金

金二千七百三十四圓四十七錢九厘
計金五萬九千四百九十九圓十五錢六厘

此配當計算は

金二千八百五十圓

金二千八百五十圓

金五千六百圓

金四萬六千二百二十八圓

金二千七十一圓十五錢六厘

法定積立金

消却積立金

賞與金

配當年一割二分

後期繰越金

而して其將來に於いては、目下工事中の温川發電所の千二百馬力の工事完成の曉は、電燈電力收入二十四萬圓電車收入六萬圓合計年收入金三十萬圓に達するから、假に營業費に十萬圓を要するとしても、年一割二分の配當は今後永久繼續する事が出来る。是は會社側の唱ふる處で、研究子も又天災地變のない限りは之を認むるに躊躇しないが吾人は同社が餘りに配當金を多くせんが爲めに、後期繰越金并に積立金に於て餘りに其額の少額なるは、一朝天災等不變の出來事に備ふるの道を忘れて居るのを嘆かざるを得ない。

九、兩電車の比較

伊香保温泉は今や群馬縣の伊香保ではなくて日本の伊香保である、天下の遊園地であ

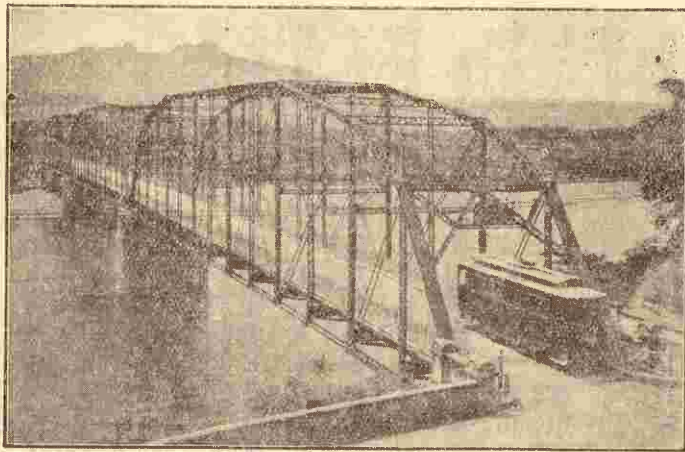
る、随つて伊香保の發展如何が兩市に與へる影響は頗る大である、研究子が兩市の比較研究をなすに當つても又伊香保と兩市との關係は忘れる事の出来ぬもの、一つである、故に以下少しく兩市と伊香保との關係即ち——前橋高崎兩電車と伊香保との關係を述べて見度いと思ふ。

伊香保は前橋から電車で十六哩強、高崎から廿哩の處にあつて、七月上旬から九月の下旬に掛けては少き時に於て、二千多き時は三千に餘る浴客を以て満たされ冬季の如き或は四、五、六の農繁期の如き、伊香保の霜枯れ時と稀される時ですら尙且つ三四百の浴客が絶た事がない、此浴客の大部分否寧ろ全部が前橋が高崎兩市の孰れかを經由して行くのであるから伊香保と兩市との關係——伊香保と兩電車とは頗る深い關係を有して居る、今此關係を述ぶる順序として明治四十五年及び大正元年の一ケ年間に於ける、兩電車の乗客數並に貨物運搬數を調べて見ると即ち次の様である。

前橋	高崎
二六、二五二	二五、九九五
二〇、一一〇	一六、五七二
二一、〇八九	一七、五三一
二六、九八六	二五、三〇七

八月	七月	六月	五月	四月	三月
二九、二九二	二五、八二五	二九、五三三	三〇、八三九	一八、二三五	一九、〇〇〇
三一、六三四	二九、五三三	三〇、八三九	一八、二三五	一九、〇〇〇	一九、四九九
二一	一九、〇〇〇	一九、四九九	一五、三五八	一九、〇一四	二六、二三〇
計	二六、二三〇	二五、九二二	二六、二三〇	二六、二三〇	二六、二三〇

で乗客數に於ては兩電共に餘り大差を認めないのであるが、更に同年度に於ける大貨物は前橋電車二千七百九十八萬八千八百九十九斤、高崎電車二千三百三十六萬六千八百四十五斤で、前橋電車の方が約七百萬斤の増額を示して居るが、之は東京方面より伊香保地方に輸送される貨物の多くは運賃の關係から前橋經由となつて居るが爲めである然して現在の使用車輛は前橋の電車は特別普通混合車一輛、特別車一輛、普通車九輛合計十一臺の客車と、三噸積二輛四噸積四輛合計六臺の貨車を運轉して居るのに對して、高崎の電車は十臺の客車と、三噸積貨車三輛附隨貨車八臺とを運轉して居る、而して前橋の電車は如何なる場合と雖も決して客車と貨車と連結して運轉をなすが如き事はないが、高崎の電車に至つては多くの場合に於て客車と貨車とを連結して居る



前橋電車沿道

客車と貨車を連結して運轉するのは輸送力を省くのと、會社の利益は頗る大なるものがあるには違ひないが、前橋や高崎の様な温泉客を目的として居る電車では、餘り感服した方法ではない。是等の乗客に不快の感念を興ふるのには、やがて伊香保温泉の發展にも影響を興ふる事にはならぬであらうか。

▲時間と賃金 前橋、高崎兩電車は共に其目的主として伊香保にある、然して其終點は等しく澁川町で此處から伊香保電車に連絡を取つて居る。前橋から澁川迄は約八哩強であるが、高崎から澁川迄は十一哩半で、約三哩半丈高崎電車の方が前橋電車よりも遠距離にある、即ち前橋高崎澁川とは不等邊三角形をなして居る、其不等邊三角形

の長邊の一邊は即ち高崎澁川間で、短邊は前橋と澁川間である、然して此間を時間で計算すると前橋と高崎間が瀛車で僅かに十五分間、前橋と澁川間が電車で四十分間、高崎澁川間が一時間と十分、澁川伊香保間は八哩約一時間と二十分であるから高崎から伊香保迄は約二十哩二時十分間であるが、前橋澁川間は十六哩強一時四十分で、其賃金は高崎澁川間片道三十一錢往復五十一錢、前橋澁川間片道二十三錢往復四十一錢であるから、高崎から發電すると前橋から登香するのでは高崎から登香する方が時間に於て三十分、賃金に於て片道八錢多くを要する事になるのだから、伊香保に登るのには高崎からするよりも前橋からの方が時間に於いても賃金に於ても尠からぬ利益がある、更に其發車時間は前橋は前橋澁川間は三十分置きで十分間毎に市内運轉を開始して居るが、高崎電車の發車時間は四十分毎に一臺を運轉して居る、加ふるに前橋の電車は昨年以來乗客の希望を容れて、電車と瀛車との連絡を取る事に深い研究を遂げた結果、現在では前橋驛に於ては瀛車との連絡を取り、澁川驛では伊香保電車との連絡を保たしめて居る、其が爲めに停車場前の待合茶屋の客が皆無となつたと、待合茶屋から苦情を持ち込まれる程に、時間の經濟に注意を拂つて居るが、高崎の電車に至

つては瀛車を高崎停車場に降りて直ぐに電車に乗らうと欲しても、瀛車の着時間に電車
 車が停車場に来て居るが如き事は極めて稀である、従つて多くの旅客は電車の待合せ
 をする間 待合茶屋に休憩して不必要な茶代を奮発しなければならぬ不便が多い、是
 は停車場前の繁榮とか何とか云ふ處から考へると、二三の者に取つては頗る結構であ
 るには違ひないが、乗客其者に取つては頗る迷惑千萬な事である。
 以上時間と乗車賃の諸點から考へて見ると、發着客の大部分は高崎市に特別な用事の
 ない限り、高崎驛を経由して前橋驛に下車し、前橋を経由して澁川から伊香保に至る
 のが利益である可き筈だが、果して東京方面の遊覽客は何れの電車を利用して居るで
 あらうか。

▲旅客の因襲的觀念 東京の上野から高崎迄の里程は六十三哩で時間に積算すると
 三時間半であるが、前橋迄は六十九哩時間にして三時四十五分である、此間に高崎驛
 で五分乃至十分間の停車をするから東京を發した乗客が高崎に下車するので前橋に下
 車するのでは時間で廿分、賃金で八錢の損をしなければならぬ、之が爲め東京方面の
 發着客の中流以下の者は大部分高崎を経由する事になつて居るが、上流人士は主とし

て前橋を経由して行くのは何が爲めであるか、少くとも此點に關しては旅をする者が
 充分に研究の必要があると思ふ。

前にも述べた如く西から來るものに取つては高崎驛に下車する方が前橋に下車する
 よりも近道である、否瀛車に乗つて居る時間丈は僅かで済む、一船の人士には此瀛車
 に乗つて居る時間が短くて済むと云ふ事は、聽て伊香保に達する時間が短くて済むと
 云ふ事のやうな考へを有して居るらしい、即ち彼等は電車に乗つて時間の計算を忘れ
 て、只單に汽車の時間のみを計算して高崎を経由するのが當然だと考へて終ふのであ
 る、即ち西から來て伊香保に登るには、高崎からする方が便利でもあり利益であると
 考へられて居るのだ、地の利を得て居る高崎は先天的に一般旅客の頭腦に染みさせて
 居ると同時に、此觀念を旅客から忘れさせない爲めに種々の手段を講じて居る、即ち
 高崎の電車が上野驛に於て赤帽を買収し、伊香保浴客をして高崎驛の下車を勧めて居
 るのも事實である、甚だしきに至ると前橋に下車する考へで上野驛を發した旅客に對
 して、強ひて高崎驛で下車せしめ其手荷物丈を前前に送つて更に之を逆行せしめた實
 例は決して尠くない、否更に甚だしい事には伊香保の二三旅館と車掌とが何等かの默

契をして客引き運動をして居るのも事實である、彼等は何故斯くの如き奸手段を弄せなければならぬか？

既に先天的に高崎は前橋よりも地の利を占めて居ると誤解されて居る、成る程汽車や電車のなかつた時代には高崎からの方が三哩近かつたが、汽車と電車の開通されて居る今日では高崎からするも前橋からするも伊香保に行くには賃金の上に於ても、時間の上に於ても何等の差違を認める事は出来ぬ、處が久しい因襲的觀念が旅客を誤解せしめて居る結果前橋は常に不利な地位に立つて居る、之が爲め前橋の電車は之を電車の設備沿道の光景に依つて償ふが爲めに頗る苦心を重ねて居る、何れの點から見ても其設備の完備して居るのは高崎電車に比較して前橋電車の誇とする處であるが、然も何故か今日尙前橋電車が此因襲的觀念を世間の人の頭腦から除却する事に努力が足ぬのは疑ひもない事實で、此點に關しては前橋電車側の再考を望みたいものだ。

▲前橋電車と自然美 両電車の沿道に就て其實際を見ると、前橋の電車は前橋驛を發して岩神町迄は市内を縦貫して居るので、高崎電車と比較して何等の差をも認める事は出来ぬが、春四五月から秋の頃に掛けて前橋の電車に乗つて岩神停留場を離れ、

二三分間を走つたと思ひ給へ、右には雄大な赤城山が雲表に聳へ左には遠く榛名、秩父、淺間の連山が波の様に起伏して居り、更に眸を轉すれば畑は春は麥夏は稻、秋は新らしい壘を敷き詰めた様、然も處々の山麓や岩陰には人家點々として散在する光景一幅の繪畫である、電車の進むに連れて此光景も漸次展開し、荒牧停留場附近に至ると右には橋山が青葉に包まれ恰も夏を我物顔にして居るやう、夫れも通り抜けると石の上に松林を植込んだかと思はれる片石山は田中口の停留場を左に約一丁、脚下は坂東太郎の流れが岩に激して居る有様、只「嗚呼」の一語を放つて筆を投するの外はない、兎角して電車は大利根の急流に架してある坂東橋の上に出る、若し電車を橋上に停める事が出来たら、音に名高い坂東太郎の上流下流は一眸の裡に收まり、雄大無限の自然美に七十五日生延びる位は何でもあるまい、百八十間の坂東橋を渡ると小松原となる、此間岩神を離れて澁川の終點に達する約七哩の間電車は絶えず大利根の流れに浴ふて走つて居るのだ、其沿道の光景は又刻一刻と展開する様、恰も大パノラマを現出して居るやうである、此電車は只單に伊香保を初め利根の山間方面の乗客や貨物を取扱はんか爲めに出来たのではなく、此雄大な光景を乗客の擅にせんが爲めに

出來たかと思はざるを得ない、若し失れ高崎電車に至つては此自然美を背景として居る前橋電車に比較したなら頗る寂寞を感せずには居られない、即ち高崎電車には配する、大利根の奔流もなければ橘山もない、只單純で變化のない關東平原の麥畑と桑畑の間を走りつゝ居るのみで、前橋の電車の乗客が澁川に至る四十分間を電車内に在るを忘れて居るのに反して、高崎電車の乗客が一時間十分間を如何に無聊に苦しむかに見ても思ひ半に過ぎるであらう！

前にも事つた通り荒牧村の橘山は前橋電車沿道中の絶景である、前橋電車の生命とする自然美の半は實に此橘山と利根の激流にあると云ふも過言下はあるまい、若し此絶景を自然に放任するのみでなく、之に人工を加へ水力を利用し一大遊園地としたなら、登香客は勿論附近人士を前橋電車に吸集する敢て難事ではあるまい、而も六百萬圓の資本を有する利根發電の附屬事業として經營したならば、橘山を一大遊園地とする、極めて易々たる事業である、此目的を達するが爲めに要する十萬圓の費用の如きは前橋電車の將來を考へたなら何でもない筈である、社業繁多の故を以て之をなし得ないのは何が爲めである、敢て會社當務者の意見を聞きたいのである。

九、兩市の旅館

両市に於ける旅館の数は前橋四十四、高崎三十九で雇女は前橋五十九名、高崎五十三名、其差は甚だ僅かである。

今某消息通の語る處を聞くと高崎の旅客は主として一夜泊であるが、前橋の旅客は主に縣下のもので、一度宿泊すると永遠の顧客となるものが多い、即ち前橋の旅客は主として縣廳に關係を持つたもの、高崎の旅客は商人とか聯隊に關係ある客は別問題として、其他の客の大部分は信越方面への旅行者乃至伊香保浴客で長滞留をするものが極めて尠ない、其多くは夜高崎に到着して翌日一番で出發すると言つた様な客で占められて居るが爲めに、旅客自身も二度來るか如何か判つたものではないからと云ふ觀念で茶代でも手當でも極めて少額である、従つて宿屋の方でも通り一遍のお客だからと云ふので待遇は粗末になつて、宿泊料は高く取るが待遇は悪くなるのは自然免れる事の出來ぬ通弊で、是は旅客自身の罪も少くはないが、若し各旅館が永遠の考へを持して居つたなら此點は將來充分注意しなくてはならぬ。

前橋で中以上の旅館として數ふ可きものは桑町住吉屋宮内國太郎、本町白井屋兼松銀次郎、本町岩六金子政吉、同油屋田部井安太夫、堅町東郷館井田福一郎、曲輪町小泉屋小池米太郎、本町住屋小野田五兵衛、連雀町木屋小林常次郎、堅町白井屋小須田與四郎、横山町鍋屋松宮彌平、林小松林由三郎の十一軒で、其中一等旅館は住吉屋、油屋、白井屋、岩六、東郷館、小泉屋、鍋屋の七軒である、之に對して高崎市には中以上の旅館と目す可きもの十二軒の中、一等旅館は信濃屋、榮屋、高崎館、銀杏屋、三浦屋の五軒で、何れかと云ふと宿泊人の多くが商人である丈けに、高崎には旅館としては一等旅館よりも二等旅館が多きを占めて居る、従つて信濃屋とか榮屋の様な縣下でも有數な大旅館がある代りに其他の者に至つては前橋の旅館と比較して遙かに其設備が劣つて居る傾きがある、之は前橋が一縣の首都である丈常に名士の往來繁しいから、自然と其設備に就ても意を用ゆる様になつたのであらう！

公平な見地から批評して両市の旅館は其構造の上になつても設備の點からするも其待遇の上から見るも、之を全國の各都市の旅館に比較して決して劣つて居る方でないのみではなく、僅かに五萬位の市民を有する都市の旅館としては遙かに進歩して居ると云

ふ事は、全國を旅行するもの、等しく口にする處で両市の旅館が今日の様に發達するに至つたのは、實に明治四十三年前橋市に開催された一府十四縣の聯合共進會の賜である、此共進會以前に於ける両市の旅館は全國各都市の旅館に比較して頗る多くの遜色を有して居つたが、共進會開催の必然的要求に依つて今日の如く改良さるゝに至つたのである。

十、兩市の將來

前橋の交通機關の障礙をなすものは大利根の流れであるが、前橋を利するものも大利根の流れである、一度怒れば家をも田畑をも果は人命をも奪ひ去らなければ止まない大利根の激流も、其不斷の流れか如何に水の前橋を利益して居るであらうか、前橋が全國に卒先して製絲業の發達したのも亦此大利根の流れであつた、彼等は自然に大利根の流れを利用する事を知つて今も尙之を利用して居る、然し現在に於ける前橋市民の大利根利用法は稍時代遅れの感がないでもない、時勢の進歩と共に更に一大研究を重ねたなら、不斷の流れを貯へて居る大利根の一大富源を開發する事が出来るであら

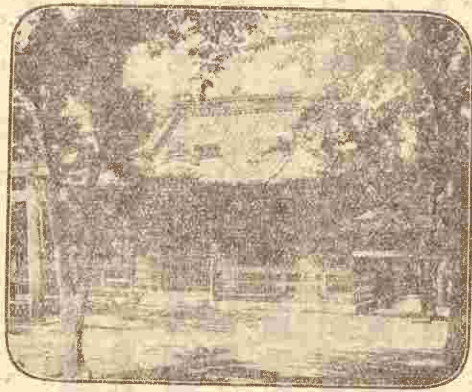
う！
 之と同時に前橋市は只製絲地として或は生絲の市場としてのみ満足して居るのは餘りに時代を知らぬものと云はなければならぬ、少くとも將來の前橋市は更に此原料品たる生絲を精製して、販路を擴張する方法を探らなければならぬ、現在前橋市で之をやつて居る工場は、片貝町の勝山機械工場並に曲輪町の清水織物工場の二ヶ所に過ぎぬ、兩工場とも相當の成績を擧げて居る處から見ても、前橋が織物業に適して居るの云ふ迄もない、特に無限の水力と之に依つて生ずる低廉な動力とを有して居る前橋市の將來は機械工業に最も適して居る。

高崎市に至つては其交通機關の完備が障礙を與へて居る事は僅少ではない、高崎が關東の商權を握つて居つたのは寧ろ交通機關の完備して居らなかつた時代の事で、今は既に三十年前の夢と消え、此交通機關の完備は高崎市の商業を衰退せしめて居る、即ち交通機關の不十分であつた時代の高崎市は、信越地方の咽喉を押へ物價の集散地として信越方面の諸商人は何れも商品を高崎商人に依つて供給されて居つた、隨つて高崎市の商業は卸商が大部分を占めて居つた、然るに交通機關の完備と共に、高崎商

人の顧客であつた信越方面の諸商人は、商品の仕入を爲すに當つて從來の如く高崎商人の手を経由するの必要を認めなくなり彼等は直接東京、横濱を初め原産地から商品の仕入をする事となつたので、之が爲に受た高崎商人の打撃は容易なものではない、之が爲めに三十年前迄は商業の主權を握つて居つた高崎市は、時代の變遷に伴つて卸商から小賣商人に轉じなければならなかつたが、幾百年來の習慣性は時代の變遷に伴ふ可く必要な轉化をなす可き智識に於て缺けて居る様である、其結果依然として彼等の頭の中には卸商人的の觀念が消えた事がない、此點に就ては高崎市民は充分將來に向つて考慮を要する問題であると共に、將來商業地として立つて行く事が困難になつて來た事を自覺したなら、之に代る可き何物かを見出し其れに向つて進まなければならぬ、即ち高崎市民は商業地から工業地に轉化しなければならぬ運命に遭遇して居るのである、昔から兩市は互に相反した方面に向つて進んで來て居る結果共同一致が利益であるのは知つて居りながらも、依然として相反して進んで居るのは、兩市の前途に取つて餘り感心した事ではない、研究子は將來兩市が一致協力しなかつたなら、兩方の運命を開拓する事の頗る困難なるを思ふものである。

十一、前橋の神社佛閣

▲八幡宮 前橋市の總鎮守で連雀町にある、貞觀年中上野の豪族長野氏の祖が男山八幡宮を勧請したもので、現在の殿堂は永祿十年神無月六日、武田北條兩軍の謙信の軍と戦つて兵火に罹つた際、再



東照宮

▲東照宮 前橋公園内刀根の流鏑金殿の如くに響いて來る堤防内にあつて、慶應三年松平家より川越から移封された時其祖家康を祀つたもので、主神を東照宮とし、天神宮を配神として、境内から利根堤上一帯には梅樹と櫻樹を配置して其老樹は前橋の一名物たるを失はぬ。

▲招魂社 東照宮の北方質素なる小祠は招魂社で日露にありし戦役の戦病死者を合祠して居る。

▲神明神社 神明町に在つて一名を神名山と云ふ境内の廣さ千八十五坪大日靈命を祀る、境内には小池があつて幾十株の櫻樹を初め松柏梅を交へて、幽清閑雅一日の清遊に適して居る。

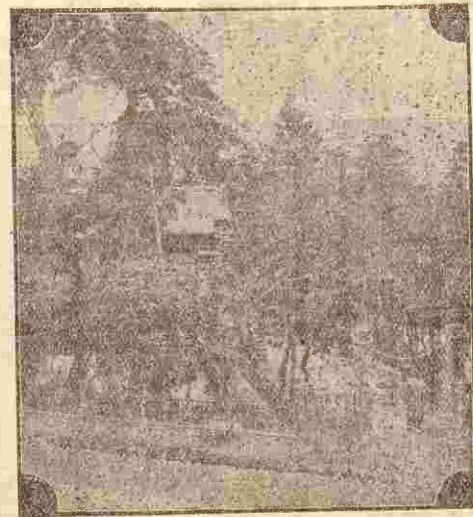
奇岩怪石を集めて小島を築き、辨財天を祀つて居るの清遊に適して居る。

▲其他の神社 には連雀町横山町の八坂神社を初めとして十有三社に達して居る。

▲龍海院 大利根の奔流、巖に激して怒吼する紅雲町の塵腸を洗うかと思はれる、幽邃靜寂の境に一寺がある、呼んで龍海院是宇寺と云ふ、徳川家康の父清康に依つて岡崎に建立されたるもの、酒井家の移封と共に此地に移されてから恰度二百餘年、酒井家の香華院で亦有栖川宮家の祈願所である、殿堂の壯嚴と顯徳の輩出まで其名を知られて居る。

▲光顯寺 天川町に在つて曹洞宗に屬し、松平家の香華院で、明治元年川越から移されたもの幕府時代には宗内法式會同の際の如きには、上州所在同宗寺院の上席であつた。

▲妙安寺 立川町に在り、眞宗東派に屬し開基成然坊は親鸞上人の直弟子で、上人自作の尊像を安置するが爲めに、下總に妙安寺を建立したのを、慶長年間前橋に移轉したもので、上人の尊像は家康の命に依つて京都の東本願寺に納めたが、寶物には後柏原、後陽成、靈元四朝の宸翰秀吉、家康の和歌、親鸞上人直筆の書畫等稀世のものが、少くはない。

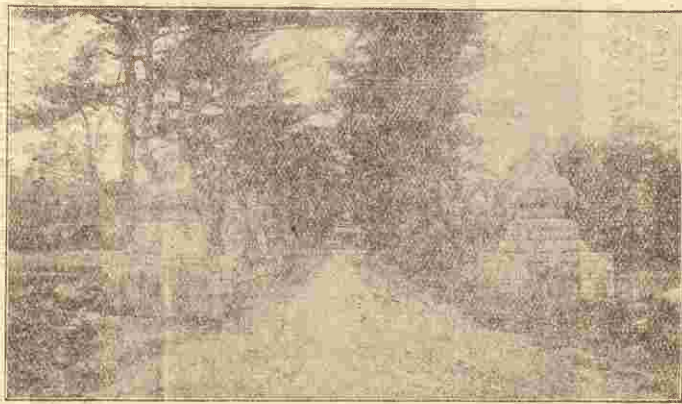


神明神社

▲其他の寺院 向町の橋林寺を初めとして二十
一ヶ寺の多きに達して居る

十二、前橋の名所舊蹟

▲前橋公園 前橋停車場から約十町、大利根の流を
脚下にして、激流堤を洗去るかと思はれる前橋公園
の規模は、自然の天景を配置して、園内は廣大を誇る事
が出来ないが、一度堤上櫻樹の陰に立つて四方を望む
と、脚下に大利根を叩へ、遠く眸を放つと信州駒ヶ岳
は白雪を戴いて雲間に高く、近くは淺間、赤城、榛名の三
山を一目の中に納め、堤北足下の公園内には大利根の流
れを引いて掛けた小瀑布が園内の盆地に落下し、池の中央
部の四屋は、數十本の櫻樹に圍繞されて夏の暑さも忘れ
しめる、而かも往時上杉謙信が湯沐の用に供するが爲
に掘鑿したと傳へられて居る風呂川は、小流ではあるが
東照宮傍の梅樹を繞つて涼々の響を發し、春光櫻



院 海 龍



園 公 橋 前

花の候に入るに長堤一帯只白雪の搖曳するのを見る
眞に前橋公園は其規模は小ではあるも天下の奇勝である
園内に在る

▲臨江閣

の屋後は古松鬱然蒼翠を集め、練絞を數



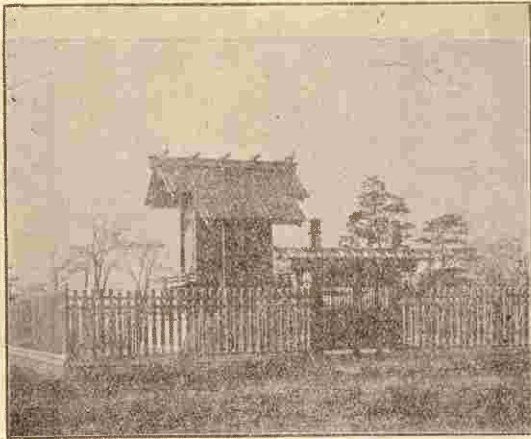
社 神 會 木

いた様な利根の長江に臨んで、共進會の副産物であ
る貴賓館と共に宏壯華麗人目を驚かすに足るものがあ
る、前者は明治天皇陛下の鳳鑿を止めさせられ、今上

へいかまたすうじつかんていりゅうあそ
 陛下亦數日間御留遊ばされたる名譽の記念品である
 ▲岩神の飛石 市の西北岩神町に傍ら廣瀬河畔にあり、岩下の一小祠は稲荷神社であつた。
 ▲近郷の名勝 には稀隔て、は赤城、榛名、妙義、伊香保、近くは木曾神社は勢多郡北橋村大字箱田村
 に在つて、前橋から電車に乗るに十町約五分間で達する、境内は幽邃閑雅宮内省御用の生洲があつて清泉
 に富んで居る

十三、高崎名所舊蹟

▲高崎公園 高崎停車場より十町若松町に在つて、烏川の清流に臨み、遠く淺間嶽名妙義の諸山
 近く觀音山根小屋の城山等を一眸の中に收め、天然の佳景畫の如くである、抑も當公園は明治九年、舊大
 染寺跡凡千餘坪を買収して梅櫻其他の樹木を植へたのに起因し、其後日露戦役後戦病死者の招魂社建
 設と共に、今日の如く規模が擴大される事となつた、公園中央には英靈殿があつて、戊辰以來國事に奔走し
 て命を損した志士勇士を合祠して居る、園内の瀟水は高く空に沖し、坂を降つて烏川畔に至るに斷崖絶壁の
 間千仞直下の瀑布があつて夏の暑を忘れしめる、實に高崎市唯一の遊園地である。
 ▲頼政神社 大河内氏の始祖である源三位頼政を祀つて在る神社で、高崎公園に隣接して居る、元祿十
 一年松平右京大夫城主となると同時に伊勢の森を拓いて社殿を創立し大染寺を以て別當となし、祭典造
 營等總て城主が行うの例となつて居つた、境内二千二百二十一坪眼下に烏川を扣へ、西方觀音山に相



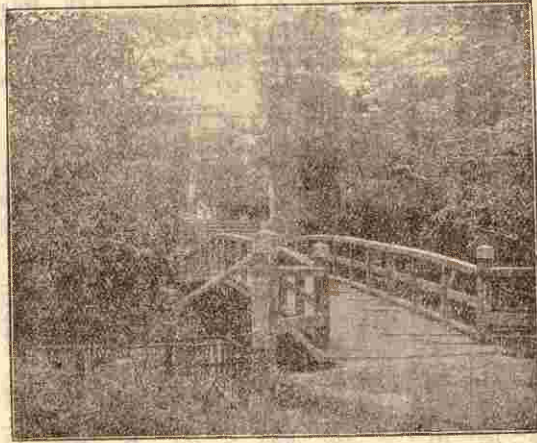
英 靈 殿



高 崎 公 園 瀑 布

對峙し四季の眺望頗る絶佳である。
 ▲高崎神社 寛元年中和田小太郎正信相模國三浦から勧請し熊野神社で、慶長三年井伊直政箕輪か

ら移城した時、高崎市の總鎮守として此方、市民の尊崇を集め、氏王三十九ヶ町に達して居る
 ▲神武天皇遙拜殿 は市の西北方上和田町にあつて、明治十年の建設になり、土地高燥眺望絶佳、

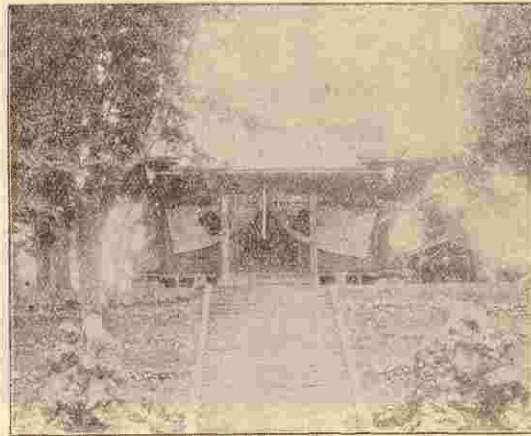


橋 傍 飲 武 神

▲弘法大師

高崎停車場から約四五丁の左側にある延養寺内の大師尊像は、高野山の御分身一刀三體の大師を安置して居るが、此大師の尊像は人皇百八代明天皇の御宇、寛永十一年高祖弘法大師が八百

年の御延忌に際し、高野山の法燈第二百三十三世實度阿闍梨上人が、泉生濟度の祈願を立て、自ら刀を取り一刀を下す毎に三度禮拜して、滿三ヶ年の丹誠を凝らして調刻したもので、其靈驗の顯著なる事は云はずもな日本全國中唯一つの尊像で、恰かも生けるが如くである同寺に大師堂を建設するに至つたのは、明治四十三年十月三十一日の事で、現住職村越宥範師が、前住職宥徹氏の遺志を繼いで奔走した結果である



社 神 政 頼



社 神 崎 高

▲成田山 成田山高崎出張所は、明治十年の建設に係り、信徒三千餘名を有し例月廿七、八兩日縁日を執行し常に参拜者で立錫の餘地もない盛況を呈する

正面の池上に板橋を架して敵火橋と名づけ、其傍に神武の鑛泉と稱する温泉もあつて、浴客織るが様でリウマチス胎毒等に奇効がある云ふ

十四、兩市の新聞界

両市に於ける新聞界は上毛、上州、群馬、上州産業、上野新聞の五つの地方新聞が發刊されて居る外に、東京新聞で地方版を有するものに國民、報知、朝日、やまと、中央二六の六新聞があつて、競ふて縣下に起れる出來事を報じ、其發達の程度は遙に他府縣の上位を占め両市に於ける誇りの一つである、兩市の新聞事業の偉大なる發達が、他府縣の誇りの一つであるのに加へて、今一つ兩市の新聞界中に光彩を添へ、一致協力百万縣の利益を増進し、合せて同業者間の智識の交換をなし、稍々ともすると相反目し易い同業者を結んで、終始變らぬ契の下に歩部を進めて、漸次同業者間の品位を高め、同業者の模範たる事を期して居る一つの誇りがある、其れは即前記東京の六新聞群馬編輯主任並に栃木縣宇都宮市に本社を有し、前橋市に支局を有して居る下野新聞群馬編輯主任に依つて作られて居る、東京各新聞支局團體七日會である、七日會の創立は、明治四十五年二月七日の發會式に依つて、公然上毛の天地に名乗りを擧げ、茲に二星霜を圓滿に發達して、今や七日會の行動如何は、群馬縣の各方面に重大なる

影響を與ふる迄に進み來れる、亦本縣新聞界の誇りの一つである、獨り上毛の天地のみではない、各地に於て比目的を達せんか爲めに、新聞記者團の設立されたものは擧げて數ふる事は出來ないが、何れも二ヶ月乃至數ヶ月で、有名無實のものとな化し去つて、眞に同業者の爲めに氣を吐く迄に至るものがなかつたのに、吾が七日會が、二星霜を同一歩調の下に進んで來たと云ふのは、蓋し特筆大書すべき事ではなからうか更に七日會の生立及其の内容を詳細に説明する事は、著者の尤も希望する處であるが本書は紙數に限りがあるから、之を他日に譲つて、地方東京を合した十三新聞の内容を述べて、此稿を結ぶ事とする。

▲上毛新聞

明治十四年一月梶山氏經營の下に、上毛新聞が創刊されたのが本

縣に於ける日刊新聞の濫觴であつた、續いて明治十六年には、上野新聞が創刊され、人生の自由、社會、革進の旗幟を眞先に押立て、大活動を試みんとしたが、其目的を達するの前、不幸祝融子の災に罹つて、亦起つ事の出來ない悲運に際會したので、更に經營者を代へて再刊を企てた處へ、篠原叶氏が群馬日報を起し、遂に上野群馬兩新聞が合併して、今日の上毛新聞を爲すに至り、號を重ぬる八千、發行部數、亦地方

新聞の首位を占めて居る、社長篠原叶氏は温厚の君子人であるが、新聞經營の手腕に至つては先天的に技能を有して居るかとも思はれる、編輯部には橋本千輝の兩氏あつて非凡の手腕を有し、大正二年七月一日輪轉機を据付け、編輯法を改め、新發展を計畫して居るが、餘りに老境に入り過ぎ紙面の活路意の如くでない恨は免かれまい。

▲上州新報

號を重ぬる事五千六百餘、一時小形六段の赤新聞時代に於ては、社長高橋安政居士の怪腕が、上毛新聞界に一新時期を革するかと思はしめたが、安政居士世を去り、繼子東氏熱心發展に努力して居るも、未だ年齒若き恨みあると共に、殿江醉郷氏昔日の活氣なきは稍遺憾とする處であるが、其れでも折々の氣焰万丈は赤新聞時代に於て見た筆端錐の如き昔しを忍ばせて居る。

▲群馬新聞

明治卅二年十二月十五日の創刊にして、號を重ぬる事四千有餘、創刊以來幾多の變遷と、幾多の困難とに打勝つて、社長を代へる事四度現社長加藤紫雲氏に至つて編輯に前野老人を容れ、營業部長に香川氏を擧げた結果、紙面の活躍は尙讀者を満足させる事は出來ぬが、營業部の活躍と共に日一日と發展向上を告げて居るのは、同社の爲めに祝福しなければならぬ。

▲上州産業新聞

大正二年四月の創刊で本縣新聞界の最年少者である、主筆井上長三郎は新聞界の元老主幹田島義方氏は勢多郡の有力家で、編輯に神田大井の兩氏あつて、大に發展を企畫して居るが、未だ其目的地に達するは、前途遙かに道遠しと云はなければならぬ。

▲上野新聞

本社を高崎市に有し高崎市唯一の日刊新聞で、極端な政友會否武藤金吉氏の機關新聞で、前橋支社主任は山田豐藏氏である。

▲國民新聞群馬支局

國民新聞支局が前橋市に設置され、群馬版を發行するに至つたのは、明治四十二年二月で、群馬縣に於ける東京新聞地方版の先驅である、而かも主任根岸香溪氏は、前橋市新聞界の元老で、筆を取つては世既に定評があつて多くを云ふの必要もないが、社交の人としては圓滿篤實、社會の信用を集め、七日會の發展亦君に負う處が尠くはない。

▲報知新聞前橋支局

報知新聞が群馬版編輯部を前橋市に設置したのは、四十二年十一月で今や滿四ヶ年を経過し、國民新聞と相對峙して常に發行部數の多きを以て誇つて居る、創立當時の主任秋本二郎氏去つて、大正元年不肖栗田曉湖任に就き

奮闘努力の結果漸く其の苦心を認められて来たのは、吾輩の秘かに感謝して居る處である。

▲やまご新聞前橋支局

其支局を前橋市に設置したのは、明治四十三年九月で、主任は設置以來手塚鼎一郎氏之に當り、無邪氣と酒豪で其名を知られて居るが、出身は栃木縣芳賀郡の人、三年泣かず飛ばすの夢から醒めて、三週年の大發展を計畫し一大飛躍をなすの準備中だど。

▲朝日新聞前橋支局

四十三年九月の設置で、現在の主任須永兵治氏は、嘗て上州新報に於て營業部の主任であつた人、其上州新報時代には、怪腕を以て鳴つて居つたが、今は一變して眞面目な新生涯に入り、社是に従つて極めて熱心に而かも忠實に自己の職業を死守して居る奮闘家である。

▲二六新聞前橋支局

設立は明治四十四年五月で、現在の主任平井霞山氏は三州豊橋在の人、全身活動の血に満ちた交際家で、時に奇行を演じて話題に上る事が屢々であるが、其鋭い筆端は所謂二六式を遺憾なく發揮して、二六新聞群馬版に一導の生氣を添へて居る、而して君は亦七日會に必要欠く事の出來ぬ第一人者である。

▲中央新聞前橋支局

明治四十四年十月の設立に懸り、現在の主任香川氏は群馬新聞の營業部長として、其手腕は等しく同業者の認めて居る處、群馬縣に於ける中央新聞の今日ある、實に君の力で、社交に長じた温和主義の人である。

▲下野新聞前橋支局

明治四十四年十一月の設立で、現在の主任前野老人は群馬新聞編輯長を兼ね、常に不得要領主義を標榜して、而かも頗る要領を得て居る人で同業者中稀に見る續書家で亦酒豪家である。

十五、兩市の花柳界

(一) 前橋三ヶ町艶史

前橋の花柳界は寧ろ通俗的に三ヶ町と呼んだ方が早判りがする、三ヶ町の起つた由來は何時の頃であつたか今記憶して居る人はない様だが、抑も此處の花柳界を通俗的に三ヶ町と呼ぶに至つたのは、此里の中心點が紺屋町、榎町、横山町と云ひ恰度三筋の糸にも因む如く判然と區轄されて居つた爲めで、現在では立川町の一部も此中に含まれる様になつたが、其中心地は依然として前記三ヶ町である。

抑も前橋に藝妓てふ意氣な姐さんが入つて、三絃の音に浮れ男の心を嗔つたのは何時の頃かと質ねると、明治も未だ初めの頃、花のお江戸の日本橋と唄に謡はれた、時分、前橋にも鬢に艶濃く襟足美しく左褌とる裾捌き優に柔しい意氣姿が見え初めた、爾來春風秋雨三十餘年！世は大正と改まつた今日、三ヶ町には百餘名の藝妓と二百に餘る酌婦……白首……とが軒燈の影も艶めく夜毎、狭い小路に燕脂の香を漂はして、夜の前橋に歡樂の巷を作り、憂世の苦勞も何處へやら盃洗の水にサラリと流して、浮いた／＼のサツテも面白や、實は心から浮き兼ねた必の苦勞を婀娜な粉黛に秘めた藝妓の一本が九十三名、半玉が十六名、合計百九名の綺麗首、之を全國の都市に比較して見ても數の上に於ては決して尠い方ではない、然も尙前橋の花柳界は今が全盛時代ではない、日清戰爭終了後から日露の大戦役の始まる迄の間こそ、比ひ稀なる百花撩亂、前橋藝妓の數と言へば二百五十餘名に達したもの、が偕て不景氣風に誘はれて、今は其半數にも達して居らぬが、尙他の都市との比較を取つたなら、決して前橋花柳界が寂寞だとは申されぬ、いでや三ヶ町の現況を御披露するに先だつて過越方や如何にと見やう！

未だ明治の初年維新の大業が漸く成就して、廢藩置縣と世は變つても血醒さい風が吹き止まなかつた頃の頃の前橋には、料理店として見る可きものは、僅かに堅町の嬉野樓と本町の今平井酒店のある附近にあつた丸よしとの二軒に過ぎなかつた、其他は何れも腰掛茶屋式のものゝみで料理店と認む可きものはなかつた。

二軒の料理店の中丸よしは今は如何なつたか跡形もなく消え失せて、其行末を知つて居るものは尠いが嬉野樓は今も尙前橋第一流の料理店として、大小の宴會を初めた忍びの紳士紳商が絶えず輕車を寄せ給ひ、座敷の構造から器具に至る迄頗る注意が行届いて居る、……が其當時には今の様に立派な行届いたものではなかつた、古老の語る處では料理店とは只名のみ實際は腰掛茶屋の稍々進歩したもの……一寸した座敷があつて酒も飲めれば料理の注文も出來、若い三四人の酌婦が居て酒の相手をしたと云ふに過ぎない極めて幼稚なものであつた相な。

従つて此當時には藝妓屋もなければ藝妓もない、頗る開けない土地であつたが、世の開け行くに従つて人間が贅澤になり流行を追ふ様になつた、斯くて明治元年の頃初めて前橋に藝妓が出現して若い男の胸の血を跳らせた、藝妓を初めて前橋に輸入した

のは嬉野樓で東京の場末から、本場所には不向の賣残り藝妓を四名連れて来て嬉野樓の内藝妓とした、是が前橋藝妓の元祖である、が前橋に藝妓置屋が出来、藝妓を専門の稼業として營業するものを生じたのは、夫れからサツと一昔し余りを過ぎた明治の十年前後の頃である、此藝妓置屋の草分けは、現に朽木縣佐野町附近に七十有餘歳の長壽を保つて、老を養つて居るとの噂のある柳屋の福吉と、料理店壽の女將となり濟して居る萬屋の鶴吉と、先々代の福田屋のちもちやの三人で、何れも數名の抱妓を置き、藝妓稼業を始めて此方昔の腰掛茶屋は料理店と變り、生絲業の發達と政治思想の普及とに依つて東京横濱との往來頻繁となり、木綿着物を着た田舎娘の外見た事のない人達も、江戸へ上つて交際上から白粉の香を知る様になつては、曰く其樂み忘じ難しで、前橋に歸つて後の藝妓を要求する心が止まない、是等が自然の機運を作つて八人や十人の藝妓では目の廻る様な忙しさを、忽ち藝妓の數も殖る藝妓屋を本業とするものが増加し、其年の暮には十數戸の多きを算ふるに至つた、勿論當時の藝妓は今の様な進歩したものではなかつた、何を言つても未だ交通機關の發達しない當時に於ては、少し遠方への旅立は駕に乗るか馬の背を借りるかの二途を取るの外なかつた

頃で、山の中の前橋では今時の人間なら見た丈で氣色を悪くする様な、鮪の辛い鹽漬を水に漬けて鹽戻しをした奴で、刺身を作つたと云ふ時代であつたから大概は想像するに難くはない。

明治初年から二十七八年の日清戰爭時代に至る迄は、前橋藝妓の初期時代とも申さうか、萬事が整つて居らぬのは云ふ迄もない、何を言つても鮪の鹽漬を刺身に作つた時代であつたから、藝妓の衣裳だつて今の様に派手な金の費つたものではなかつた、マア綿銘仙の着物に、唐縮緬の長縹袴と言つた具合で、今日のやうに晝の夜のと言ふ様な嚴格な區別もないのだから、今時の素人娘でも、當時の藝妓よりは常の衣類でも餘程派手だと云へば大概は察するに難くは御座るまい。

夫れが年と共に漸次發展に發展し、日清戰役が終りを告げた、明治廿八年以後から日露戰爭の初まる迄の約十年間は、前橋花柳界の全盛時代であつた、世の中が一時に景氣付いて來たに搗て、前橋には米穀取引所が出来、各地の商人や相場師が集り、從來の生絲の市と共に前橋に二大市場を作つた、普通の商人とは異なつて、一獲千金の夢を見て居る相場師の事だから、費途も随分荒く、前橋の花柳界に落した金はチツ

トヤツトではなかつた、彼等が金使の荒りに連れて、「何俺だツて奴等に負て耐まるものか」と湯水の様に金を費ふ意氣張の強いのも出て、料理屋の繁昌はドラエイもの今尙盛んに營業して居る料理店の多くは、此當時に開業したもので、僅かに十軒足らずの料理店は、忽ち一二年の間に五十を算するに至つた。

従つて藝妓の數も二百五十餘名と云ふ、前橋初まつて以來の多數になつた、此當時の姐さん藝妓には、花榮家の秀吉新萬の久松、松三河の松壽……年頃のでは評判の萬家のおこん、新萬の又平(前代)菊本の菊松、桐柱家の小直、梅月の大福、新三吉野の三代治等が全盛を誇はれて居つた、衣裳も初期時代に比較しては稍々華美を競ふ様になつたが、夫れでも尙漸く銘仙が糸織と變つた位のもので、お召縮緬の時代に入つたのはズツと後年の事である。

此當時の前橋藝妓は、着物こそは漸と糸織位のもので、今時の藝妓と比較して形の上では頗る開けないものであつたが、流石全盛を誇はれた時代丈あつて、今時の藝妓に比較しては藝の上にも、意氣張の點にかけても、座敷の取廻しに就ても、數段の光彩を添へて居た、斯る程に日露の風雲漸く急を告げて來た頃からは、米穀取引所

は廢止となり、爾來前橋の花柳界は年一年と衰退して、其昔全盛時代には二百五十餘名に迄達した藝妓は、其半數にも達しない百十九名に落ちて了つた、只此衰退時代に於て特筆す可き事は、本縣空前の大事業であつた、一府十四縣の聯合共進會が前橋市に開催された事である、此共進會は前橋藝妓をして糸織時代から今日の様なお召時代に變化せしめた、勿論お召の流行は共進會の前二三年からではあるが、今日の様に藝妓の服裝を華美にしたものは、此共進會のお蔭で、前橋藝妓の本能が下方である云はせたのも、此共進會時代に下方の師匠六合新三郎が來て、嚴重に稽古を附けたが爲めで、是亦共進會の副産物であつた。

二 前橋の料理店と見番の變遷史

現在營業して居る料理店で古いのは嬉野と柵屋であらう、柵屋の女將は今でこそは白髮頭の梅干婆さんになつて居るが、其昔若かつた頃は、前橋の花柳界で五本の指に數へられた、瘦い腕を持つた美人であつたとやら、此外に尙明治の初年には、馬場通の北側に、梅田家といふ料理店があつて、此處の内藝妓に小久といふのがあつたとも聞いて居る、此時代に堅町に新嬉野、諏訪町に光林亭、横山町に金川と言ふ三軒の

料理店があつたが、明治十年頃には是等は、前橋市では一流の料理店で、嬉野樓や中よし等と共に、腰掛茶屋式を離れ料理店らしいものとなつて来て居つた。

此當時の藝妓は稍藝妓の態を供へて居つたが、明治十年以前の藝妓は、何れも料理屋の内藝妓で、客が登樓すると同時に是等の藝妓は、五人でも六人でも其家に居る限りのものは、一時に三味線抱へて客席に現れ、景氣を添へたもので、一種藝妓の押賣であつたが、其代り今時の藝妓とは違つて玉代と云ふものがない、只五人なり六人なりの藝妓に對して、一人に一步宛の祝儀を與へると夫れで充分であつた、其の中に他の室へ客が登樓すると、今迄甲室の客の前に居つた藝妓共は、又乙室の客の前に現れるので、斯うして一日に客さへあると五つでも十でもの席に侍べる、祝儀は僅かに一步に過ぎなかつたが、其れでも相當な収入があつたもの、恰度現今に比較したならば三味線持つた乙部料理店の酌婦の稍高尚なものであつたのだ。

是が明治十年前後になつては、藝妓も大分進歩して、料理家も漸次江戸風に化せられる様になり、藝者は箱屋に送られて、何れの料理店の客席へでも侍べる様になると同時に、今の横山町通りに初めて嬉野、新嬉野等の料理店と藝妓屋の明石家とが協同して見番を設置し、玉一本に對して一錢の手數料で、見番事務を取扱ふ事となつたのが、前橋に見番の出来た濫觴である、其後此見番が紛擾を生じて倒れると共に、明治十五年新しい見番が出来、横山町で營業をして居つたのが、明治十六年の俗にいふ住吉屋火事（之は火元が住吉屋と云ふのでなくて、住吉屋の附近から發火したから俗に住吉屋火事と呼ぶのが早判りがするからである）の爲めに、見番を初め料理店や藝妓寄宿宿の殆ど全部が焼け出されたので、火事が濟んだ後見番は田町の今の四ッ角附近で一時營業をして居つた。

茲に面白い話は、此當時の箱屋は頗る氣の利いたもので、チョツトした踊も踊れば三絃も弾く唄も謠ふと云ふ有様で、今の幫間の様な仕事もやつた頗る便利なものであつたから、客も亦藝妓と共に箱屋を呼んで座敷の取持ちをさせたもので、少し通人な客になると箱屋の總揚げをしたり、箱屋中で出入を定めたりして遊んだものであつた。此見番が約十年間も營業を繼續して居つたが、當時物價の安い時代でありながら、見番の手數料が玉一本に就て一錢宛であつたので、寄宿宿連中からは此手數料は餘り高過ぎるといふ議論が起つて、何時か機會があつたなら手數料値下げをして呉れ様と

の念は、常に寄留宿側の胸に疊まれて居つた、遂に一寸とした機會から是が公然の問
 題となり、先づ三河家の吉さんと呼ぶ藝妓家の主人に依つて此値下げ問題の口火が切
 られ、一錢の手數料を五厘とする様に見番側に申込んだ結果、見番側と寄留宿側とは
 再三會見をして、協議を就けたが兩者とも堅く自己の主張を取つて動かなかつた。
 此當時藝妓寄留宿に丸がけ家といふがあつて、最初から見番に反對して獨立見番で
 營業をして居つた、此丸がけ家の後から綱を引いて居つたのは、細ヶ澤村の島清さん
 で、前記の不平等は自然之に集まつて、遂に大なる勢力を作りて獨立見番を建て、約
 三ヶ年間二つに別れた見番は兩立して營業をして居つたが、丸がけ家の主人が東京で
 彼の世の者となると間もなく、前橋の花柳界目抜の場所は、料理店と云はず寄留宿と
 云はず殆ど其全部が龜田屋の火事で焦土と化して終つたので、自然此榎町見番も倒れ
 て終つた。

此結果として寄留宿の主なるものと、二三の料理店と見番再興を計つて居つた處へ
 今の赤城亭の主人で市の有力家の一人である羽生田仁作君が乗出して、彼等を援ける
 事となり、見番を組織したのが即ち現在の横山町見番の成立した初めであつた、處が
 此見番も亦三十年の五月に一度分離し、榎町見番と横山町見番との二つに別れ、約六
 年間に亘り両々相譲らず、新見番舊見番の二つに別れて競争を持續して居つたが、三
 十六年の夏となり、相合して現今の取締所を開設する事となつた。

現在の取締役岡田文吉君が見番と關係を有するに至つたのは實に此時であつた、爾
 來十有一年、其間日露の大戦役と、一府十四縣聯合の大共進會とがあり、前橋花柳界
 は戦勝の餘光と、共進會の盛況とで相當な繁昌を誇はせたが、横山町見番は依然十年
 一日の様に何等の反抗も起らないで、持續するに至つたのは前橋花柳界の爲に頗る喜
 ぶ可きであると共に、之が經營者たる岡田文吉、羽生田仁作氏の幸福である、勿論此
 見番は前橋花柳界の全盛期を過ぎて、稍下り坂に向つて來た時に合同したものであつ
 たから、全盛時代の榮華の夢を貪る事は出来なかつたが、夫れでも尙百二十名に近い藝
 妓を有する前橋で、只一ツの見番が是等の藝妓置屋を巧に利用して内部の情勢は兎に
 角、表面に立つて反對の聲を揚させ得ないに至つては、其經營振の巧なるに感服せざ
 るを得ない。

(三) 高崎花柳界の沿革と變遷

高崎市も亦前橋市と同じ様に、明治の御代になる迄は藝妓は勿論料理店もなく、興行物さへも許可されて居らなかつた位だから、酒席の興を添へる爲めには、稀に遊藝師匠の類を宴席に招く位の事で、遊興と云へば倉賀野板鼻邊の飯盛女(今の遊女屋)に赴くといふ有様で、明治になる迄は花柳界に就て特記する程の材料もない、明治二年廢藩置縣と共に、常設芝居小屋の築造を許されると同時に岡源、清香庵等三四軒の料理屋が出来たが、其他に至つては茶漬茶屋即ち腰掛茶屋に過ぎなかつた。

高崎に初めて藝妓の出来たのは、實に此明治の二年高崎市に常設芝居が許可された時が初めて、二名の藝妓が東京から輸入されたのに初まつて居る、四十五年を経過した今日では三業、共同の兩見番に五十六名の藝妓と、十名の半玉とがあつて、二百に近い白首(酌婦)と共に花の高崎を彩り、紅燈綠酒の巷に三絃の音を緩めて、意氣地も張りも其方除けの極めて當世式に御繁昌をして御座る。

新見番に於ては現在營業をして居るものは、寄留宿十軒、此藝妓の数は本玉三十五名半玉五名で、舊見番に在つては寄留宿十二軒で本玉二十一名半玉六名合計二十七名を算して居るが、舊見番即ち三業見番が現在僅かに二十七名の藝妓をしか有せざるに至つたのは、去る四月以來見番と料理店の紛擾の結果、料理店から箱止めといふ大打撃を受けて居るのと、今一つは時節柄の不景氣風に誘はれて、土地に居るより出稼の方が遙に利益だと云ふので、伊香保草津の様な温泉地に出稼に行つたものが少くないからで、例年秋から春の景氣の好い時には其數も八十名乃至九十名に達する、現在では其數に於て既に前橋市の半數にも達して居らぬが、前橋と高崎の花柳界が確かに餘程の段階のあるのは事實であるとするも、此數の上に於ける程の懸隔は持つて居らぬのは研究子の信じて疑はぬ處である、いでや此花柳界の起原以來四十五年間に亘る變遷の概略を叙述して、然る後兩市花柳界の比較論に入らう。

(四) 高崎見番の變遷略史

明治初年の高崎藝妓は又前橋と同じ様に、其多くは料理屋の内藝妓で、今言ふ様な藝妓の資格は備へて居らなかつた、衣類の如きも漸と銘仙位のが上の部で、水牛の撥でも持つて居ると夫れで威張つて居つたもの、矢張り三味線持つた白首に過ぎなかつたそれが年一年と發展して、明治の九年には藝妓寄留宿が二十四軒、藝妓の總數八十餘

名の多きを算するに至つたのは、如何に時勢の要求とは言へ、其急激な發展には驚かざるを得なかつた、茲に於てか取締所設置の必要を感じ、遂に其年の六月割烹店藝妓屋聯合の下に、見番を設置して藝妓取締所と命名し、一銭の手數料で見番事務を取扱つたが、明治廿七八年の日清戰役當時は一層増加して百名以上に達した事もあつた當時二三流の料理店中には、玉代の支拂が出来ないで、見番に迷惑を掛けるものが尠くなかつた爲めに、見番では藝妓屋に向つて月二回の精算日に於て、満足に玉代の支拂をする事が出来ない、之が原因となつて先づ料理店と藝妓屋とが感情の衝突を來し遂に見番と感情の融和を缺く様になつた結果、藝妓屋中の中流以上のものと、料理店側の二流以上のものとが自然に一致して、藝妓取締所を脱會する事となり、新たに高崎見番合資會社を設立するに至つた、此見番會社の存立期限は十ヶ年であつた。

斯くて高崎の花柳界には、新舊兩見番が成立し、兩者間に於ける惡感情は二十年を経過した今日も、尙依然として融和する事が出来ず、犬猿も當ならぬ間柄となつて居る、同じ人口を有し同じ富の程度を有する前橋に、一時藝妓の數二百五十餘名を算するに至らしめたるに反して、高崎が其全盛時代にあつて、尙僅かに百名の藝妓を有するに過ぎない寂寞を感じしめた原因は此處にあるのではなからうか、其後明治三十三

年になつて、舊見番は取締所の組織を變更して、三業見番合資會社となり、新見番は三十九年を以て會社の存立期間満期となるや、共同見番組合と改稱し、今も尙見番を兩立して居るが、兩派峙立の結果は、自然營業上にも兩派互に異なつた方面に向つて發展し、其色彩を異にして居るのも當然と思はれる。

が併し、日露の戰役も終りを告げた後數年間、即ち明治四十二三年頃迄は、藝妓の數に於ては新見番即ち共同見番は、到底舊見番即ち三業見番の敵ではなかつたが、分離の當時中以上のものが集合し、中以上の料理店と協力して見番の組織をした丈に、舊見番側が華美を追ひ、世の新風潮に乗じて進んで行つたのに反して、後者は飽迄も着實に其品位を重んじ、高尚優美を尊ぶ様になつて居つたのが、現今に至つては新見番三十九名に對して、舊見番は僅かに二十七名にしか達して居らぬ、而も新見番は將に其全盛期に達しやうとして居る丈に、舊見番に比較して衣裳の點に於ても、亦藝の點に於ても遙かに優つて居るかの様に思はれ、數年前迄は華美を競うて居つた舊見番側は、今は只時代の風潮と生活難の爲めに、藝以外により多くの發展をなしつゝある

勿論新見番と雖も藝を以て賣つて居る藝妓が幾人あるかと數へたなら、何處も同じ秋の暮、頗る寂寥を感せずんば居られまいが、只舊見番が凋落の悲運に際會して居る丈一層目立つて見られる。

(五) 外形上の進歩と内部の墮落

前橋の藝妓も高崎の藝妓も、衣裳持物の點に於ては、十年以前の藝妓と比較して確かに優つて居るのは疑ひもない事實で、兩市共に明治三十年頃には、衣類だと云つても今の様に、夜の畫のと區別もなければ、頭髮のものから足袋に至る迄、今日の様な贅澤なものではなかつた、例へば一人の藝妓が金の指環でも持つて居様ものなら、世間からも仲間からも、彼の妓は大したもの金の指環を箱めて居る……アラ金の指環を？と驚きの目を睜り、嫉妬の念で羨望されたものであつたが、此數年來はダイヤ入でなければ少くともルビー入と言つたやうに、寶石入の指環位持つて居らなければ、藝妓の資格の缺けて居るかの様に思はれて居る、否恥辱である迄考へられて居るが如く外形上に於ける彼等は、十年以前の彼等に比較して幾倍かの進歩を示して居るが、藝妓の藝妓たる可き資格に於ても、果して此外形の進歩に伴なつて居るであらうか？

能といふ點に於て、又は意氣とか張りとか云ふ様な特色に於ては如何であらうか？昔は前橋も高崎も共に、義理の爲めには水火の中も辭せなかつたのは、上州男子の本領であつたが、此長脇差の血脈も明治の半迄は、世の進歩發展に伴つて人心漸次利己主義に返つて行つたとは言ひながら、尙幾分かお互の心の内に残つて、夫れが自然花柳社會を迄も支配し、兩市の藝妓は美人系と言ふよりも意氣と張りで持つたものが、昨今の有様はマア何と云ふ事だらう！俠なるはお轉婆と變り、滋味より美華が流行を極める今の世は、義理堅いは野暮の骨頂と嘲けられる有様ぢやもの、三絃とは枕の假の名よ、お座敷とは床の符牒と心得て居る藝妓の多いのも尤もな次第とは、さても驚くに絶へたりとでも申す外はないが、之も當世式とあつては今更何とも申す可き言葉は御座なぬが、何と云ふても此不景氣空に、堅い事許り云ふて居つたのでは毎夜のお茶挽きに定つたり、夫れでは何處迄も派手な商賣に出來て居る藝妓の生活が如何して立つて行かれるかとは或不見轉藝妓の述懐談ちやが、之も一應御尤もとは合點し乍らも、研究子には果して其罪は藝妓にある乎？社會てふお客の力にあるかは何方とも軍扇の揚げ場に困るのだ、と言つて兩市の藝妓に澁い咽喉を持たせないで、漸次

不見轉藝妓の名を謠はせるのは、お客の罪が最も多いと云ふのに異論を挟むものではない。

兩市の藝妓が意氣どか張どかを失つて、骨抜と化して終つた動機を調べて見ると、三方面から觀察する事が出来る、其一つは即ち社會の罪、二つには収入と支出とが一致しないで生活難に苦む結果、三つには本縣下には公娼が許されて居らぬ事、此三つが藝妓をして罪惡とも思はしめないで、不知不識の間に意氣と張とを失ひ、交番藝妓の名稱を冠せられたのでは御座るまいか、粹と濫いが身代とは昔の夢？線香の數のみは殖えても櫛の跡、爪の跡紫色に仕上げられた藝妓は、薬にしたくも見事事が出来ない、三味の音は野暮の骨頂と言つた様な病勢も、既に第三期を過ぎて終つてはチト恢復も覺束ない、眞に心細い次第ぢや。

六 當世流の早や判りは私娼と對抗の必要か

昔の粹人粹士と言はれた人々は今の藝妓を見て何と思つて居るであらう！藝妓寄留宿でもお客がお客なら、お客の趣向に適する様にするのが當世流の早判りと、三味線持つ事すら知らなかつた糸挽き工女や、昨日迄は子守奉公をして居つた者を連れて来て、

二ヶ月か三ヶ月の急拵へに三味線持つ事を教へ、漸と雨シヨボカカツボレでも踊れる様になると、最早藝妓の資格を備へて居るかの如くに考へ、客席に侍らすのたもの、彼等をして藝妓らしかれと注文するのはチト無理ではあるが、お客自身が又其様に濫い咽喉よりも、牙えた三味の音よりも、風呂場の板の間で漸く覺え流行節を怒鳴る位で、夫れ意外の注文は二と云つて二と判る妓を重寶がる有様、藝妓らしい藝妓が賣れないで、子守上の尻輕者に玉高が多いと云つた風だもの、寄留宿で藝に金を費けるのは、馬鹿の骨頂と迄云はせるのも無理ではない。

さて其次の収入と支出とが伴はないとは受取れぬと覺召す御方も御座らうが、金が物言ふ世の中に、況して此社會は此風潮が最も激しいのだから、金の廻らぬ藝妓と來ては例令藝があつても人氣は呼ぶ事が出来ぬ、お客の財布の底を叩かせる事を氣の毒とも思はぬ、否寧ろ當然と心得て居る藝妓でも、多くの収入を得るには得る丈の費用を掛けねば娼賣は繁昌するものではない、甚麼に腕に覺があつても、夫れを認めて貰ふ迄には容易な事ではないが、養女とか娘とかなら寄留宿でも一生懸命に賣出させ様と、相當な金も掛るが、さて普通の抱妓位では二年か三年の年期が終ると、後足で

砂を掛けられるのだから、寄留宿だつてさう、澤山の費用を掛けては、高い身代金を出して抱へて割に合ふものぢやない、立派な弗箱でも持つて居るものなら兎に角さうでない限りは賣出す迄の資力が續く者ではない、況や腕の弱い自前藝妓だの、分け藝妓等になると一層甚だしいので、お茶屋から女中、箱屋の附届を初め仲間内の交際世間への見栄を張つて行かうとするには、チツトやソツトの苦しみではない、此苦しみは臆て好んで云ふ譯でもあるまいが、無理なお客の注文にも應ずる様になり、夫れが不知不識の間に習慣性となつて、別に恥とも考へないで當然であるかの様になつて終うのである。

第三の本縣下に公娼が設置されて居ない事も、兩市の藝妓をして、今日の状態とならしめた大なる原因であるのは疑ふの餘地もない、即ち兩市を初めとして、群馬縣には公娼の許されて居らない代りに、乙部料理店といふ特殊な料理店が許され、此特殊な料理店には、必ず数名の若い酌婦が置いてある、是等の酌婦は只單に客席に出て酒席の興を添へるのみではなく、僅かに十錢の酌料に依つてお客の要求に應じて春を賣るのである、東京淺草公園附近に巢屈を構へて居る銘酒屋と同一種類のもので、一週

間に一度宛の檢査されて公娼と殆ど選ぶ處がない、而も是等の私娼は、最近頗る發展をし、其數は兩市共藝妓の二倍乃至三倍に達して居る、此數多い中には腕の冴へた面の好いものも尠くないので、兩市の藝妓は自然此方面に客種を奪はれて來た、此結果として寄留宿でも、亦之と對抗しなければならぬ立場となり、藝のある藝妓よりは當世流にお客に喜ばれる藝妓を抱へるの必要が起つて來た。

(七) 兩地藝妓の収入一ヶ月平均七十圓

藝妓が普通に稼いで居つたのでは、収入と支出とが一致して行く事が出來ぬから、此生活上の苦しみを免れる爲めには、嫌々ながらもお客の無理な注文も容れなければならぬと云つたが、さて然らば兩市の藝妓一ヶ月間の収入は甚麼なもので、之に對する支出はどうか、詳細に説明するは容易な問題でないから、其概略を述べる事とする。勿論収入の如何は世の中の景氣不景氣に伴ふもので、決して平均したものではない、先づ昨年來の様な不景氣な年には、玉高も極めて尠く御祝儀も亦從つて僅かになつて來るのだが、六月中に於ける桐生町の藝妓一奴が、千有餘本の玉を賣つたのは近來珍

らしい事で、是には頗る鼻の下の短くないお客があつて、日々三十五本の玉をつけ九
 鬘姿で京見物に行つた爲めで、此様な破天荒の事は滅多にあるものではないから、前
 橋や高崎の藝妓では、普通最も好く賣るもので一ヶ月五百本が頂上——マア四百本乃
 至四百五十本を頭と見たら間違もあるまい、夫れからチヨツト降つて中の部は三百五
 十本平均で、藝妓の中でも此部に屬するものが尤も多い様である、又甚だしく賣ない
 下の部になると、百四五十本しか賣ない藝妓も尠くはないから、前橋百二十名高崎七
 十名の藝妓全部の玉高を合せて、平均を取つたなら一人一ヶ月の玉高は、二百五十本
 平均に行つたなら頗る景氣の好い時であらう！

然らば之が収入はと見ると、前橋藝妓は一時間に玉が二本で一本廿錢、御祝儀は普
 通のお客は大概一圓宛を呉れて居るが、中には五十錢のお客も尠くないとやら、否紙
 花と云つて、料理店の計算書に計算される御祝儀は全然五十錢と定つて居るから、平
 均したなら三十人の内で一圓の御祝儀を出す客が二十人で、紙花が十人と見たなら格
 別の間違もなからう、がさて半玉になると之が全部半額であるから、一本の玉が十錢
 で御祝儀が五十錢、紙花三十錢となる譯である。

高崎藝妓となると玉は前橋同様一時間一本で、一本の玉高は廿五錢、御祝儀は一圓
 が普通の様になつて居る、然し五十錢のお客も亦決して尠くない、マア半分々々を見
 たら差支はわるまい。

が然し以上はお客が料理店に支拂ふ可き藝妓の相場であつて、是が全部藝妓の収入
 となるのではない、前橋では二十錢の玉代で藝妓の収入となるのには、一本に就て料
 理店に三錢、見番に二錢都合五錢の手數料を削られるから、手取十五錢にしかならぬ
 高崎では二十五錢の玉代の中料理店に五錢、見番に約一錢の劔を取られるから手取十
 九錢で、御祝儀の段になると現金で一割、紙花三割の手數料を料理店に支拂はなけれ
 ばならぬから、現金一圓の祝儀で九十錢紙花になると三十五錢の祝儀にしかならぬ譯
 である、假に四百本の玉を賣つても、一ヶ月の玉代は六十圓、四百本の玉高で六十の
 座敷を勤めて、祝儀が四十圓から五十圓位にしかならぬのに、二百五十本から三百本
 か普通であると云ふのだから、兩地の藝妓の普通の収入は、玉代が三十七圓から四十
 二三圓、祝儀が二十五圓から三十五圓で、合計一ヶ月の収入六七十圓にしかならぬ
 計算である。

(八) 兩地藝妓一ヶ月の支出如何

兩市の藝妓一ヶ月の収入は前述の如く、通常七十圓から八十圓位は餘り悪い方ではないが、さて然らば支出はどうか？

藝妓には自前、丸抱へ、御祝儀取、叩き分け、七三分、看板借りと言つた様に區別があるから、収入の様に一樣に見る事は出来ぬが、普通一般に藝妓たるの資格を備へる費用をザット見積つて見ると、衣類の部では帯一本でも一寸之はと云ふ品物になると、三十圓から五十圓、上等になると八九十圓も出さなければ求められぬが、マア前橋や高崎の藝妓で、帯一本に百圓近い金を費して居るものは殆んど一人もない、大概は三四十圓位の處で胡魔化して居る、之に座敷着は如何に簡單にしても、夏冬二季の座敷着は晝は紋附、夜は縞物と二通りは揃へて置かなくてはならぬ、之に襦袢から細々したもの迄も合算すると、兩市の藝妓の支度は通常冬物が百五十圓、夏物が百圓之に頭のものから指環迄も計算すると五十圓、箱屋とかお茶屋とか懇意先に配る披露目の手拭其他の費用が三四十圓は費る、之を合算すると少くとも藝妓となるのには、

三百四五十圓の資本を要するのだが、此外に尙晴の座敷となるのには、着替の衣裳も要れば、常衣だつて二通りや三通りは相當な物を持つて居らぬと藝妓の恥だから、一人前の藝妓として突出す迄には甚だしく安く見積つても四百圓の金は要る。

更に寄留宿の側から見ると、突出す迄の費用に四百圓を要するのみではない、丸抱へとなる、兩市の前借金相場は大概二百圓から三百五十圓位迄、其れ以上の金を出して藝妓を抱へたのでは寄留宿が立行かぬ左様だから、兩市に飛付きたい程の藝妓の見當らないのも無理ではないが、兎に角寄留宿側としては、此金の元利も見積つて掛らねばならぬ。

次には彼等の日常の生活費及交際費であるが、先づ第一に家賃も十圓乃至十五圓位の支拂はずばなるまい、女中も一人位は必要である、日髪日風呂は勿論の事、師匠への義理、芝居見物、其他仲間の祝儀不祝儀から、日常品小遣錢迄合計すると着物や頭の物、持物等を除いても、税金を加へて一ヶ月六七十圓の支出は必ず缺く事は出来ぬから、四季折々の衣裳代から質屋の利子迄計算すると、一ヶ年の支出は尠くとも千二百圓乃至千五百圓、其月額百圓乃至百二十圓を要するのであるが、さて収入はと云

ふと前にも述べた通り、通常が七八十圓上の部で百圓位にしかならぬから、眞面目に堅くやつて居つたのでは、月々二十三十圓宛の不足を生ずるのである、而も眞面目に藝のみで賣らうとするのでは、毎月七八十圓の収入は到底覺束かない次第である、茲に於てか今時の相場では藝妓たる以上は、必ず節操を賣つて金錢に替へなければならぬ若し堅い事を云つて居たなら願が乾上つて、女の干物が出来る様になる、だから弗且の必要も起つて來るのだが、前橋や高崎の如き土地では、此弗且なる者が頗る怪いもので、今時の藝妓の爲めに數千圓を擲つ程の大馬鹿者、イヤ失敬、粹様は千人に一人もある筈がないので、後には相當な弗且は控へて居りながらも、尙且つ無理なお客の要求にも應じなければならぬのだ。

(九) 兩地藝妓の比較、踊は高崎藝は前橋

収入と支出とが伴はない結果は、藝妓をしてお客の無理な要求にも従はせる様になつて來ると同時に、同業者間の情義も薄くなつて、朋輩藝妓のお客を奪つて平然たるに至つては驚かざるを得ないが、更に昔は姐さん藝妓に對する若い妓の態度は、軍人が上長官に對する様な、規律的な窺窟なものではないとしても、上下の階級は頗る嚴

格なものであつた、然るに近來の賣ッ妓になると、姐さんと姐さんと思はない、其態度の生意氣さ加減には呆れて物が言へないが、是も時世時節で此若手藝妓をして生意氣ならしめたものも其罪は又姐さん藝妓やお客に多い様である、藝を買ふよりは容色を買ふ今のお客には、最早色氣の褪めかけた老妓よりは若い奇麗首が好まれる結果、昔は若手藝妓は老妓の憎まれ者となつては、お座敷が勤まらなかつたものが、近來では老妓は若手に憎まれると、願が乾上ると云ふ逆な世の中となつたのだと思ふと、一滴同情の涙なき能はずだ、否藝



照や 子ま 子さ 赤ぼ 助ん 君伴 子内

の神聖何處にやあると疑ひたくもなる。

若手の賣ッ妓が生意氣となつたに連れて、お酌迄が悪感化を受け、姐さん藝妓の前も憚らないので、あらゆる事かお客の品評めをする、姐さんの情夫の素破抜きをする、夫れて居て其身代である膳運びが完全に出来るかと云ふと、満足に膳の運びが出来たものが一人もないが、是は其罪が料理店にも尠くはない、即ち料理店に料理番らしい料理番が少く、女中に女中らしいのが稀であるが爲めである、試みに二三の料理店に登樓して見給へ、今の女中で眞に膳の付方を心得て居るものが幾人あるか、東京の氣の利いた料理屋になると、三つ葉を揃へ栗の皮を剥ぐ事から、お客に料理の喰方を教ふる事迄が、總て女中の責任で、之が満足に出来ない女中は、二六時中料理番から苛められて居なければならぬのだ、尤も兩市ともお客自身が料理を味う程の、粹なお方がないのだから、マア其様に厳しくも言はれまいテ！

却説這燈具合で、兩市の藝妓が漸次時代思潮に追はれて、其本能を失ひつゝ、あるのは嘆かばしい次第ぢやが、さりどて現在藝妓だと云つて、満更二百名を一視同仁視する事は出来ぬ、泥中にも花一輪、中には美しい心の女もないではないが、左様な野暮

は暫く抜にして、兩市當世藝妓の優劣を比較する方が遙に粹ぢやあるまいか！

遠慮なく極めて露骨に個々に區別しないで、只尠然と兩市の藝妓を批評したならば幸か不幸か研究子は其數の上にて於て差異があるが如く、前橋藝妓の方が高崎の藝妓に比較して、稍優つて居ると云はなければならぬ、高崎藝妓が前橋藝妓に優つて居る處は、踊に於て前橋藝妓が高崎藝妓の脚にも及ばぬ事、高崎には踊の師匠として、斯界に有名な西川安之助が常住して居るが、之は高崎には過ぎたもので、東京でも此位な師匠は少いとの事である、前橋は稀に此安之助が出張教授をする位のもので、中村登滿治が振附を教へて居るとは云つても、安之助と比較しては段違ひである丈に、高崎藝妓の踊に比較して數等の見劣りがするが、其他の點に至つては、高崎には殆ど師匠といふ師匠がないのに反して、前橋には義太夫に東京でも相當に名を賣つた中村糸吉がある、常盤津に三代藏がある——夫れ丈前橋の藝妓の方が優つて居るかも思はれる、と同時に衣裳の點に於ても流石に前橋が群馬縣の首都として、政治的中心地で各紳の人の往來が頗る頻繁である丈に、縣下の隨一であると云ふ事が公平であらうと思ふ。

(十) 兩市花柳界の代表的藝妓

前橋藝妓の代表者は菊廻家おろの(四十)、新三吉三代治(四十)の兩妓で、おそのは吞兵衛藝妓として知られて居る、彼女が粹眼瞭臙とした時、其口を突いて出る『お園元より木石に非ず命且夕に迫る』の一句は彼女の色氣と艶氣とを失なつた、眞の藝妓としての半面を窺ふ可き、無邪氣な罪のない物語を含んで居るが如く、好く飲好く語る女である、其醉が過だ時の如き此お客野郎を連呼して憚る處がない、然も此暴言亦愛嬌を含んで、お客の感情を害さない



字子の田鶴 壽代喜 ちよは 平め 喜お 代ち 喜お 田鶴 字子

のはおその、一得である、彼女は三代治に比較すると、藝の點に於ては遙かに譲らなければならぬが、宴會藝妓として三代治と共に缺く事の出来ぬものは、座敷の取廻しが上手な事である、否彼女が頗る社交に長じた事である、眞に彼女は自分の知つて居る客の家に不幸があつたとか、近所に火事があつたとか言へば、必ず見舞に押出す處等は、チョツと普通の藝妓では出来ぬ變つた處のある女である、新三吉野の三代治(四十)はおその程の外交家ではないが、藝に掛けて前橋藝妓中彼の右に出づるものはあるまい、曾て客に向つて一語の怨言を言つた事を聞かない、客の望みに依つては、太の絃張らすれば梁上の塵を舞はしめ、踊らせるも前橋藝妓百餘名中の一流藝妓の癖を巧に眞似る皮肉さ加減、流石に後見藝妓の本領を發揮して居る、彼女もおそのと同じ様に、好んで酒を飲むがおそのよりは餘程締つて居る、おそのが江戸ッ子式なら彼は寧ろ上方式である、従つておそのが宵越の金を持たぬてふ態度に對して、三代治は相當に貯蓄心もある、宴會の取廻しではおそのの方が座敷持がする様だが、引締つたお座敷とか、又は藝の點に掛てはおそのより遙に手腕を有して居る、即ち彼女は新作の唄の節付をする頭も有して居る、形の上から言ふと同年でありながら、おそのは身体

が大きい丈に總てが質素であるが、三代治は派手が似合つて居る、おそのが白粉を塗ると世間のお笑ひ草だが、三代治の白粉は寧ろ當然であるかの様に思はれて居る。高崎藝妓の代表者たるちよつ平は二十年來高崎の花柳界に巢を喰つて、高崎花柳界では彼の右に出づるものはない、然し成功者の一人として、其富は約二萬を算する事が出来るほどの事だ、僅かに女の細腕と云ふ勿れ、彼女は最も高崎氣質を發揮した高崎の藝妓である、今一人の喜代壽は、十年以前迄は前橋の梅月で左袂を取つて、相當に賣つたものであつたが、彼女が今の聲價を揚げたのは高崎に轉じてからである、前橋の代表者であるおその、三代治が比較的金錢に淡泊であるのに對して、高崎藝妓の代表者たる二人は、何れも貯蓄心、富んで居るいが、自然の間に高崎氣質に感化されたものではあるまいか？ちよつ平も喜代壽も、泚石高崎藝妓の代表者である丈に、藝にかけては萬能であるが、眞に姐さん藝妓としての資格を具備して居るか如何か？前橋のおそのや三代治が温習會等に際しては常に後見役を勤めて居るのに對して、高崎のちよつ平も喜代壽も共に自ら立唄に坐りたがる側である丈に、尙おそのや三代治に比較しては一步を譲らなければならぬであらう？勿論不見轉藝妓ではないが然し此

新 駒 五 郎



松 香 初 子

二人には旦那もあれば色氣もあると云ふ風で、今數年の經驗を積まなければおその三代壽丈の取廻しは困難だらうとは、某粹人の語つて居る處である、果して如何かマア暫く疑問として讀者の判断に委せる

(十一)

両市花柳界現在藝妓の比較

今賣出しの人氣藝妓として前橋市には月三吉野照子、月廼家赤助がある、兩人共おその、三代治に次での藝妓らしい藝妓である、而も今が盛りの二十九であるが、高崎には此二人に比較す可き藝妓がない、若手の人氣藝妓としては、前橋の菊小松初子(十八)月三吉野松香(十九)高島家新駒(十七)大

泉のやまと(十七)等に對して、高崎新見番のはじめ(十八)手遊(十八)とんぼ(十八)は頗る好い對照である、何れも今が水の出端の十八九——美しい盛り、近來兎角不景氣の爲めか餘程時代思潮に化せられて來たと云ふ評判も立つて居るが、恐らく賣ない妓共の嫉妬心から出た悪口と思召た方が、世の中も無事と云ふものか、矢張此六人は何處から見ても圓満に發達して行つたなら、聽ては兩市の代表的藝妓となる可き運命の下にある幸福者である、此様な藝妓は何處迄も兩市の花として傷けないで育て上げたい、是は何も研究子一人の希望のみではあるまいから、御銘々夫自身も總てに就て注意が何よりだと申上げて置く。

次には好く賣れる藝妓、玉高の多い藝妓としては、前橋の瓢家君子(三十一)、同春夫(三十二)、高砂家のふみ子(十九)、福富盛のすいめ(四十二)、同榮壽(三十三)、花柳京子(十九)、富士家ぼたん(十七)、新梅月梅子(十九)、若月酒家びん子(三十一)、高島家春駒(三十一)辰三吉野辰奴(三十一)萬屋一龍(三十一)菊延家榮三(三十三)新萬とし尾(四十二)龜年とばん(三十一)新柳八重子(三十二)福林家たこ(四十二)富よし錦龍(十九)高島屋靜江(十九)吉高砂はじめ(十九)旭家千代子(十七)吉若木浪江(十七)松三河八千代(十七)梅家太郎(十七)高砂家求(三十一)新萬貞雄(十七)、高崎の新見番に立

花家太郎(十八)、同家ふみ子(三十一)、花岡家の鶴子(三十一)、新花家桃太郎(十七)、舊見番に清藤の清子(三十一)、布袋家田か字(三十一)、田村の壽(十八)、新寶家又平(三十一)等があつて賣れる點に於ては人氣藝妓とか、一流の姐さん連とかも三舍を避けるといふ偉い繁昌を極めて居る、是等の藝妓の賣れる原因に就いて調べて見たなら、頗る多方面であるが、流石は賣れツ妓丈に、何處かに賣れない藝妓よりは好い處があるに違ひはない、斷つて置くが、さりとして是等の藝妓は誰でも、イヤサ張三李四でも應來と來る藝妓と思ふては大した違ひ、若干不見轉の

子 文 夫 春 め す す



子 京 奴 辰 龍 一

傾向はあつても、決して極端な不見ではないといふ事を御承知ありたいと云爾。
一流藝妓の中に加へる資格は備へて居らぬが、去りて若い人氣藝妓でもなく、花柳界の一方に重きをなして居る腕の凄い年増藝妓のある事を忘れてはならぬ、夫れは前橋では鈴木家壽美恵(三三)、春柳の小春(九)、高崎では舊見番の田村の壽々女(五)、新見番の鈴木萬榮壽、福本君榮(八)等である。

半玉界は前橋十六名高崎十名であるが、由來前橋花柳界の名物は半玉の優れた處にあつたが、近來漸次半玉の人氣者は一本となり、之に代る可き後継者が現れない、マゴくして居ると高崎に負る様な結果にならぬとも限らぬが、今の人氣者は依然として、中廻家五郎(十六)、高砂家みさほ(十七)、初音家伴内(十五)の三人で高崎市には五郎に對抗する程の半玉は一寸見當らぬが、みさを伴内と比較可きものは、新岡田の菊龍(十四)、花岡家の初代(十五)、榮家の多奴喜(三)等で、前橋の高島家のいろ子(五)、瓢家瓢たん(六)等も半玉としては藝も座敷も充分である、既に獨りで座敷を勤める處から見ても、一本の資格を供へて居るから、半玉として論ずるのが無理であるまいか。

十六、兩市の料理店

前橋と高崎の兩市に於ける料理店の現在營業者數は別表の如くである。

甲部	料理店	三九	戸	四三
乙部	料理店	五〇	戸	五三
飲	食店	四六	戸	三九
甲部	女中	八六	名	八〇
乙部	酌婦	一一三	名	一一六

殆ど兩市共數に於ては相伯仲して居るが、其内容は甚麼ものであらうか？

前橋市で第一に指を屈するものは、町野の嬉野であらうか、明治の初めから發展に發展をして、紳士紳商の御車を寄せ給ふ數も頗る多く、座敷の作り器具の選擇方も先づ以て申分かない、之に次では曲輪町の赤城館、立川町の新昇、四十人以上の宴會となると此三軒の中に限るとも云ふ可きか、赤城館は共進會當時の建築で構造最も新らしく、宴會客の爲めに赤城亭本店の經營するもので、新昇は安いと商賣上手で賣出して

居る、其外では壽本店、同支店、満壽屋、岡源等も近來座敷を新築して、今日の出の勢、之に次では三省樓、常盤、萬蒲屋、鈴木樓、榮亭、梅花、金川、喜樂、末廣、満盛、樂、玉川等も藝妓の出入頗る繁しいが、さて何處が宜いかどのお尋ねには一寸研究子も困り申すに依つて粹様のお好みに任すとしやうが、中にも鈴木樓の女將おだいさんは、男勝りの腕達者で近來政界の名士の出入繁しいとか、又牛路の強き香をお好みの方を取つては堅町の赤城亭を初めとして、鍋屋、旭亭に牛鍋突つきながら藝妓を聘ぶも悪くはない、和洋折衷!

高崎市に於ける料理店では、新町の岡源で多人數の宴會は殆ど此處の獨占となつて居る結果、稍々尊大となり華客を輕侮するとの批難もあるが、元來商賣には抜け目のない熱心家だから、妬者の妬言も尠くはないだらうが、手自ら省みるの要はあるだらう、次でうき世、大うき世、都共に庖丁の確な事得名を得て居るが、三島屋は仕出しで知られ清香庵、前田屋、北川、あづま、どり安、ふじ田は之に次での料理店で、一寸遊ぶには頗る便利である、安直に召上るに最も妙とか!

赤城亭支店には立食の設備もある、鍋屋本支店は西洋料理兼牛肉店ではあるが、家

の構へから女中に玉揃の事迄も、同地一流の席亭である。

之を要するに前橋も高崎も料理店に就ては、其優劣を論らふ程に大差は無いが、流石は縣の首都として、諸名士とか實業家の往來の激しいのに加へて、絲の市場が盛んである丈けに、一般から云つて前橋の料理店の方が、高崎の料理店よりも常に新しい方面に向つて發達して居ると同時に、宴會等に掛けては高崎よりも其設備が行届いて居るとも見る事が出來やう

空 氣 伊香保温泉は日光、箱根等より遙かに高く海拔八百五十七メートル（約二千八百五十八尺）の高所に在り空氣極めて清涼なり
 眺望 温泉場は多く谷間の低地にありて遠望の景色に乏しきも伊香保は榛名山の中腹にあり三面開き座して信越岩野諸國數十里外の遠山を眺むる事を得
 泉 質 本泉の主成分は内務省の衛生試験所の定量分析 依れば鹽類性含鐵、鋼鐵泉に屬し温度平均攝氏四十五度華氏百十三度を示す

伊香保温泉案内

醫治効用 明治三十七年四月十四日官報第六二三三號を以て内務省東京衛生試験所にて公表したる醫治効用は左の如し

- ◎貧血 瘧疾 ◎萎黄病 ◎脚病 (腫脹) ◎慢性腰痛 坐骨神經痛 ◎脂肪過多症 ◎慢性消化器病
- ◎慢性生殖器諸病 (慢性子宮眞實炎) 慢性子宮内膜炎 慢性子宮頸加管兒 慢性子宮周圍炎
- ◎月經不調、子宮出血、貧血又は衰弱に原因する(貧血、遺精、精漏、慢性淋病)
- ◎神經諸病 (ロステリ) 神經衰弱、器病、神經痛
- ◎慢性呼吸器病、◎慢性皮膚病 殊に全身病に原因するもの ◎重病後又は身體精神過勞後の衰弱
- ◎禁忌症 湯に入りてかき病) 熱性諸病、肝、腎及肺の機械的疾患 殊に咯血を伴ふ肺結核、高度の充血

交通 前橋、高崎より澁川迄澁川より伊香保温泉迄 電車の便あり

十七、四季の伊香保

(一) 伊香保温泉峇史

伊香保は群馬縣の伊香保でなくて天下の伊香保である、夏季に於ける絶好避暑地であると共に、温泉地として其名を天下に謳はれて居る。

然も各地の温泉の多くが深山幽谷の間に在るに反し、此處許りは榛名の中腹海拔二千八百尺の高所にあつて、清爽兼ねるに靈泉豊富、山水の秀麗實に天下の勝地である、加ふるに其地質が高燥なるが爲に、空氣は常清淨で、夏は涼しく冬は比較的暖かである、例令温泉はないとするも、其眺望の絶佳と空氣の爽快なるとは、既に天下の遊園地として推讃の價がある、況や不斷の靈泉は、湧



くに任せて盡きるを知らざるに於てをやである、記者は暫く此天下の勝地、伊香保温泉に就て論ずるに前だち、伊香保温泉史の概略を述べ様と思ふ。

伊香保温泉の起原に就ては、寛文年間から去る明治十一年迄の間に、九回の大火災に遭ひ、参考書類の殆ど全部を焼失して、之を知るに由ないが、口碑に傳ふる處に依ると人皇十一代垂仁天皇の御宇、即ち今から二千百餘年の昔、初めて温泉が湧出したと云ふ、果して事實であるか如何かは疑問であるが、北國紀行に文明十八年足利義尚の將軍時代、即ち今より四百廿餘年前、堯惠法師が此温泉に浴した事を載せてある處を見るに、此温泉が頗る古い歴史を有し、四五百年前に各地の人が來浴したのは信ずるに足る事が出来る、併し今より三百年前の伊香保温泉は、今の湯元附近に風呂場を設けて、一二軒の旅舎が寂しく暮して居つたに過ぎないのは信ずるに足る事で、現今の地に温泉場を開設したのは天正四年の事である、漸次改革に改革を加へ、現時の繁榮を來たしたものであらうと思はれるが、古くから伊香保に居住する温泉宿で「大屋」と言ふ者が十二軒あつて、天正年間から明治の初年迄、累世温泉業を經營して土地の温泉権利所有者である、勿論三百年の間には、此家主にも異動を生じたものも數軒に



伊香保温神社

及んで居るが、其の大屋の稱號は依然として今日に及んで居る、今此大屋なるものを調べて見ると、上杉憲實が當國の守護職となつた時、其家臣長尾清景をして白井城に入らしめ、守護代理を命じてから遂に當國が長尾氏の領地となつたのが、長尾氏七世にして亡び、國主を代へる事數回の後、天正年間伊井兵部少輔直政が箕輪城主となつた時、長尾氏の遺臣で伊井氏に従つて關ヶ原の戦ひに参加し、功勞に依つて郷土となつたものをして、徳川氏の初年に當り、其附近なる三國街道異道に關所を設けた(今の關屋)時、此の十二軒の者をして守護とし鎗、鐵砲を與へて二人宛年番で交替して勤務せしめ、苗子帶刀を許し、村内の年寄と稱せしめ關所の當番

を以て名主とし、十二軒を十二支に配して居つたが、當時の石高は二百四十餘石であつた。

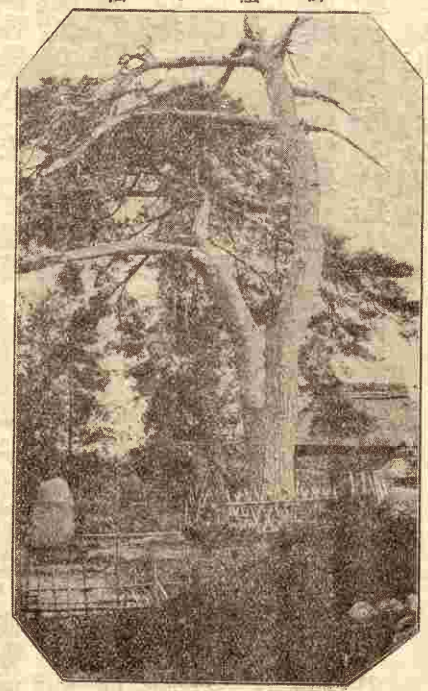
斯くの如くして此十二軒の者は、此等時の功勞に依つて温泉の權利を握るに至つた而かも此習慣は三百年の今日と雖も尙變る事がなく、伊香保温泉の使用權は此十二戸以外には之を使用する事が出来ぬ、即ち十二支の頭となつて居る子の木暮即木暮武太夫氏は其頭目であつて、伊香保温泉の權利の三分の一を有して居る。

十二軒を十二支に配して大屋と稱し、伊香保温泉の使用權を、絶對に此十二戸以外に使用せしめぬ長い間の不文律は、伊香保温泉をして、他國から移住して來る資本家に絶對に指を染めさせない所以である、即ち伊香保温泉には三十有戸約四十戸に近い温泉旅館があるが、此四十に近い温泉旅館中、自宅に浴場を有して居るものは僅々廿戸位に過ぎぬ、此二十戸中にも温泉權を有して居る十二戸を除いた殘餘のものは、此二十戸の或者と特約して其者に送る可き温泉の幾分かを分配して貰ふのであつて、温泉の使用權は有して居らぬ。

之と同時に伊香保の土地ッ兒でない外國人が、如何に豊富な資力を有して居つても

伊香保温泉に來て温泉場の經營を試み様としても、此肝腎の使用權が十二軒に依つて握られて居り、然も是等十二戸のものは伊香保の土地ッ兒保護策として、決して此湯の權利を是等資本家に讓る事を禁じて居ると同時に、草津温泉が其資本の大部分を京濱人士に仰いで、其額頗る巨額に達し、温泉の權利は漸次是等資本家の手に移り、亦未だ移らざるものも既に其實權を資本家に握られ、草津温泉旅館の大部分は、是等資本家へ利息を拂ふが爲めに働くが如き觀あるのに反して、伊香保温泉旅館は各自互に相戒めて、他國の資本家から資金の融通をなすを避けて居る結果、伊香保温泉には借金か極めて尠い、従つて其温泉の權利を、三百有餘年間決して他人をして一指をも染めさせ

御 蔭 の 松



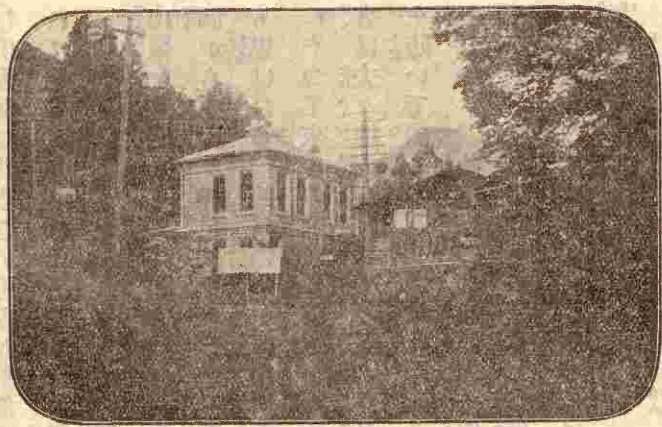
ないで、土地ッ兒に依つて經營されて居る所以である、之は一面から見ると頗る量見の狭い心の小さい考への様であるが、伊香保人士が土地觀念を忘れない一種の美風ではあるまいか、伊香保は飽迄も伊香保人に依つて經營しなければならぬとは、彼等が日常一刻も忘れた事のない土地觀念で、或は日光の如き、或は塩原の如く、草津の如き何れも天下の遊園地を以て鳴つて居る地方が、夏季の繁昌期の浴客の多い季節には恰も盆正月が一時に來た様な心持になつて、金は只取れるもの、様に思ひ金の有難味をも忘れて、湯水の如く費消して顧みず、冬季の閑散期になると火の消えた様に急變して、温かい飯も満足に食へないといふのが、是等遊園地の常弊の如くなつて居る然し伊香保に限つては土地觀念が頗る強い結果、夏季に於ける収入は成る可く之を費消しない様にして、冬籠りの用意をして居る、是は伊香保をして、其將來に尙多くの發展力を有して居るのを證據立てる事になる。

(二) 初夏の伊香保

世間に餘り多く知られて居らぬ冬の伊香保は、天下の奇觀であるが、四方雪に包まれ

た伊香保は其寒さが可成り激烈である、之に反して夏の伊香保は、其名を天下に知られて居る、知られて居る丈に俗氣を離れる事が出来ぬ、此中間に立つて、最も伊香保の眞味を解し様と思ふならば、初夏の伊香保を見るの外はない、初夏の伊香保は榛名山嶺を基礎として、四方に波濤を疊んで居る連山の樹々が何れも新緑を滴らして、靈洞から湧出る神泉は滾々として玉を流すかと許り、有情の人の掬ふを待つて居るかとも思はれる、四月の中旬頃は伊香保には、近郷近在の人々が農閑期を利用して、入浴にやつて來るので頗る混雑を極めて居つたが、夫れも養蠶期に入ると共に、是等の浴客は夫々地方に歸つて、五六兩月は京濱及び近縣の浴客で、僅かに伊香保温泉の寂寞を防いで居るのみ、例年此季節は伊香保の夏枯れ時と稱して、温泉地の最も閑散期であるから、此季節には旅館の待遇も行届いて、座敷料其他の諸費用一般に盛夏に比すると半額位のもので、氣候も亦最も身体に適する季節であるから、眞に伊香保の趣味を知らうと欲するものに取つては、此五六兩月に越した月はない、此季節の普通滞在客は七八百名内外である。

▲温泉湯の煙長閑なる湯元附近では、三々伍々浴客の運動絶ゆる事なく、伊香保の山



橋 閣 物

野は只静かで悠々として居る、殊に榛名山は鮮に、奇巖快峰雲邊に聳へて、老松屈せる風光眞に都人士をして三嘆せしむるものがある、伊香保から僅かに二里、途中の二ツ嶽、相馬ヶ嶽、榛名伊香保富士等は云はすもがな、高原に雑草と灌木と入亂れて美しい若葉の葉越しに、次第に鏡の如く一面に輝き出づるものは、即ち山上の女神榛名湖である。

湖畔は只森閑として新緑に蔽はれ湖面遙に扁舟水に浮んで走るあたり、此處ならでは決して見る事の出来ぬ光景である。

不如歸で有名な、物聞山に登ると、前面赤城の雄大な山裾は、右手に長く、緑線を引いて其盡くる處は雲烟の裡に點々前橋の市街を眺めて

居る、其間には利根の清流が銀河の様に、緩かに山麓を流れて、脚下の村落からは鶏犬の聲仄かに相和して聞ゆるなど、眞に仙境の想ひがある『不如歸』にて知られた地蔵河原附近は早蕨、董、蒲公英、土筆、米蘭、姫百合、熊谷草、敦盛草等の高山植物限りなく萌出で、摘むに任せ湯元の躑躅ヶ岳、村鵬花は、茲數日中で花を開くであらうが、八千代園の躑躅は今を盛りと咲亂れて、其の附近の楓の若葉また艶々しく研を鏡ふに似て居る、湯の澤の河鹿の鳴音も風情をこめて、電車が刻一刻上へ上へ進む程に、眼界は變化し來つて、四邊の風光を送迎するに違もなく、道に海拔二千八百尺の高地を、八哩の距離に登り詰むる山路の幾曲折を極めつゝ、麥圃を抜け雑木林の緑陰を潜つて、舊街道を或は縫ひ或は解ぐれて、一瞬々々に光景を新にする處眞に雄大な大パノラマを見る様である。

(三) 眞夏の伊香保

夏の伊香保は京濱の縮圖とも見る事が出来る程に、伊香保の夏は京濱の上流客で満たされて居るが、夏の伊香保が然く京濱間の上流社會に喜ばれる所以のものは、大概の

温泉地は幽谷の間になければ、濕地とか低地にあるのが普通であるのに、伊香保許りは榛名山の中腹にあつて海拔二千八百尺の高地にあり、湯に富み、又清水に富んで、而も其温度は極暑の候日中の一時より三時頃の尤も暑氣の激しい頃と雖も、八十五度以上に上つた事がない、東京に比較しては常に十度以上の差を持つて居る、此高地にあるのと、湯と水に富んで居るのと、温度の低いと云ふ三つは、眞夏の伊香保をして京濱間の上流客を吸集した所以であらう。

七 重 瀧



然も先天的に自然の樂園地たる可く適して居る夏の伊香保は、頗る見る可き場所、遊ぶ可き場所に富んで居るのが、是等多くの浴客をして、永く滞在せしむる事になるのであらう、伊香保に來て見逃す事の出來ぬものは、榛名神社から其湖畔の逍遙であらう、伊香保から十五六丁の坂道を登り詰めると平原地に出る、此平原地を約二里十五六丁も徒歩すると、榛名

湖畔に出る、馬の好きな人には十數頭の貸馬もある、歩く事の出來ぬものには山駕もあるが、出來る事なら自然の眺めを見ながら歩いた方が趣味が深い、湖上には屋形船があつて、諸君の來るを待つて居る、此屋形船に乗つて、湖畔を一周し、名物鮎の洗に舌鼓を打つ時、其味は甚麼に好いであらう、實際夏の榛名は自然の詩境である。永逗留をする者の遊び場所は、先づ第一に湯元に指を屈せねばならぬ、湯元は伊香保浴場から僅か十丁足らずで、伊香保公園の一部になつて居る、其沿道には鑛泉取締所の親切で、至る處にロハ臺と茶店の設けとがあつて、午前中の散歩場所としては同地唯一の好涼地である、湯元にも飽きたなら、電車の便を借りて約一里、水澤停留場に車を降り、十四五丁を徒歩すると、坂東十二番の靈地なる水澤觀音に出る、場所は古杉老松の間にあつて、水清き溪流は恐らく夏を忘れしめるだらう、更に十四五丁を山奥に這入ると高き四丈二尺の船尾瀧は、飛沫空に舞つて天下の奇觀である、辨天瀧は水澤停留場を右に三十丁、伊香保水力電氣の發電所があつて、榛名湖の末流にある沼尾亭は汁粉を以て名高く、市中に通ずる特設電話を架設して居る、夫れから二丁、大瀧は落差僅かに一丈に過ぎないが、幅六間に餘り玉垂の瀧をなして、瀧壺は十五六

坪の池をなし、深き四五尺好游泳場である、其途中八丁程手前には、七重瀧があつて文龜亭と呼ぶ休み茶屋に澁茶を呑むも、時に取つての樂みである。



天瀧

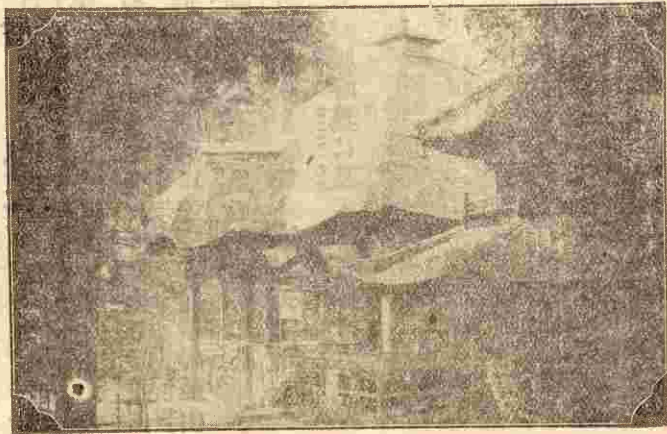
極手近の八千代公園には八千代茶店があつて、常に公開して居るが、園内の老松と古池とは木暮氏の誇りの一つである園内には大弓、テニスコート設備があつて浴客の自由に任せて居る、物聞山から二ツ嶽方面に出ると、山頂の見晴亭は關東平野を一時の裡に收め、左手には岩越光の山々を、右手には遠く筑波、近く利根赤城の連山を、脚下に、大利根の激流は、青緑の野に白い布を敷た様である。

(四) 秋の伊香保

秋の伊香保は亦天下の奇觀である、既に春の伊香保、夏の伊香保を味はつたものは更に

秋の伊香保の趣味を解するの必要がある、春の伊香保が眞に身体を静養する人に適し夏の伊香保が京濱の上流客の避暑地として呼物であるが如く、秋の伊香保は山に親しみ水に親しむ詩人の爲めに出来たかとも思はれる程に、詩趣横溢して居る試みに九月の中旬から十月の初めに掛けて伊香保に登つて見給へ、澁川から伊香保に通する電車の途中六本松から伊香保に至る間の原植林地の松林の中には、初菫を以て満たされて自由に登山客の取るに任せ、取つても取つても取り盡せたものではない、十月に這入つて登つた客は水澤山附近の栗拾に一日の快を貧るものも決して無趣味なものではあるまい、十月の中旬頃からはソコ、紅葉の氣節に這入つて來る

水澤觀音



ど、伊香保電車の沿道一帯が紅葉して、乗客は車内の人であるか野外を逍遙して居るのであるかと迷ふ位である、電車を降りて伊香保町に出ると、物間山の紅葉は八千代園の古松老杉と其美を競ふかと思はれ、温泉場から湯元に掛けて一帯が紅葉するのみではない、榛名二ツ嶽から湖畔至る處の沿道や山々や溪谷は全て是れ皆紅葉で、或は真紅に或は薄黄に錦の綾を連ねたとも見へ、温泉場から榛名湖畔に達する途中の藤山下の平野一帯は、榛名高原の七草で満ちて、其奇觀濃艶實に天下一品で、如何に心なき動物でも、此處に来て足を止めぬものはないと云ふのまゝして、有性の人間が、余りの美しさに忙然自然する決して然理ではあるまい、嗚呼眞に秋の伊香保は天下の詩境である。

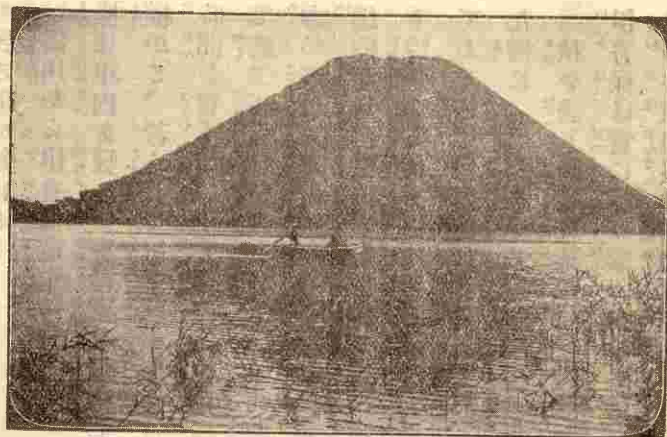
(五) 冬の伊香保

避暑地としての伊香保温泉は既に其名を天下に誦はれて居るが、冬の伊香保に就ては、世間は餘り多くの注意を拂つて居らぬ様である、否風の強い雪の多い寒い處と想像されて居る様だが、一度冬の伊香保に遊んだなら、其の想像と實際とが全く相違し

て居る事が知れる。

澁川から伊香保電車に乗ると、車内の大火鉢の中には、カン／＼した炭火が燃える様に車内を暖め、客に寒を覺えしめない、注意は、近來如何にして冬の客を引き付け様かと、苦心して居る状態があり／＼と見られる、六十分の一位な急坂を、電車で一時間を費すと、伊香保の停車場に達するが、其間少しの寒さも感じない、電車を降りて約二丁程の急坂を登り詰めて物間橋に達すると、此處が伊香保温泉の入口で遙か彼方の浴舎々々の間からは白い湯気が立騰て居る町の兩側には細い湯道が通じて、温泉場の活気が町の空気を濡らし、冬の寒さも大部分消滅して居るかとも思はれる、而も澁川から伊香保に至る迄は、所謂上州名物の雪を含んだ空ツ風が、身も骨も劈る様であるが、伊香保に入ると共に、温泉場を取巻いた山や谷の爲めに、風は物忘れをした様に勢を失つて、恰度冬の世界から急に春の世界に出たかと思はれる。

秋を誇り顔な紅葉も、冬の聲を聞くと共に散り失せて、満山枯木に包まれた初冬の伊香保は實に寂々寥々たるものだが、若し夫れ試みに十二月の末から、一二月の嚴冬の伊香保温泉を訪ねて見給へ、避暑地として知られて居つた伊香保は亦た避寒地とし



湖 名 様

て特殊の趣味を有して居るのを發見するであらう！四十三年まだ前橋市に共進會の催されなかつた當時——未だ電車の通じなかつた頃の——冬の伊香保と来ては話にも何にもなつたものではなかつた、紅葉の季節が終ると伊香保温泉其物は、其處に寒くはないが、伊香保に至る迄の間は何分寒さが烈しいので、浴客は殆んど絶果て、温泉旅館は何れも戸を閉ぢ、疊を揚げ、稀に来る一人二人の浴客、謝絶して、只火事で焼けぬ用心のみに全力を盡したものであつた、伊香保の町は山谷の間に段々に建連ねられて居るので、一旦火を失するが最後、到底人力では防ぎ止める事が出来ない、彼の明治十一年の大火のあつた際の如きは、全町一夜の間に烏有に歸

したので、夫れ以来の伊香保は火を恐れる事頗る過敏、ニヶ所に夜警詰所を設置して全町の男子は一人残らず消防隊に編入する事となつて居る。

此様に火を恐れる結果、電車の出来ない當時は、浴客のないのを結句幸ひと疊迄揚げて火の用心に全力を盡したのだが、近來電車開通と共に、漸く冬の伊香保は世間に認められる事となつて、冬の間にも二百人位の浴客は絶えたる事はない、特に正月の如きは年々五六百人以上の浴客の入込まぬ事はないといふ盛況を呈するに至つたが、尙世間では充分に冬の伊香保の真味を解して居らぬらしく思はれる、で記者は冬の伊香保と榛名の氷滑を紹介して見たいと思ふ。

▲伊香保の雪景色 從來世間に知られた冬の伊香保は寒いと言ふが通り相場、冬の季節に群馬縣に來た人は、骨迄も劈す様な猛烈な赤城嵐を真正面から受けて辟易し冬の伊香保の真味を解し得ないで、途中から逃歸る者が十の中七分を占めて居る、然し自負心の強い彼等は、赤城嵐に打勝つて、冬の伊香保を解し得なかつた意氣地のなさを掩ふ爲めに、伊香保は寒くて居堪まらないと吹聴したもんだ、茲に於てか一犬虛の吠えて萬犬之を倣ふ、斯うして不幸にも冬の伊香保は、卑怯者の爲めに誤解され、寒い

と云ふ以外何物もない様に思はれて仕舞つた。
 伊香保の住民は世間から、此誤解を取去る爲めに頗る苦心したが、數年前未だ電車の開通を見なかつた時代には、前橋から伊香保に達するまで、十里の間か上州名物空つ風の本場であつた丈、此誤解を取去らうとすればする程、一層世間の同情を失ふと云ふ哀れな状態であつた。

社 神 名 様



冬ふゆの伊香保いかけほの眞味しんみは年未ねんまつから一二月いちにげつの雪ゆきの頃ころである、何處どこか風の變かはつた處ところで越年ちゆうねんをしたいと云ふ希望きぼうの人は、一度伊香保いかけほを訪たづねられよ！夕刻ゆふぐ伊香保いかけほに着ついて、浴槽よくそうに溢あふれて居ゐる鑪泉湯いろせんとうに飛と込み、一丈いちじやうもあらうと思おもはれる高い鐵管てつぱんから瀧たきとなつて落お下くだして居ゐる湯ゆに、肩かたを打うたせ褌袍ふんどしを着流きながして炬燵こたつを擁ようし、晚酌ばんしやくの一本いっぴんでも傾かたけて、見候みまうへ！陶然たうぜんとして自おのらある別乾べつけん坤こん！フツクリとした夜具よぐの中に横よこはる時の愉快うきぐわいさは、マア甚麼せんまだと覺召おぼしめす？

年未ねんまつの決算期けつざんきに債鬼さいきから責められて、洩出にげだして來たものでも、或あるひは一年中ねんぢゆうを戦たたかひ疲つかれたものでも、此時許このときばかりりは何事なにことをも打忘うたわすれて仕舞しまふ、況まじて金かねが餘あまり困こまる人は東京とうきやうから美妓携帶びげいいたいか何かで登香とせかうせんか！！稍俗ややくにはなるが！！其樂そのたのしみは亦格別またぐべつであらう……！朝あさ鷄にじりの鳴なぐ聲こゑを聞きいて寢床ねどこを飛出とびだし、湯ゆから出でて旅館りやくいんの三階さんかいに登のぼり霧きりの間あいだから伊香保いかけほの冬ふゆを味あじふのは亦一興またきやうである。

近く眼がん下かを見降みおろせば、町まちの彼方あちこち此方こちらから立騰たちある白しろい湯氣ゆげは、恰度朝ちやうたくあさの霞かすみが靨たなびいた様よう、満山まんざん皆雪みなゆきも憎にくくはない眺めである、直ちき前まへには吾妻川あがつまがはを距へだて、小この子山こやま子持山もちやまの雪ゆきを望のぞみ、左ひだりりには利根とねの清流せいりゆうが雪ゆきの中に恰度青ちやうせうい帯おびでも投なげた様よう、と目を放めては赤城あかぎの連山れんざんを初はじめとして、日光山にっこうざんから岩越がんえつの諸山しよざんは一瞬はうつしに收おさまり、脚あし下かを見渡みわたせば、湯中ゆなかつま金島かねしまの各部落かくぶらくが黠てん々として雪ゆきの中に散在さんざいして居ゐる此雄大な景色このいづたいなけしきを下物くだものに、猪口ちよくちを手てにするなどは愈々いよいよ以もつて憎にくからぬ——註ちゆうに曰いはく實じつに湯豆腐ゆとうふの乙おつなる哉かな——熱海等あつみなみへ避ひ寒かんする月並つきなみな連中れんぢゆうには、到底たうてい解かいする事ことが出来ぬ味あじがある。

又更に酔顔をば湯氣を帯びだ風に吹かせて物聞山に登つて見る、其名の如く耳を濟せば、伊香保中の話聲が手に取る様に聞き取れる、海拔五千尺の物聞山からは、前橋市を中心とした關東平原が一眸の中に收まつて筑波も呼ば應へんすツイ目の前なり……紫は雪に流れて……

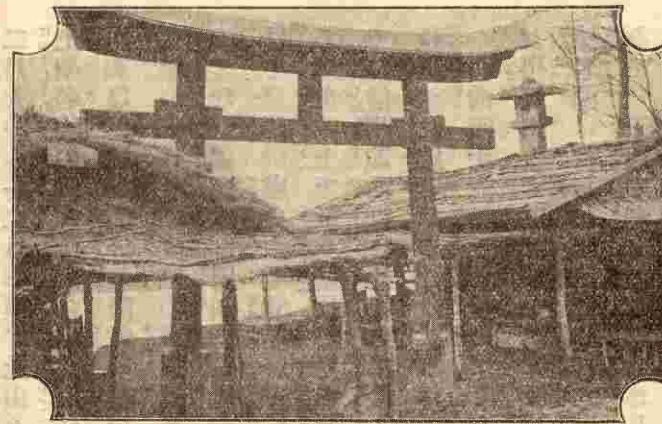
却説其後去程に宿へ歸つて、名物の名に知らるゝ兎や雉子や山鳥の鍋に舌鼓を打ち更に又二里の山道を榛名湖に行き、氷滑に満腹を醫するとなれば興趣は愈々盡くるを知らぬ「ア、冬はいゝなア」の聲を發したくなる。

▲榛名湖の氷滑 伊香保から榛名湖迄は約二里で、此路の半は急坂である然し、後の一里は極めて平坦で、徒走二時間を費したなら、湖畔に達する事が出来る、伊香保からの交通機關としては、人力車に頼るか駕籠に依るかかの二つで、兩者共片道二圓だ足の達者な人なら、雪見を兼ねて徒歩する方が面白からう！雪を踏んで急坂を登ると其處に榛原平地が展開する。

此平地から榛名湖の周圍は伊香保富士、硯岩、相馬嶽の山々に圍まれ、春から秋にかけての風景は、單に上州の誇りであるのみならず、實に天下の奇勝と言て宜い、十

二月末から一二月の頃、此山々が雪に包まれた光景は、實に雄大なものである、然も上州名物の雪を含んだ空ツ風は、是等諸山に防がれて、榛名湖は伊香保同様風は餘り強くない、加之近年降雪の量が頗る減じ、附近の山々に白雪降り積ても、湖水の近傍は僅か十日に一度位の雪を見るに過ぎないから、雪の障碍は世間で思ふ程甚だしいものでない、湖水は周圍約一里、さまで大きいと言ふ程ではないが、正月から二月に掛けて、薄い處で六七寸厚い處になると一尺三四寸の水が張る、然れば稀代の腕白ありて、氷の上で散々暴れて見た所が、龜裂を生ずる様な危険はない、氷滑の場所としては信州諏訪湖に比較して優るとも劣る事はないとは、曾て諏訪湖に遊んだ人の記者に語つた處である。

明治四十五年正月頃の事であつた、東京の各新聞が榛名湖の氷滑を天下に紹介した事がある、其記事を讀んで早速飛んで來たのが、英國大使館の一行だ、勇み喜んで榛名湖に着した處が、其當時漸く榛名湖が氷滑に尤も適して居る事が發見されたのみで、土地の者も氷滑場としての設備を施す事を知らなかつたので、旅館の設備もなければ、休息所の設けもないといふ有様、殊に大使館の一行が着した時は、生憎の



天 神 峠

雪降りて氷の上に二三寸の積雪を見た、然し熱心な異人さんの一行は、切角此處迄来たものを此儘歸るも残念と人夫を雇つて氷上の雪を掻き、其日は夫れで暮れて仕舞つた。

斯くて翌日を樂しんだ一行は、豚小屋の様な不完全な旅館の一室に夜を明し、朝飯前に一滑りと湖面を見れば、是はしたり昨夜能々人夫迄雇つて雪掻きをさせた氷の上に、僅か一夜に雪が積りも積つたり五六寸、流石に熱心な一行も餘りの事に唯呆然たる許りであつた、切角樂みにして来た氷滑を一回も試みずに失望して歸京した、東京へ歸ると新聞記事に「榛名湖は雪が多くて氷滑が出来ぬ」と吹聴した、新聞通信員は面目玉を失する、漸く世間に認められうとした冬の伊香保と榛名湖

とは、到底問題にならぬものと誤解されて仕舞つた、然し此誤解は寧ろ幸福であつたとも言へる、蓋し榛名湖に一大設備を加へて、完全な氷滑場たらしめるに至つたのは、實に此の誤解が地方民を奮起せしめたからである。

此誤解を口惜しがつて第一番に奮起したのは、室田村の有力家、小暮祐雄氏である。氏は昨年英國大使館員一行が来た時の失敗は、榛名湖が氷滑に不適當である爲めではなくて、旅館の設備が不完全である爲めだと云ふ事を知つた、氏は此缺點を補ふ爲めにレーキ・サイド・ホテルを建築して、外客の便に供する事とした、尙ほ邦人の爲めには、従來の湖畔亭が其設備を新たにしたから、今後は三百や四百の遊覧客が、不意に押掛けても決して宿舎に困る様な事はないが、是丈では決して充分とは云へぬ。

成程榛名湖は風も尠なく降雪も世間で思ふ程ではないが、夫れでも十日に一度位は積雪し、四寸に達する此氷上の雪を掃除する設備がなくてはならぬ、レーキ・サイド・ホテルは是か爲めに常時人夫を雇ひ置き、雪掃器を備付け、例へ雪が積つても五時間以内に掻き除ける準備をなし、遙々嚴寒を冒して此處迄登つて来た客に對して、失望せしめない丈の設備が成立つて居る、而も結氷の堅固な事は嘗て、野砲兵一個大

隊が氷上で演習をして、更に何等の危険も感じなかつたのにも知る事が出来る。夫れのみではない、大正二年からは伊香保温泉が小暮氏に後援を興へて是非共此事業の遂行を期する事となつたから、春一二月の季節となつたなら、榛名湖上に氷滑の一大壯觀を呈するだらう。

氷滑の趣味を解しないものに取つては、冬の榛名湖には、天然の音楽と名物の魚とがある、一二月の頃榛名湖に行つた者は唯でも知つて居るであらう！何れの湖水でも左様だが、榛名湖も亦堅氷が張詰る頃になつても、陸と氷との間には必ず二尺位は空間がある、恰度四斗樽に水を満たして、其中に丸形の木を浮かせた様に、氷は湖の中に浮いて居る、其處へ静かな風が吹き付け、空間から氷と水との間に吹き込んで氷と水とが衝突する、夫れが湖の周囲にある山々の松風の音と相和して、恰かも天人が琴を弾じて居るかの如く、最も妙なる音楽を奏する、其樂の音の麗しき哉！魂天外に飛ぶとは恐らく此時此境の事を言ふのであらう！旅館の一室で、此美妙的な音楽を聞きながら、榛名水産會社が湖水から漁つた鮮魚を料理させて、一杯を傾けて陶然となつた時の快感は、如何なものかと覺し召す、多くは言はぬ——伊香保から二里の山

道を走つた者でなくつては、壺中の消息を解する事は出来ぬ。

此處の宿泊料は、通常六十五錢から一圓五十錢位であるが、外國人さては有り餘る金で費途に困る連中は此限りでない、否、魚が嫌なら二ツ嶽の山林から、五方岩、辨天瀧、水澤道の附近に掛けて兎、雉子、山鳥が驚く程澤山居る、銃獵の好きなものにつては、獵銃を肩にして附近の山谷を跋渉し、獵囊を是等の獲物で満たして伊香保に歸り、宿で料理させて舌鼓を打つも亦愉快であらう！

以上は冬の伊香保を紹介するが爲めに、記者の見聞した美點を叙したに過ぎない、伊香保が四季の遊山客を迎へるに就て、改良を要す可き點に就ては他日筆を洗つて記する機會があると信する。

十八、大光院吞龍寺

(一) 位置と参拜の道順

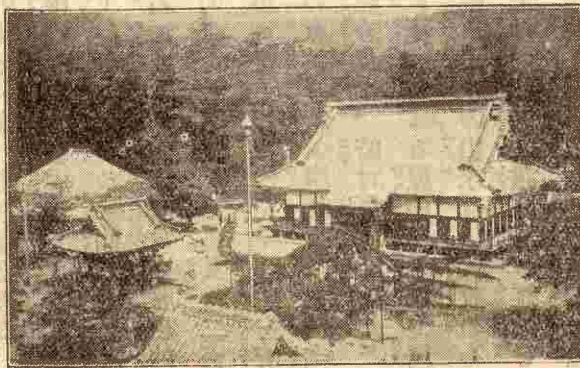
▲位置 群馬縣新田郡太田町に在つて、藤重山新田寺と稱し、淨土宗鎮西派の巨刹で、兒育吞龍の名を以て全國に知られて居るが、太田町は新田郡の東端に位し、前橋市を距る八里三十丁、両毛線に依り伊勢崎にて東武線に乘換へ約三十分にして達せり東京からするものは淺草驛から五十八哩、乘車時間約三時間此間賃金一圓で居ながら太田町に達する事が出来る。

▲参拜の道順 太田驛から十町、十二錢を奮發すると僅かに十分間で吉祥門に達する門は元和年間徳川家が大坂に捷つた時の紀念建築である、境内の本室、開山堂、廟所、鐘樓、水屋、額堂、庫裡、倉庫等がある、本堂は東西十三間、南北十一間半築造の巧妙天下に絶し、内陣正面には阿蛇陀如來の立像、右に東照神君の位牌、左に徳川家歴代の位牌を安置し、別に大方丈に神殿があつて、家康、秀忠、義重三公の木像を祀り開山堂には開祖吞龍上人自作の木像を安置して居る、新田義重の廟は本堂の西に吞

龍上人の塔は廟の南にあり、臥龍樹松は本堂と鐘樓との中間にある、更に此處を見終つたものは

▲金龍寺及金山城跡 に登つて見るのは亦たも愉快であらうと思ふ、金龍寺は大光院の北四丁、宇天水に在り、曹洞宗の古刹で、新田義貞の木像を藏し堂後の五輪塔は左中將義貞の墓碑である、▲金山城跡は金龍寺の北三丁、藤原秀實の後裔、菌田成實の築く處で、後新田氏の居城となり新田氏衰へて後數代、天正十八年に至つて廢城となつたが、昔は關東一の要害を以て知られ、今は風光の美と松茸の産地として其名を謠はれ、明治四十二年には皇太子殿下の御登臨の光榮を有して居る。

大光院



(二) 兒育吞龍由來記

抑も大光院は院祖原蓮社然譽大阿故信吞龍上人が開基以來代を更へる事六十五代年を

經る事三百有餘年、今の院主は元京都知恩院の執事で、昨年中前代學誠上人の跡を繼いで、院主となつた照譽學誠上人(四十一)といふ、博識高德の聞えが、高い善智識である、今此の寺の由來を聞くに、時は建武の昔、北條九代の執權高時が、暴虐至らざるなく、時の帝の宸襟を惱し奉つた時に際し、新田義貞が護良親土の令旨を奉じ、楠氏の孤忠に應じて義旗を翻した勤王の由緒の地である、然も此千古滅する事の出來ない歴史的大人物の靈を祀るが爲に、新田義重に依つて開かれたものであつた、然るに其後二百七十有餘年間は、足利幕府の勢威熾んにして、此由緒の舊い寺も哀れ空しく殘礎を存するに過ぎなかつたが、徳川家康が豊臣氏に次いで天下の政治を行ふ様になつて、宗祖の遺蹟を尋ね、其冥福を祈るが爲太田町に一大伽藍を建立した、時は慶長十年！然し是は歴史上の所謂表面の事情に過ぎない、其實は更に更に大なる原因が存して居つた即ち上州新田郡は徳川氏祖先の起つた處であつて、離れる事の出來ない縁故のあつたのは云ふ迄もないが、同時に上州は戰國時代武田、上杉、北條等諸豪傑が雄圖を懷いて、一ツの爭奪の地となつて居つたので、世は徳川に歸し泰平を謠つて居るとは言へ、上州方面には是等の殘黨が巢を構へ、時を待つて居つたのは云ふ迄もない、之

に加ふるに當時上州の風俗は頗る紊れて居つた……若い男女の不身持から、遣場のない因果の胤の始末に窮した揚句、墮胎が頗る流行した、特に南上州から埼玉方面に掛けては、之が一層甚だしい……公然墮胎を行つて別に罪惡だとも考へぬらしかつた。茲に於て家康が天下を治むるに及び、一面此惡風を矯正すると共に、一面には祖先出身の地から上杉、武田、北條の殘黨を放逐して、兎角猛々しい上州氣質を緩和する事を苦心した——苦心した結果、到底普通一般の行政官の手腕に委して置いたものでは安心が出來ぬと思ふた、其處で彼は之れを好く成就せるものは、善知識の法の力を借る外はないと考へた、這處考の下に家康の目に止つて、此重大責任を負つて立つたものは、大光院中興の祖吞龍上人であつた、知らず上人は如何なる方法を以て此大責任を盡したか？

時は慶長の十八年、徳川家康に認められ南上州に乗込んだ上人の眼に、南上州が如何に映じたであらう！

噂にも聞き家康からも懇々の内命があつたので、覺悟はして來たもの、實際を見るに及んで、上人の驚きは更に一層を加へたが、同時に飽迄も法の力で、此惡風習を打

破しなければならぬと大決心をするに至つた、此大決心と共に足に委せて村々を説教し廻つた、そして墮胎の大罪である事を教へ聞かせたが、一つは永い兵亂の爲めに疲れ衰えた民の多くは、到底多くの子女を育てる事の出来ないのに、搗て、加へて淫靡な風習が、永い歴史を持つて居る、尙且つ無學文盲な土百姓を濟度するのである、流石に博識高德な吞龍上人の法の力も、一朝一夕では其の功を擧げる事は容易ではない此處に於て上人は、只單に法の力にのみ依つたのでは駄目だと悟り、家康に乞ふて寺領として三百石を申受け、各地方を行脚した、而て貧にして子女を養ふ資力のないものや、遺場のない子供を妊娠して、其處置に窮し墮胎でもしやうとする様子のあるものを知ると之を寺に引取り、身二つになつて後夫々子供の處置を附けて遣るので、寺内は常に是等の産婦がうよ／＼して居たし

此功德は聽て上人遷化の後に報はれた、吞龍上人に祈つたなら子の無い者は子供が授かり、祈禱を上げて御弟子となる儀式を行へば、自然災が除かれて無事に成長するといふので、此地方では盛んに此儀式が行はれるやうになつた、俗に所謂五ツ坊主七ツ坊主の願掛けをするのは是が爲めで、既に二人も三人も子供が生れながら、發育

し得ないで彼の世のものにした人達が、上人に願を掛けて其次の子供が、満足に育つて居るといふのは、隨所に聞く、是が即ち兒育吞龍の名を生じた所以である。

實際大光院が今日の人氣を得るに至つたに就ては、吞龍上人の高徳の結果であるのと言ふ迄もないが、人間の價値は棺を蓋ふて後定まると云ふ如く、其多くは上人遷化の後、初めて真に上人の慈悲の源泉から湧き出た、清い涙の結晶が普く知らるゝに至つたのである、「我死せば本堂より乾の方に埋むべし、死後と雖も吾が終生の大願望なりし、庶民濟度濟世利民の靈顯を授くべし」といふ大慈大悲の上人の誓は遷化の後空からず、如何なる難病でも祈れば立所に全治する不思議さ！文明の今日信するに足らんと云つて仕舞へば其れ迄だが、其處は信心の力、誠の心は神佛も必ず捨てずとか、實際上人の靈に祈願して盜難を免れ、又不具となるのを助かつたなどいふ例は數多いので、夫れから夫れへと聞傳へ、大光院の名は獨り上州のみではなく、全國津々浦々の端迄も、吞龍上人の名と共に弘めらるゝに至つたのである。

三 寺 運 再 興 の 功 勞 者

兒育吞龍の聲名が世に喧傳さるゝに至つて、故心講員十萬を算し、日本全國有數の巨

刹と仰がるゝに至つたのは、勿論開祖故心吞龍上人の高徳の致す處ではあるが、明治の初年廢藩置縣と共に、徳川幕府から頂戴して居つた三百石の寺領を召上げられ、同寺の維持困難な時代に際し、寺運の回復に努め、以て今日あるを致したのは隠れたる熱心な吞龍上人崇拝者がある、此崇拝者は、即ち祖先以來熱心な大光院の信徒で、今も尙十萬の故心講員の總取締をして居る、太田町の中村孫四郎及び引間藤八兩氏の前代である。

前代の孫四郎、藤八の兩人は、時の大光院住職蓮譽上人と力を協せ、同寺の繁榮を圖るが爲め、故心講を設ける計劃を立て、未だ交通不便な時に當つて、草鞋脚絆の甲斐々々しく群馬、茨城、埼玉、栃木、甲斐、東京の各府縣を遊説し、明治九年には遂に故心講員十萬人を作つて同寺の基礎愈々堅くなつた、引續いて其翌年には是等の講員から淨財を集め、太田町から同寺に至る迄の本道路十餘丁を拓き、廣馬場を設け更に一萬餘圓を投じて鐘樓を築き同寺の外観一變、自ら參拜者をして崇高の念を懐かしむるに至つた。

東武鐵道の開通と共に、時の皇后陛下、東宮同妃兩殿下及び皇孫殿下の御臨場あり、

年々歳々団体參拜が増加する様になつた處へ、日露戰役が開始され、同地附近の出征軍人で、同院のお守を肌に着けて出征した者の中に一名の戦死者もなく、僅かに二名の負傷者あつたのみで、其負傷者も一命を取止めたと云ふので、同寺の人氣は更に一段の熾盛を加ふるに至つた。去程に同寺では、一昨年から節分會に追儼式を催し、盛大を致して居る、最近に於ては根津嘉一郎、葉住利藏、澁澤金藏、上原政十郎の諸氏も亦中村引間兩氏と共に、其發展に多大の力を致して居る。

上州太田町五丁目

御旅館 芭蕉屋

電話二番

上州太田町停車場前

會社 太田運送店

電話三十三番

代表者 上原政十郎

上州太田町四丁目

御料理 大野家割烹店

電話十番

十九、各地の温泉

(一) 四萬温泉

四萬温泉は海拔二千五百尺の吾妻郡澤田村大字四萬にあり、湯は新湯を中心として山口、日向見の三ヶ所から成る、此温泉が発見されたのは、延暦三年坂上田村麿が東夷征伐の際だといふが、其稍々繁昌を來たしたのは慶長十七年以後で、元祿時代には其區域も擴大され、頗る殷賑を極めたが、天保の饑飢以來衰退して明治に及び、十四五年の頃から頽勢を挽回して、四萬温泉の名漸く高まると共に、鑛泉の體成を改善し設備大に整頓するに至つた、而かも土地清爽空氣新鮮で、風光の絶佳なる伊香保と其美を争はんとして居るのに加へて、湯は恰かも清水を沸かしたかと思はれる程無色透明で、吾妻軌道會社が中之條町迄通する様になつてから、京濱浴客増加し、盛夏の頃は日々、滞在客千餘名に達すると云ふ盛況で、登山の道順は前橋高崎兩市から電車で澁川に至り、澁川から中之條迄馬車鐵道の便があり、中之條から四里の間は鐵道馬車の發着毎に、人力車及馬車の連絡があり、前橋高崎兩市から六時間を以て達する事が

出来る、旅館の重なるものは積善館關善平、鑛青館猿谷倉之進、山口館田村八平、賽陵館田村茂三郎等である。

(二) 草津温泉

吾妻郡草津町にあり、海拔四千五百尺、極暑の候と雖も華氏八十度を超ゆる事稀で盛夏も暑氣を感じる事が無い、而かも其温泉は花柳病に尤も効顯あるを以て知られ、本邦温泉中に於て尤も古き歴史を有し、其規模の大なる松の湯、鷲の湯、地藏の湯、白旗の湯等がある。

川原湯温泉 中之條町を距る五里、同郡長野原町大字川原湯にあつて、土地高燥空氣の清涼、風景の美に加へて、泉質の硫黄泉は無色透明、諸病に効果著しく、近來旅館の設備整頓するに従ひ、内外人の來遊年を逐うて増加して居る、其他同郡には川中温泉が岩島村にあつて美人湯と稱し、入浴者の皮膚を美しくし、澤渡温泉は中之條を去る二里半、澤田村大字上澤渡にある。

(三) 礫部鑛泉

高崎驛を信越線に乗換へて十哩、東京上野から四時間十分で汽車を礫部驛に降ると

僅かに二丁で温泉場に達する、鑛泉は多量の塩分を含有し居り、特に胃病、留飲、慢性胃加答留、氣管支加答留、喘息、咽喉病、疝疽、痔疾、神經痛、ヒステリーの諸病には尤も奇効があると云ふので、近時京濱地方からの來浴者が絶へない、而かも場所には北は碓氷川の清流に沿い、東は磯部遊園に接し、春は櫻花吹雪を歎き、夏は河鹿の音も優しく、附近には二里を隔て、群馬縣の三山の一つである天下の奇峰妙義山は南に、果樹園と瀑布とで知られて居る瀧山は、鑛泉場を距る五町、碓氷川の對岸にある望の名所横野は十五町人見村に、佐々木盛綱城跡は磯部鑛泉場から東南八町、今は公開して遊園地となつて居る、佐々木盛綱西念入道の墓は東十町碓氷山松岸寺にあつて入浴の間々の逍遙には此上もない場所、温泉旅館の優なるものは鳳來館大手万平氏方である。

兩市の代表的人物

株式會社 株式會社 株式會社 株式會社 株式會社 株式會社 株式會社

群馬商業銀行

三十九銀行

上毛物産銀行

第一銀行前橋支店

群馬商業銀行前橋支店

前橋商業銀行

上毛貯蓄銀行



木村二郎氏

前橋市長本村二郎君は、明治九年九月十四日前橋市才川町二十八番地に生れ、市の有力家木村農夫吉君の養子となり、其姓を繼いだものである。抑も君が今日の地位に勝ち得るに至つたものは、君が本縣警察本部衛生課の雇を拜命したのが其第一歩であつた。其後明治廿九年九月十九日には佐波郡々書記を命ぜられ、俸金十八圓を給與され、全三十一年六月廿日に群馬郡書記に轉じ、居る事三年、全廿六年二月廿九日群馬縣屬に任命され、商工課に勤務する事となつたが、其翌年九月に庶務課に轉じ、兵事係から累進して庶務課の主任屬となり

である、而かも僅かに衛生課の一雇人から、廿年の長日月を何等の不平も、何等の煩悶も感じないで、果進亦榮轉、遂に利根郡長から前橋市長に推選されるに至つた君は、常人の企て及ばない忍耐力も、非凡の手腕を有して居るのは云ふ迄もないが、亦順境の人たるを失はぬ、と同時に其君子肌の、上を尊び下を憐むて、温厚さの賜で、其市長としての手腕も、事蹟は之を今後に見なければならぬ。

四十五年二月には五給俸を給與され、引續き全年五月廿一日利根郡長に拔擢され、高等官八等に叙せられ六給俸を下賜される事となり、大正元年八月廿一日には正八位に任ぜられ全二年七月廿日高等官七等に昇進したと云ふのも、君の生立を語つて居る官歴である、本縣衛生課の雇を拜命してから、官界にある事約廿年、君は實に官界の白鼠

百萬の富を積んで居る群馬縣實業議員江原芳平翁は嘉永元年九月十二日の生れである。世の中の多くの人は成功者に對しては、必ず一種の嫌疑の眼を持つて悪評を加へる事に努めて居る。君も亦是等の嫉妬猜疑を受つて、ある一人であるが、必ずしも世間の評判のみを以て、其人を律する事は出来ぬ。常人の出来得ない成功をなす者には必ず夫れだけ常人と異なつた特長を有して居らなければならぬ。然り君は如何に餘裕ある金を所持して居つても、前途に望みのない、否山師的な饒倖を



氏平芳原江

更に面白い話がある。即ち米倉に鼠の侵入する穴が出来た。普通の者なら此穴を見付けたら同時に直に穴を防いで鼠の侵入を防ぐ方法を講ずるが君は其様な事は一向平氣で放任して置く。其理由を質れるものがある。其答も亦頗る面白い。穴を防いで鼠の自由の出入が出来ぬ様にする。鼠は必ず亦他に穴を作つて喰荒しをするが其穴を放任して置く。鼠の奴人が知らぬと頗る安心して決して他の箇所を荒さぬから損害は一ヶ所ですつて居る一年間に鼠の食ふ位の事は極めて僅なものである。

た、四十四年五月、長い間勤めた市參事會會員を勇退した時に當つて、平田江原桂、羽生田、竹内(清)の諸氏と共に市政に參與し、市の爲めに盡した事は決して僅少ではない。故に明治四十四年江原桂三郎氏が市長を退職して、故今鐵平氏が市長候補者に舉げられた當時は、市長第二候補者に推選されるの名譽を得た。然り君は長期間市會議員を勤め市參事會會員となつて、平田江原(桂)、羽生田、竹内(清)の諸氏と共に市政に參與し、市の爲めに盡した事は決して僅少ではない。故に明治四十四年江原桂三郎氏が市長を退職して、故今鐵平氏が市長候補者に



氏衛兵新井藤

前橋商業會議所會頭藤井新兵衛氏は文久二年四月四日佐波郡赤堀村の多額納税者、本間家の第三男に生れたので、當年取つて五十二歳の働き盛りである。其藤井家の養子となつたのは、明治廿八年三月十七日、十九日に相續して居るから、君も前橋の人となつたのは二十七歳の時である。君の生れた時、元來藤井家は市の名望家であつたには異ひないが、君も前橋の人となつて恰度廿五年の今日、商業會議所の要職に就き、前橋市の元老として五萬の市員から重んじられて居る。のほ、君亦凡俗でないと共に、陰に陽に市の爲めに力を致して居るのを知る事も出来る。

向直接間接市の爲めに多大の力を致して居る元老株である。

君は貴族院議員江原芳平君の女婿である、君が前橋に來たのは今から三十年の昔即ち明治廿年の頃で、其生國埼玉縣の豪農の二男で、文久三年一月廿日の生れである、有名な嚴格家の江原家に養子となつて三十年の長日月を、嘗て一度も養父芳平君から不信用も買はないで、桂三郎ならば悴共の相談相手にもなるさ喜ばしめた君は、又決して只の鼠では無い、小楳三合持たら婿入りするなさは昔からの諺で、世の中に嚴格い家庭



江原桂三郎氏

の女婿位氣骨の折れるものはないが、君は此間に處して、人一倍嚴格い芳平君さ、多くの小姑を巧みに操縦して來た其強い忍耐力には敬服の外はない、然り三十年間に亘る此忍耐力の賜は、今や君は江原家から別家して、獨立の人となつて居る、前橋の兩江原として市民間からは養父の芳平君以上に重んぜられて居る、嘗ては縣會議員として縣政壇上に立ち、議長と迄なつたが、其議長振は三十年間養父に使へて、家庭に何等の風波をも起さない程の忍耐力さ、温順さは三十五議員をして、一語も雖も議長攻撃の矢を向ける事か出來得ないで、其市長となるに及では、背後に江原一家の大勢力さ、其圓滿な社交的手腕さで市政を料理した巧妙は、今回の市長後任問題と共に、五萬の市民が第一に君に指を屈した所以である、今は政界から退いて實業界に身を投じて各銀行會社の重役をなすの傍ら、農銀改革と同時に擧げられて取締役の一人となつたが、現在に於ける實業界方面に於ける江原一家の代表的手腕家は、亦君であるさ云ふのも敢て過言ではあるまい。



平田健太郎君

前橋市會が全會一致を以て推選し、五萬市民の殆ど全部の熱望は、遂に市の元老連を迄動かして、氏をして市長の就任を承諾せしむるに至り、遂に其器に非ずてふ名目の下に拒絶した、君は市内第一の人望家である、眞に五萬市民中、其人物には乏くはないが、恐らく君位敵の少い人望家は稀であらう、抑も君が今日の如く人望を得た所以は、決して一にして止まらぬであらうが、要するに君が清廉潔白の人であるさ云ふ事さ、温徹中和の人であるさ云ふ二つに起因するさ斷じて大なる誤りではあるまい。

君は慶應二年三月廿一日を以て其自宅に生れ、上京して慶應義塾に入り福澤先生の訓育を受けた、頗る新しい頭を持つた人である、其平素は沈黙寡言、席上に君あるのに氣附かぬ者すらある程だが、一朝必要に迫られた時の如きは二時間三時間の長きに亘つて、演壇上に立て聽衆をして飽ましめない、君が市長を拒絶した口實は自ら卑下して其器に非ずさ云つて居るが、其實一個名譽職に過ぎない現在の市長となつて満足して居るには餘りに多望である、實際前橋市の實業會は君に望む處が、頗る大である、加ふるに君が頭取をして居る前橋商業銀行が、今日の信用を維持して居るのは君の手腕に賴る處で、其將來の發展も亦君の双肩に懸つて居る、君は長い間市會議員として、將亦市參事會員として、市政壇上に立つて居つた時、亦君の手腕は市民の認むる處となつて居つた、實に君に至る處可ならざるなして、順境の人である、否相當人物にも乏しくない前橋市の人物中、策戦家としてよりは寧ろ實行の人として第一人者を以て數ふ可きであらう。

前橋市本町竹内合名會社は、竹内氏兄弟に依つて經營されて居る。絹糸問屋である、兄は清次郎君、弟は勝藏君と云つて、共に前橋市の實業界に於ける重鎮で、亦同時に市の元老を以て目せられて居る勢力家である、清次郎君は五十一歳、文久二年一月十二日を以て高崎市に生れ、明治廿三年七月八日竹内家の養子となり、今日に及んだが、嘗ては三期間を市會議員として、又四十一年より四十五年の春に至る五年間は、市參事會員として市政に參與し、常に體健着實に市民の爲めに働いて居つた、今は表面政治舞臺から勇退して一身を實業界に投じて居るが、君の政治的生命は引退して居るが爲めに消えて居らぬ、事ある毎に常に兩江原、藤井、羽田、平田の諸氏と共に所謂元老として偉大な勢力を占め、直接前橋の市政を料理す可き市會議員も、亦彼等の意志を無視しては何事も行ふ事は出来ぬ。



氏 郎 次 清 内 竹

望みを囑す可き仕事であるならば、自ら進んで創業時代から、片肌脱いで骨を折らうと云ふ決心を待して居る、今は六百萬圓の大會社と迄なつた、利根幹電氣創立當時の如き、未だ企業に極めて乏しかつた前橋の實業家は、何れも同社前途を見る事が出来ないで、之の發起を望む者のなかつた時に當つて、君が將來其有望なる可きを信じ率先して賛成を表し、遂に此大會社の重役の地位を贏ち得たが如き、亦君の企業に對する半面を知る事が出来やう！

大正二年八月五日、前橋市の市長候補選定の市會に於て、其第二候補者に推選された羽生田仁作君は、弘化三年八月十八日信濃國に生れたが、君等夫婦が前橋市に轉住したのは、今から卅年の昔、即明治十五年の春で、夫婦が初めて前橋市に來た當時は全くの裸體一貫で、夏は水屋を冬は牛車屋を經營して生計を營んで居つたが、其當時の如きは雇人一人使はないで、下女や小僧のする仕事も皆夫婦の手で爲したさは今も尙赤城館女將が、折々當時を追想して語る處である。



氏 作 仁 田 生 羽

功の経路を辿つて見ると頗る男子的である、心の底に何等疾ましい處のないのは彼の爲めに誇りさす可きである、今暫く君の経歴を調べて見ると、初め市の公人として市に力を致したのは明治廿六年一月第一區長代理者となつた時で、廿九年三月には區長となり、三十一年一月市會議員となり、三十九年五月市參事會員に選舉され、四十年三月には商業會議所議員に、四十三年五月再び市參事會員に擧げられ、市政改正と同時に勇退して今日市の元老として、直接間接市政に參與して居る。

折々當時を追想して語る處である。

其れが三十年後の今日では、赤城館の主人として赤城牧場を經營し、牛乳組合の組合長を爲し、前橋市の元老として、遂には市長第二候補者に擧げられるに至つた君は、亦成功者中の成功者である、實際前橋市に於ける有力家の半分は土着の士ではなくて他府縣人であるが、君は他府縣から前橋市に來て成功した者の中で、最も大なる成功をして居ると共に其成功の経路を辿つて見ると、頗る男子的である、心の底に何等疾ましい處のないのは彼の爲めに誇りさす可きである、今暫く君の経歴を調べて見ると、初め市の公人として市に力を致したのは明治廿六年一月第一區長代理者となつた時で、廿九年三月には區長となり、三十一年一月市會議員となり、三十九年五月市參事會員に選舉され、四十年三月には商業會議所議員に、四十三年五月再び市參事會員に擧げられ、市政改正と同時に勇退して今日市の元老として、直接間接市政に參與して居る。

前橋の市街地の雑踏を避け、平素を神明町の一角に聲を潜めて居るが、一朝市の政界に何等かの波動が生ずるが如き場合あらば、必ず眼れる獅子の醜たかの様に身を起し、謀士として將亦闘將として、常に敵艦を寒からしめる問題の男は、即ち吾が田邊井宗七君である。問題子の言は或は極端かも知れぬが、君は稍我儘な男である、自分の氣に入るさ其活動力も亦猛烈で、而も熱心であるが、一度感情を害するさ、何人も亦君を動かす事は出来ぬ、だりら君を敵として二戦ふものは君を恐れるのである君の眞價は實に此熱烈な活動力にあるのだ。

田部 井

宗 七 氏

君が一度手に唾をして立つた時には、頗る猛烈を極めて居る、市の有力者は此眞面目な熱心の前には、大概賛成せざるを餘儀なくされる、即ち君は一度計畫した事は、必ず最後迄奮闘して成就せなければ止まぬが、其代り君は策を立つる迄には、常に周囲の状況を研究して、慎重に事に當るが故に、君の策は常に市民から重んぜられて居る。

君は物事に頗る熱心である、其上に頗る數理に長じた事務的才能を有して居る、若大銀行又は大會社の支那人として君の手腕を發揮せしめたならば、經濟界稀に見る事務家たるであらう、兎に角此手腕家を前橋位の小天地に置くのは惜む可きである、近來君の活動力も稍々鈍つて來たかの如き恨みのあるのは、久しく健康を害して居るが爲めたと聞く、吾人は君の健康体となつて、異日前橋市の政界に熱烈な氣を吐く時代の來るのを喜ぶものである。



高橋源之助氏

前橋市會議長高橋源之助君は、慶應二年十一月廿三日を以て、確永郡安中町に生れ、當年は取つて四十八才の男盛りである、其前橋市に轉住したのは、今から二十有餘年の昔である、君の本業は蘭系の委託賣買で、前橋市本町の龜田屋商店は彼の住宅で、別に田町に龜田屋玉糸製糸所を所有して、次弟の伊三郎君として、専ら經營の任に當らして居る、君に三人兄弟があつて次弟が伊三郎君、末弟を駒次郎君と呼んで居る、前橋市實業界の大立物で、市政の上にも於ても其將來は曠目されて居る、君は八方美人主義の男であると同時に、極めて正直な男である、眞面目な熱心な男であるが、決して策士ではない、従つて其政治的生命の如きは至つて多望なる將來を有す可きや否や頗る疑問させなければならぬが、頗る厄介者の多い前橋の市會に於る議長としては、君の如く八方美人主義の男でなくては、平和の間に市政の革新を計る事は困難であるかも知れぬ、此點から見れば前橋の市會に於て政治家ではない、實際實業界に於ける龜田家の勢力は絶大なものである、好く二人の弟と一致融合して、年々百萬圓以上の蘭系を運轉して居る手腕に至つては、實に敬服せざるを得ないが、龜田屋商店今日の土臺を作つたものは、亦決して君一個人の力ではない、三人兄弟が協力一致したるが爲めではあるが、此兄弟の力を協力一致せしめて今日の基礎を作つたものは、君が先天的に有して居る八方美人主義の賜である。

前橋市の片端に大羽根の邊流岩角に吼ゆる紅雲町に住んで居るが故に、人呼んで下村紅雲伯と云ふ。今は市の政治舞臺から隠退し、悠々閑日月を送つて居るが、十數年前迄は前橋唯一の資産家として市民崇拜の焦点に立つて居つた。否、只、單前橋の勢力家であつたのみではなく、東京に於ても前橋の下村の名を論はせ、廿年の昔既に早く東京に出て、二頭立の馬車に、前橋兒の意氣を論はせた君の風采は、産を失つた今日、只二昔以前の少さは消へて居るが、然し尙自ら卑下する事を致して得ない氣は、眉宇の間に現れて、有りし昔の榮華を憶はせて居る、只惜しむらくは一敗地に墜れて此方、前橋の早稲田伯を氣取り、活動舞臺即ち實行界から離れて、批評の人として其存在を認めしめて居るが爲めに、世間からは實行の人でないとの評解を懷かれて居る事である。



下村善右衛門氏

の財産と雖も、君が驕奢の爲めにのみ費したものでなかつた、君の乃父成善太郎氏は、前橋公園に銅像として永久に記念されて居る程に、市の爲めに努力した人、善太郎氏が病の床に打臥し、自ら危篤を感じた時始めて君を病床に招き、家の財産の如何かを尋ね、「此儘に放任して置いても尙三年は持堪へるだらう」と君が答へた時、ヨシと言ニコリ笑つて眼目した、眞に下村家は前橋市の爲めに數十萬の資産を失つたのである、此父の血を受けた君も亦眞に市を思ふの人である、因に君は文久三年七月十七日前橋市で生れた。

前橋市選出縣會議員で縣會議長の候補者となつて居る、前橋市會副議長岡田養平君は、羽生田仁作君を初めとして、岡田文吉、野中倉吉、小栗音五郎の四氏と共に、故關口代議士左右の腕として、將亦五人の一人として、前橋の政治舞臺の人となつた、君は初め小學校の教員をして居つたが、君の家は代々の醫者で、而も其少年時代から才氣溢る、許りのものがあつたので、深く關口氏に愛せられて、遂に學資を給せられて醫者となる可く上京し、濟生學舎に入學し、開業醫檢定試験及第後は今の立川町に町醫者を開業した。

岡田

養平氏

其初めて政治的舞臺の人となつたのは、故關口代議士が前橋市選出代議士として、前橋市を席捲した數年前からで、其初めて市會議員となつたのも、亦關口代議士の應援に依るのであつた、關口代議士物故して後は、野中栗の一派と分離して、所謂貴族黨の一派と合体し、一昨年縣會の總選舉に打つて出て縣會議員となり、一時は議長候補者にまで擬せられたが、不幸實業派の犠牲となつて、其椅子を星野源左衛門君に譲つたが、前橋市會に於ける君は實に今の全盛期である、實に現在の前橋の市會は君の獨舞臺である、市會が君の爲めに作られて居るのか、君が市會の爲めに作られて居るのかとも疑はれる、今や君の子息は醫學士として、君の後を繼いで眞面目に父祖代々の醫業を營んで頗る評判が好いから、君は既に家を顧みるの必要もない、尤も氣樂な地位に立つて居る、君が前橋市會を左右するが如くに見られるのも、亦家に後顧の患ひがないからであらう、因に君は慶應二年四月一日を以て前橋市に生れた。

君は恐れ多くも、今上天皇陛下がお生れ遊ばした、今年全月全日を以て今の居宅で孤々の聲を揚げた幸運兒で、年齢將に三十有餘歳、尤も青年の氣に富んで居る將來のある身体である、君は慶應義塾が未だ大學制度を敷かない時代の同校の卒業者で、君の亡父勝藏氏は故下村善太郎氏と共に、一身の利害問題を打忘れて市の發展の爲め努力した前橋市の元勳で、故下村善太郎氏と共に永く市民の



頭に忘れる事の出来ぬ大恩人である、此父の血を受けた君は亦素封家中稀れに見る活動家で自ら家業を修めて僅かに十年、市内の政治實業兩方面から頗る重きをなされて居るのは、乃ち父勝藏氏と養兄清次郎氏とが扶養の力にも依るであらうか、亦君が天性の才能の然からしむる處ではあるまいか。

り四十三年には蠶絲同業組合聯合會の組長に、四十四年には前橋製絲同業組合の組長となり、昨今では高崎倉庫會社の相談役を兼ね、兩市の實業界から其多望なる將來を矚みされて居る青年實業家である、君は珍しい讀書家である、暇さへあると常に新知識を吸集するに多大の努力を費して居る程であつて、確かな新らしい頭を有して居る従つて、親の遺産に依つて暖衣飽食して居る徒輩には、珍しく理窟の解つた人である、否前橋市の有力家が兎角利己主義に走らうとする今日痛切に五萬市民の爲に此惡弊を除却し様と感て居る一人である。

前橋市の市參事會員小泉善六君の勢力の大部分は、乃父藤吉君の賜である。君の乃父藤吉君は、裸体一貫の身を以て前橋市に來り、故下村善太郎氏方に身を寄せて以來前橋市の有力家として、將亦市の元勳として、絶大の勢力を占有するに至る迄の苦辛慘憺、實に成功者の鏡である、由來前橋市の成功者には他府縣人が頗る多いが、其成功の跡を尋ねると多くは事業に依つて成功したるもの



小泉善六氏

ではなくて、只單に金を集めたさ云ふに過ぎないから、夫等の輩が果して何程市民を益して居るか云ふのも疑問である。然るに藤吉君は全然之を趣を異にし事業に依つて成功して、居る即ち君の家は下村家の失敗後を襲いで生絲商を營んだ一方には、製絲業にも關係して、前橋の實業界に盡した力は蓋し僅少ではなかつた實際藤吉君は一方に於て外人を相手に商業の手を廣めると同時に、一方に於ては市會議員となり市參事會員となつて、市の爲めに盡して居る、失敬な話だ

が君の父藤吉君は決して學問のある人ではなかつたが、然し其頭の確かな事記憶力の強かつた事の如き恐らく前橋市中稀に見る處であつたらう、此父の血を受けた君は年餘尙未だ僅かに三十有六歳市參事會員として市政に參與して居る傍ら商業會議所評議員となり利根發電會社の重役となつて市の政治實業兩方面に活動して居る乃父藤吉君の名を耻しめないうて五萬市民の爲めに奮闘して居るのは君の全身には又父の血が流れ回つて居るが爲めであらう若し其參謀に得たならば君の前途は亦洋々なる海の如きであらう。

君も亦故關口代議士の五人男の一人で或時は故關口代議士の片腕と迄頼まれた男であるが現在では三十市會議員中間屋の人として市民からは多大の注目を惹いて居るのは、君と野中倉吉君とである、故關口代議士の系統を引いて居るの多くは前橋市の土着の士ではなくて、何れも他府縣から移住し成功したものであつた、君も亦嘉永五年八月廿五日を以て越後に生れ、其の前橋市の人となつたのは今から廿五六年の昔で、其



岡田文吉氏

今日は、永久に來らなかつたかも知れぬ、勿論君は大膽な男ではない、寧ろ正直な男である、一本調子な男である、従つて頗る激し易い男である、只難を云ふ意志の弱い點である、此意志の弱いと云ふ事は寧ろ利益であつても害さばならぬ、君も前橋の元老連に容れられる所以は即ち此意志弱い爲めである現在に於ては君は市參事會員たるの外、商業會議所議員となり市の政治實業兩方面に活躍し公共の事業にも多大の力を致して居る、要するに君は問題の男である、前橋市に於ける名物男である。

前橋に來て僅かに廿年、十萬の資産を積んで、市參事會員の椅子を占める迄には、種々な苦心も横はつて居るのであらうが、其重なる原因は、君が關口代議士に見出されたが爲めである、君が今日を爲して居るのは、實に關口代議士の賜であると言つても差支はない、否關口代議士なかつたら或は君の



荒井久七氏

前橋市の市參事會員で、商業會議所議員を兼ね、市の政治、實業兩方面に活動して居る荒井久七君は、前橋市野町荒井一家の總本家で、慶應三年八月三日高崎市本町山田政三氏の弟に生れたが、其荒井家の養子となつたのは明治廿八年二月十八日、恰度廿年の昔であつた、君は忍耐力に富み温厚を以て知れて居ると同時に、一見、頗る不得要領の様であるが、彼れでナカク要領を得て居る人である、然し君は決して策士でもなければ利者でもないが、敵を作らぬ丈けに市民の信用を集めて居るか如きは驚く可き程で、君の別家の荒井甚八君も堅町隨一と云はれる程の手腕を有し、資産亦本家を相伯仲の間にあるのに係らず、自町の信用を得る事が出来ないで何事に向つても反對者の多いのに對して、君が此不得要領の間に人を引付けて行く手腕は、やがて君の今日あるを致したのではなからうか。

嘗ては横川文五郎氏の後を受けて消防組頭となつた時の如きは、長組頭の名を博せしめ、數百名の消防隊に指揮號令して、其手足の如く活動せしめたが如き、決して君が表面に於て見るか如き不得要領の間に人知れの要領を得て居るのを證明して餘りがある、市會議員として將亦市參事會員としての君は、表面に立つての活動家ではないが、常に平和主義を持して、着實な實行家を以て目せられ居ると同時に、前橋市の政實兩界に於ける平和の中心人物である。

一時前橋の政界に活躍して居つた、故關口代議士は流石に烟眼の士であつた丈けに、其輩下の多くは、舊習に固はれて居る土着の士ではなれて、他國から轉住して成功したもの、即ち土着の輩から、一種の清疑心で成金黨を罵倒されて居る者を引立て、取つて自分の用に供した、前橋市會議中岡文吉君と共に、常に問題の男をせられて居る野中倉吉君も、亦故關口代議士の恩顧を受けて、市政壇上の人となつたもので、關口系五人男の一人である。



野中倉吉氏

野中君は新潟縣の人、其前橋市に來たのは今より恰度三十年の昔で、其當時初体一貫で轉住して來た君は、今は曲輪町に堂々たる邸宅を構へ、劇場柳座の經營をして居るが、頗る大膽な男である、強性な男であるが、同時に正直な男である、君が裸体一貫から今日を爲すに至つたのは即ち、此常人と異なつた性格の然らしめたものである、成金黨と云ふ事勿れ、成功者には必ず常人に秀でた特點を有して居らなくてはならぬ、私は野中君が片意地を喜ぶものである、因に君は嘉永五年四月八日の生れである。



深町關代藏氏

前橋市相生町の味噌醬油問屋の主人公深町關代藏君は尤も多望なる將來を有する前橋市の問題の人である、君は明治十三年五月九日を以て前橋市に生れた、君は現在に於ては公人としては相生町の區長を勤め、前橋市の消防組合の組頭をして居る外、表面に立つて際立つた活動はして居らぬが、若手の利者として、新進有爲の人として青年黨中最も多く前途を囑目されて居る一人である、前橋市に清水井の商號を用いて居るもの三、一ツを深町富八、一ツを全傳七と云い深い親族關係を有して、何れも實業に従事し、市の政治實業兩方面に活動して等しく五万市民から頗る重きを爲されて居る、君の平素は頗る濃厚篤實、職業に忠實で人の爲めに努力を惜しまぬ平和の人であるが、一度事を爲すの場合には、其新しい確りした頭と、清濁併せ呑み得るの氣概とは、中流以上の前橋市民申極めて稀れに見處で、幾百の消防部員に指揮命令して、手足の如く動かせるのを見ても、君の平素の如何であるかは察するに難くはあるまい。

然り一度機會を捉へて猛進する場合に、青年黨を結んで一團となし、之が牛耳を取るものは亦確かに君でなくてはならぬ、而かも現在既に一般市民は君の如き新進有爲の士の活躍を希望して居るのは疑もない事實で、此氣脈の相通じた場合は、即ち君の活躍すべき時代であるのを信ずるものである。

君は明治大學出身の辯護士である、其前橋に永住の基を開いたのは今より廿五年前、即ち明治廿一年の頃で、現今では前橋市に於ける問題の男として、北曲輪町の一角に轉居して居る、辯護士としての君は、其全盛時代で田舎に於ける辯護士の常として民刑何れにも行波つて居る事は云ふ迄もないが、中にも君は民事の方で得意の様である、政界に立ての君は、嘗て前橋市から市會議員となり、市參事會員として市政の上にも力を致した、市會議員たるのが君の目的ではなかつた、君の目的は中央政界の檢舞臺に、飽迄も在野黨の意氣を發揮して見たいと云ふのにあつた、之が爲めに市會を退くと共に、前橋市の政界を二分して其一つを保たうと、茲に故關口代議士が世を去つて、直に迷つて居る一派のものを狩集めて、自己の身方とした、即ち現時少數黨の意氣を市會の一部に認めしめて居る十人組は、主として此關口系に屬するの士で、之が内部の首領は即ち君である。

昨年、代議士總選舉には、關口系統に屬する一派を中堅として馬を陣頭に進めたが、政友會の御用代議士竹越三又君が、數出兩の軍用金を提げ、市の有力者や後援として、前橋市に乘込んだが爲めに、不幸脆くも一敗地に塗れたが、本年の市會には自己勢力維持の一方法として、輩下のものをも市會議員とするが爲めに、少からぬ軍用金を投じたその事である、要するに君は首領としての器を有して居る、策もあるが部下に對しても頗る忠實で、事に當つて熱心なのは君の今日に爲さしめた所以で、亦多くの將來を有する所以であらう、君は文久三年十月十五日の生れである。



氏郎五民林士護辯

前橋市曲輪町縣廳通り、響田法律事務所の主人公、三十郎君は前橋法曹界中の人氣役者である、響田君は明治四年十二月一日を以て群馬縣に生れた、性來頭腦頗る明晰、若い時から法律に多大の趣味を持つて居つたが、中學卒業後は進んで専門學校に、好める法律學を研究するのには、家庭の許さない事情があつたので、自ら求めて太田區裁判所の書記を奉職し、其餘暇に講義録を取寄せて、一向法律の研究をした、斯くて太田區裁判所に居る事五年、劇務の餘暇を割いて法律を修め、明治三十六年初めて東京に出て、判檢事務



氏郎十三田譽士護辯

こののち一年を太田町に暮し、翌三十八年の秋判事となり、長野地方裁判所松本支部詰となつたが、本來も官吏さなるのが目的でなかつたので、居る事僅かに三ヶ月で、職を辭し、前橋市に來て辯護士を開業した、君は辯護士となつて恰度八年である、八年さ云へば一昔弱である、短くはないがさりさて亦決して長い方ではないが、而も先輩を抜いて、前橋法曹界の人氣を背負つて立つに至つたが、云ふ迄もなく君が此評判を高めたるのは、常に君が獨學時代の研究的精神を持して、依頼の事件に對しては、其事件の真相を捉へる事に心を遣ひ、依頼者の虚偽の報告に欺かれないで、豫審調書を眞面目に調る努力が、今日を爲したものであるが、而かも其謹直な中に、何處さなく、人を引付ける一種の魔力を有するが爲めである。

前橋辯護士の人氣男、金庭友八君は早稻田大學法料の出身で、永い間司法官として官職にあつた。敏腕家である君の出身は群馬縣多野郡で一時は前橋地方裁判所判事部長として、良判官の名を誦はれて居つたが、官を退いて辯護士となつてからは、前橋辯護士組合中で、五本の指に數へられて居る。君の得意は寧ろ民事の方であるらしいが、刑事辯護も下手ではない、而も正直で親切である。

政治方面に於ける君は、未だ今日迄は活動の舞臺を築くの準備時代であつたが爲めに、取立て云う程の事は無いが、縣政界からは問題の人として注目されて、来る可き縣會の選舉には、前橋市から打つて出るの御心があるさ。郷里多野郡から、中原の鹿を争うであらうさか云々噂は専ら、其の方面の消息通の間に唱へられて居る、否更に某消息通は、君の望みは縣會議員ではなくて、一舉代議士を争ふ考へに相違ない其地盤とする所は前橋市ではあるまいかさ。之は君が早大出身の關係から、清水君と一時關東産業新聞の經營をしたが爲めての風説を傳へて居るものもある、之は君が早大出身の關係から、清水君と一時關東産業新聞の經營をしたが爲めて



辯護士 金庭友八氏

新聞を經營して此武器を利用して、縣會議員や代議士を争ふ迄に、君の頭は政治に飢へては居らぬ、官界にあつても君の將來は頗る多望であつた、少くとも裁判長位にはなる可き力を有して居つたが如く群馬縣民としての君の前途も亦多望である、而も近來財産の出來て來たと共に、亦散する事をも惜まぬのは、君の人氣を集めた所以であらう。

前橋辯護士組合の辯護士で、本縣邑樂郡選出縣會議員、小林茂八君は、舊館林藩の士族で、邑樂郡郷谷村の資産家である、君は明治元年五月十九日の出生であるから、當年取つて四十六歳今も働き盛りである、尤も元氣の盛な時である、君は家族と共に前橋市神明町に住居して、辯護士を業として居るが爲めに、一年中の大部分は前橋市で暮して、郷里に歸るのは極めて稀である、君は早い頃の中央大學の卒業生で、



辯護士 小林茂八氏

頭腦明晰論亦秩序立つて居るが爲めに、其本業である辯護士も亦頗る繁昌して居る。

君は縣會議員として、縣政壇上では政友派に屬して居るが、政友派中の少壯派に屬して、幹部からは寧ろ異分子を以て目されて居る丈に、清潔分子の一人である、然り政界の人としての君は、現在の縣會議員の行動に就ては、不平を以て居ると同時に、將來に於て多くの希望を有して居るが、君が縣政壇上一語此不平を漏さぬ所以は、君の居る邑樂郡は年々歳々の水害で、百萬縣民に多くの迷惑を及ぼして居るが爲めて、君が縣會議場に於て一語の不平を洩さぬのは、即ち郡民を思ふの至誠からである、君は政界の人であるが故に、本業たる辯護士の職務を忘れるが如き不眞面目な男ではない、細心で眞面目で、職務に頗る熱心な人で、其前途に多くの希望を有して居る人である。

君は明治十二年を以て岡山縣に生れた。郷里の中學卒業後、「男子立志出郷關學若不爲不歸死」て不意氣を懷いて郷里を飛出し、暫く大坂に足を止めて、大坂市書記を奉職し、更に轉じて同市校務屬となり、神戸地方裁判所書記に轉じたが、君の目的は只單に、一地方裁判所の書記位で甘するに餘りたので、断然去つて東京に出て、明治大學に入學して法律學を修め、辯護士試験に應ずるの準備をして居つた。其本



辯護士 岡田三郎氏

縣に來たのは適々知人の紹介で、辯護士試験の準備中衣食の道を講ずるが爲め、群馬縣に來て警部を拜命し、奉職中選拔されて東京警官學校に入學し、同校卒業後は一向辯護士試験に應ずるの準備をして居つた。遂に明治四十四年の同試験には、七百八十餘名の受験者中、第十四位を以て及第するの光榮を擔ひ、明治四十五年二月前橋に於て辯護士を開業した。

男として、日の出の勢を示して居るが、之は君が辯護士となつた時機が宜かつたのさ。最初から七人斬の様な大きな事件を引受けたにも依るのであらうが、要するに其氣取らない態度、極めて平民的な態度と、事件に對して眞面目で熱心で、勞力を惜しまなかつた結果ではなからうか、勿論地方に於ける辯護士は民刑何れにも平均して研究を怠る事は出来ぬが、君は申にも刑事の方が得意であるとの事、辯論に於ては君は地方辯護士中亦稀れに見るの雄辯家である。

君は明治十五年、群馬縣新田郡木崎町の豪農の家に生れ、廿九年七月京都帝國大學英法科を卒業した法學士である。大學卒業の翌年五月には文部省に奉職して、約一年程官途に就いて居つたが、目下第八高等學校の校長となつて居る。大島氏と衝突して職を辭し翌四十二年一月には、司法官司補として前橋地方裁判所の判事補に任ぜられ、間もなく判事に昇進したが、居る事僅か一年の、翌四十五年五月には甲府地方裁判



辯護士 關口志行氏

所の判事に轉任を命ぜられた。甲府に居る事僅かに十ヶ月で、大正二年三月断然職を辭して前橋に歸り、辯護士を開業する事となつた。前途の光明に満ちて居る新進有爲の士である。否若手の法學士として、其前途を嚆目されて居る。辯護士としての君は、開業尙日淺いにも係らず、若手の辯護士として其評判は頗る好い。政治の方面には未だ何等の趣味も有して居らぬ、否新進の辯護士として其地盤の建設時代に屬して居るので、未だ此方面

に活躍するは其時期でないのを知つて居るが爲めである。然し其文學的方面に掛けては、一種の天才を有して居る専門に研究した法律と道樂に研究した文學とを、秤に掛けたら、何れが専門であるか疑ふ程に文學の頭を有して居る。拙劣な小説家等は、到底君の腰にも寄付けぬ。昨今のお遊びは玉突き圍碁まで、玉は持數百七十、碁は稍底を脱して素人離れがして居るこの事、要するに君は多趣味多才の人、正直な貴公子の様な人である。

群馬縣 參事會員の要職を占め、前橋辯護士組合の組長たる君は、群馬縣多野郡小野村大字森村の人文久三年十一月の生である。君は古い本縣師範學校卒業後は、暫く郷里で小學校教育に従事した事もあるが、既に君は師範學校入學當時から、其志望は教員となるのでなくて、辯護士ならんとするにあつたので、學校の課業等は其方除けて、法律の研究をやつて居つた位だから、學校時代から理屈家で雄辯家であつた。辯護

池田 光之丞氏

士としての君は、前橋で尤も古參株であらうが、未だ正式に辯護士でふ者も出ないで、所謂代言人と稱して居少た時代、既に君は此仲に入つて居つた。裁判條令改正と共に上京して、明治大學に入り、法律を修めて辯護士の免許を得た程に、辯護士に就ては長い経験を積んで、此社會に於ける秘密を知つて居る丈に、辯護の秘訣は充分に諒解して居る。随つて君の辯護は常に常識論から來て、依頼者の受も頗る好い。政治家としての君は、明治四十三年高津仲次郎氏失格の際、其補缺選舉で縣會議員となつた此方、二期の縣會に移り、今は政友會群馬支部の元老林であるが、君は決して策士ではない正直な活動家である。



小島彌平氏

高崎商業會議所會頭小島彌平君は、嘉永六年六月二日高崎市に生れた高崎市の元老であるが、頗る着實な人温厚實實の人である。随つて人の意見は好く聞き好く用ゆるが、決して人々議論を戦はして、自我を通さなくてはならぬと云ふ様な人ではない。純粹の高崎氣風を代表する實業人である。不得要領の様で要領を得て居る人である。現在に於ては、小島鐵工場を經營して居る外に、高崎電燈並に高崎五斯の重役として、銀行會社と關係し、高崎實業界を一族に依つて占有して居るが、確實な仕事で而かも將來に望み

有して居る。眞に高崎の實業界は七分迄、君の一族に依つて占有されて居る。云ふも敢て過言ではあるまい、即ち高崎市の有力者云ふ有力者は、殆ど君と親族關係を有して居る。一例として其最も親近者を擧げると、五斯會社の社長で、受託師をして居る井上組の御大將、井上保三郎君の養子は君の實子である。娘は山田昌吉君に嫁いで居る。妹は茂木銀支行支那人、松尾好國氏の夫人となつて居る。云つた様に、此一團は血族關係で固まつて居る丈に、其結團力は頗る堅固である。而も高崎市に堅實な、新進氣鋭まで政治實業兩面に、絶大の勢力を振つて居る茶話會の一團は、其中堅人物が、君と血族關係を有するものでなければ、君の一族行動を共にする市の有力者であるが爲めに、現在の高崎市の勢力の約二分の一は、君の一族に依つて握られて居ることも見ること出来る。

君は高崎茶話會の重鎮で、高崎水力電氣會社の重役として、瓦斯會社の社長として、高崎實業界に雄飛して居る、其の本業は請負業で、嘗ては市會議員として市政の要路に立ち、現在に於ては高崎實業界を二分して、其一つを保つて迄噂される勢力を有する丈に、請負業者間の通弊も見る事が出来る下劣の点は、君に於て認むる事は出来ぬ、君は高崎人士の兎角姑息な間に立つて、此弊風を打破す可く起つたかと思はれる、大膽な人である、大膽ではあるが然も細心である、如才のない男である、腰の低い男である、君が亡父の跡を繼いで其遺産に十倍するの富を爲すに至つた、成功の要點は、以上の諸點も具備して居るが爲めであるのは云ふ迄もないが、其成功の最大原因は、君の家庭の整頓して居る事で、此家庭の整頓は、やがて君の事業も亦此家庭の整頓して居るが如く、整頓して居るが爲めだと思ふのが近いであらう。



井上保三郎氏

さて迄傳へられて居る程に大なる成功をした、一代にして其富百萬を積んだ君は傑物である、傑物ではあるが君は先天的に、今日を爲す可き運命の下に生れたのである、君は明治元年十一月廿日の出生で辰年の六白で、君の左の手には、豊太閤も亦有して居たさ傳へられる天下筋が通つて居る、豊太閤は之あるが爲めに天下を取つた、君も今日の成功をなし、百万の富を積んだが如きは當然の運命で、吾人は恐らく高崎市の實權を將來君の手に來るのを信するものである。

然り、次期の貴族院議員の選挙には、前橋市の江原芳平氏の跡を襲いで、選出されるのは恐らく君を置いて他にあるまい

君は小島彌平、矢島八郎、須藤清七の諸氏と共に、高崎市の元老である、前橋市の人で君と比較す可き人を求めたなら、其れは平田健太郎君であらう、平田君が前橋市の元老側からも、若手の方面からも、多大の信用を収めて、極めて敵の鋭い手腕家であるが如く、君も亦高崎市の於て最も敵の少ない男である。

福田 儀平氏

の問題も起るも毎に、亦三十議員中殆んど異議なく、候補者たらしむる、事を承諾するものは亦君である、君は要するに先見の明ある人であると同時に、頗る敏な人で、君が高崎市に多くの敵を有して居らぬ所以は亦此處に存するが最も思はれる加ふるに亦君は高崎市有数の外交家であると同時に、剃刀の如く鋭い手腕家で、頗る明晰な判断力を持つた人である丈に、剃刀の如く鋭い手腕は有して居るが、物事に對しては極めて細心な注意を拂つて居る人である。

現在に於ては高崎銀行の専務取締役として、松尾、鈴木の兩氏と共に高崎銀行業界の手腕家である、否群馬縣に於ける同業者中にも、一頭地を抜いて居る手腕家で、同時に高崎商業會議所議員として實業界に雄飛し、市參事會員として市政の上にも其手腕を認められて居る、抑も君は江州の人高崎市民となつたのは今から卅年の昔で、嘗ては群馬縣農工銀行の重役となり、今は高崎市の人氣男の第一人である。

茂木銀行高崎支店長松尾好國君は、舊小田原藩の士族で、安政元年七月七日の生れであるから、本年は恰度六十才になる其高崎市に來たのは明治十七年、七十四銀行が高崎市に支店を設置した當時で、其後明治廿九年に至り、七十四銀行は營業年限が満期となつた處に、全年七月茂木銀行が高崎市に支店を設置する事となつたので銀行と共に移つて支店長となりて今日に及んだ。而かも君は此銀行の經營に任じた當時の如きは高崎市には第二銀行只一ツで、小切手の使用を許して居らなかつたのを、君は英斷を以て小切手の使用法を教へ、高崎



松尾好國氏

し、遂に刑事上の罪人を出すに至るの例少くない。君の銀行に限つては、廿年來此歴史が嘗てないのは、同行の誇りであると同時に、君の細密な頭が常に好く、此方面の注意を怠らぬが爲めである。然し近來銀行會社社員の花柳の巷に足踏込むもの頗る多く、花柳の味を知らぬものは野暮か、馬鹿かの如く思はしめて居る、社會の惡風潮の間に立つて、君の部下に限つて、此風氣を耳にしないのは喜ぶ可きである。君は亦頗るの外交家で、其不得要領の中に、云ふに云はれぬ所に人氣を博して居ると同時に要領を得て居る。

市商人に便利を與へた事は蓋し僅少ではなかつた、實に君は卅年以上を高崎市に住して銀行業に従事して居るだけに銀行の事務に對しては充分の手腕を有して居ると同時に、萬事に行波つた人である。

最近數年來此の方銀行會社の内部は、頗る紊亂して、何れの銀行何れの會社でも、社員さか行員さか行金を胡亂化して會社なり銀行なりに大穴を明け、株主並に重役に非常な迷惑を及ぼ



山政治郎氏

へて居るが爲めではなからうか。山田君と君との關係も如何なる點に迄達して居るのかは、問題子の知る處ではないが、兎に角君の今日の人氣を集めたのは山田君の如き良友があつたが爲めであるのは疑もないと同時に、山田君も君の力を頼つて居る事も事實である、君は決して圓滿主義の男でない、何れか云ふさ角のある男である。山田君の大なる味方を背後にして居ると同時に、亦少からぬ敵を有する男である、即ち勇ましい男であるのを快よとさせるのである。

高崎市の市參事會員として、商業會議所副會頭として、茶話會幹部の一人として、高崎市民から重きをなされて居る君は、才子肌の趣味のない男である、君の兩親は越後の産れで君は明治五年八月十日高崎市に生れた、君の一家が高崎に來たのは、既に四十年の昔になるが、君の兩親は殆ど裸一貫で高崎へ來て今日の富を造つて君に残して行つた、君は亡父の遺業を繼いで今も尙酒造家として、其發賣して居る和酒吉泉の名の高まると同じ様に、君の名も亦市民の間に認められて來た、勿論此認められた原因は、君の手腕の然らしむる處であると同時に、社交の人として認めしむるに足る、素養を有して居るの云ふ迄もないが、高崎市の選出、現縣會議員、芥川辰次郎君の後を受けて、次期の縣會議員を以て目せられて居るに至つた、信用と人氣を集めた原動力は、高崎市の實業界に於て、井上保三郎君と共に並び立つて雄飛して居る、山田昌吉君も背後にあつて、君の爲めに力を添

第二銀行高崎支店長鈴木俊夫君は明治元年三月十日横濱で生れた、横濱商業學校出の手腕家である、高崎市に、茂木銀行でふ大銀行の勢力を振つて居る間に介在して、第二銀行支店が成功して居るのは、君の巧みなる外交政策の力に外ならぬ、然り君の外交は其圓轉滑脱の間に、一種人を魅する力を有して、人をして自然に敬意を起さしむるが如きは、到底他の企て及ぶ事の出来ぬものがある。



鈴木俊夫氏

高崎支店長となつて此方、一層君の手腕は發揮され今や銀行界に於ける手腕家として縣下稀に見るの利物である、而かも内助の功ある夫人亦早い高師の卒業生で、頗る如才もない、君の外交的手腕は亦夫人に依つて助けられる事が少くないであらう、一言にして君を評したなら解りの早い人然否の判断の確な人とも言ふ可きか。

高崎市に於ける青年實業家中には、頭のシツカリした、活動の血に満ちたものが多い、一種政治的趣味を加味した團體であるも高崎の茶話會も、此若い活動の血に満ちたもの、中心勢力を占めて居るのにも、之を證明する事が出来る、君は茶話會員ではないが、商業會議所の議員として會頭小島彌平氏の片腕として、實業界に於る多大の勢力と信用とを有して居る、實に君は高崎市の元老小島彌平氏の娘を夫人にして、高崎市に於ける活動の血に満ちた、青年實業家の雄なるものである。



山田昌吉氏

の専務取締役をして居るので、銀行の事務が三時頃で終ると直に、倉庫會社に至つて社務を監督すること云ふ有様で、頗る活動家であると同時に常に頗る冷靜を凝つて居るが、一朝事に當つて立つた時の熱誠は驚く可きものがある、此熱誠は時に君をして、窮地に陥れる事がないでもないが、又一面に於て君の生命である、今は此二會社に關係をして居る外、高崎電燈會社及高崎瓦斯會社の監督役をして居る。

小澤 宗平氏

本縣農工銀行職員古屋幾久男、行金十二萬餘圓消費事件と共に、重役總辭職をなしたる結果、高崎市選出取締役福田儀平氏の後を受け、同行の重役となつた君は、年齢尙僅かに三十三歳に過ぎないが、高崎市に於ては各種實業に關係を有し、高崎水力の重役として高崎實業界の重鎮として、前途に多大の展望されて居る、然も市政の方面に於ては市會議員として二期を経て、昨年の改選期に當つては市參事會員の名譽職に選ばれ、茶話會に於ける幹部の一人として、亦此方面にも頗る重きをなして居る、君は其外見も極めて優し氣であるが如く、濃厚な君子的な男である、君は小學校を卒業する之間もなく、足利の某家に年期奉公に出され、他人の飯を喰つて生立たすに、資産家の坊ちゃんには珍らしいシツカリした、萬事に好く行渡る人で、深い學問は有して居らぬが、足利に奉公人として勤めて居つた時代から、修養を怠らなかつた爲めに、學問に於ても中學卒業程度以上の方を充分に有して居る、而かも其性格が、頗る緻密に出來て居る爲めに、計數の明かな點に於ては、高崎の青年實業家中、恐らく君の右に出る者はないであらう要するに今少し果斷である事は希望せざるを得ないが然し君は手腕の人である、實務の人である、多量なる前途を有する人である、問題子は恐らく高崎市の將來も、君の如き所謂解つた人に、待つ事の少からぬのを信ずるものである。



氏郎次辰川芥 士護辯

高崎市宮元町に居り構へて居る、辯護士芥川氏は、慶應二年伊賀國上野に生れた、寅年の八白である、君は明治大學の出身で、其高崎の人となつたのは廿八歳の時で、既に廿年餘りになる、廿年の昔裸体一貫の書生であつた君は、今は數萬の富を貯へて、一昨年の縣會議員總選舉に、押れて縣會議員となり縣會議長の要職を占め、其昔渡り者を以て目せられた君は、今や高崎市民中の有力家として、多大の尊敬を收めて居る、其今日を爲すに至つたのは、周圍から起つて來る總ての壓迫に打勝つた充分な社交振、巧に上州氣質を利用する秘訣を會得した、爲めである、而も君は卒直で正直である、眞面目で職務に忠實で、決して勿体振らぬから、辯護士としての君の職業は頗る繁昌して居る、高崎の如き商人氣質の處には持つて來いの人である。

家庭に於ける君は頗る平民的で、夫人や女中に多くの手数をかけて居るのを省く可く努めて居るが如く、職務の上にて於て客に接する場合にも、嫌な顔を見せない、其事件も如何に小さい事件でも、不愉快な顔をしなないで親切に取扱つて居るのは、又君の人氣を呼んだ最大原因ではなからうか、裸体一貫から廿年の今日、辯護士以外に何等の企畫をもしないで、數萬の資産を蓄積した君は、又頗る儉約家であるが、然し決して吝に陥るが如き事はない、必要に應じて財布の紐を開く事を忘れる程の男ではない、即ち縣會議員を争ふ時に當て黄金の力を避て前後七回有権者を屢訪した如きは喜可である。

高崎市 柳川町に立派な邸宅を新築した、高崎市會議長辯護士平井八太郎氏は、頗る眞面目な人である。圓満主義な人である。従つて理が非でも自分の我を通さなければならぬ。否、大勢を見るの明を有して居る人である。君が高崎市市民の同情を集め三十議員から市會議長に押されたのも、此圓満主義に加へて大勢を見るの明があつたからである。君は其小壯時代頗る好く呑んだ、其酒量の多い點に掛けては高崎市市民中



辯護士 平井八太郎 氏

稀れに見る處で、時に此酒の爲めに失敗を演ずる事も尠くはなかつたが、今の夫人を迎へて以來、斷然禁酒を契い、今も尙之を實行して居る、眞に君が高崎市の有力量者の信頼を得、進んで今日の地位を獲得するに至つたのは、此禁酒を斷行するの勇氣があつたからである。

君は高崎市市民としての人氣の點に於ても、辨護士として人氣の點に於ても近時頗る優勢であると共に、其資産の點に於ても亦頗る優勢である、人は君の今日を爲したものは、夫

大正貳年十月十日印刷
大正貳年十月十一日發行

前橋と高崎

正價參拾五錢

著作兼
發行者

栗田秀二

前橋市曲輪町十二番地

印刷者

山崎常太郎

前橋市本町七十一番地

印刷所

前橋印刷所

前橋市北曲輪町四十一番地

發行所

前橋印刷所

前橋市北曲輪町四十一番地



發賣所

前橋市電 話一二一
連雀町 振替東京八四八番

煥乎堂書店

資本金六百萬圓

利根發電株式會社

電話一三五番
電話五一二番

大正九年十一月一日發行
大正九年十月十七日開始
五割金銀正券

前橋電車

前橋電車は東京其他各方面より伊香保、四萬、草津を初めこして利根、吾妻兩郡へ赴く唯一の交通機關なり

前橋電車は天下の大川阪東太郎の沿岸を進行し車中上野の三名山を望み眞に山水の雄大なる勝景に接する事を得

前橋電車は利根發電株式會社の經營にして資本金六百萬圓を有せり如何に其設備の完全にして無缺なるかを推知し得べきなり

運輸部 電話一三五番

御召物の御用は

是非米專吳服店へ仰付けられ度候

當店は最新流行の魁新新奇拔なる柄物、吳服太物洋織物類を正札附廉價販賣
仕り候と共に品質の選擇には全力を注ぎ十分責任を負い御約束を確實に相守
り候間御安心の上御用命仰付け下され度希上候

前橋市横山町

吉米專吳服店

電話 十八番 五五〇番

▲吾妻軌道

は草津、四萬、澤渡、川原湯、川中、
各温泉場への通路にして中之條には乗
合馬車人車の連絡所あり

澁川間 吾妻軌道株式會社

▲吾妻軌道

は前橋、高崎、電車へ接続し連
絡乗車券を販賣し毎日午前六時より午
後五時迄一時間毎よ發車す

前橋市堅町

前橋代理店

電話五〇一番
振替二四〇九番

高崎市田町

高崎代理店

電話五〇三番
振替六二四二番

東京市京橋區南傳馬町二丁目



株式會社 東華銀行

電話京橋二四二、(長二四三番)

桐生町三丁目

桐生代理店

電話五〇二番

足利町四丁目

足利代理店

電話七二五番

前橋市堅町

前橋代理店

電話五〇四番

東京本所區元町



株式會社 本所銀行

電話浪花

八四四
三二二八

高崎市本町

高崎代理店

電話五〇六番

前橋市一毛町
有限責任
信用販賣組合交水社

電話(一一九番)
電信略號(カメ)

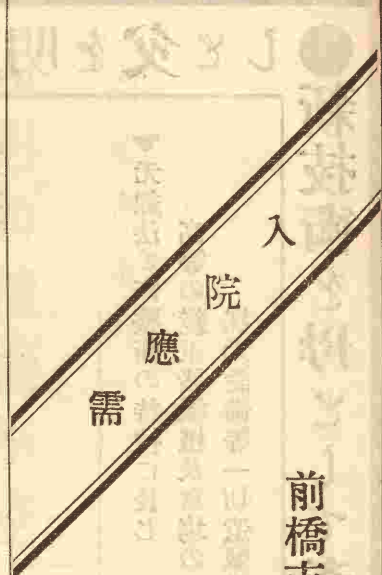
前橋市北曲輪町

田中醫院

院長 田中錦太郎
電話四四三番

醫學得業士 大澤 瀨平
前橋
耳鼻咽喉科院

隆鼻術 前橋市本町
電話三一九



前橋市神明神社前通り

由利眼科醫院

利根軌道 は利根郡に入る唯一の交通機關として設備完然

沿道は山光水色艶美一幅の繪巻物也

澁川
沼田間
利根軌道株式會社

沼田電話五〇番

新文明を父とし

● 新技術を母として産み出されたる

美的人像寫真

猪谷寫真店

前橋市(物産陳列館前)
(電話 二四八番甲)

◎ どうしてあんなにはやるのです？

いさうつしで、あかぬけのした、しかも上品な
眞の美術的人像寫真をうつすことに
すこぶる妙を得ておるからです

▼ 光線法と修整術の特技に長じ

高等の鏡玉諸機械及寫場の
採光設備等一切遺憾なく完備せり

前橋市曲輪町一〇六番地

辯護士 大島染之助

法律事務所

電話六〇一番

高崎市連雀町六十五番地

出張所

前橋市北曲輪町七十四番地

私立 和洋裁縫女學校

前橋市本町

私立 明治裁縫學校

校主 鈴木宗十郎

前橋市桑町(片原通)

旅住吉屋

電話一〇七番

前橋市本町

旅油屋安太夫

電話三二九番

○群馬縣一の模範旅館

前橋市堅町

旅東郷館

電話二二七番

○外人宿泊の設備あり

前橋市本町

留春館 岩六

電話五十二番

前橋市相生町停車場通り

特許膽寫版
發明製造元

大氣堂

前橋支店

降橋 榮十

電話 六二一番

振替口座東京二六二二三番

◎丁寧親切軽便は弊店の特色であります

前橋市横山町

會席
御料理
喜樂

電話二五二番

◎浴場の設備もあります

◎如何なる御宴会も丁寧親切に御引受け仕ります

前橋市立川町

御料理
新昇

電話一七八番

同町

西洋料理
新昇別館

◎新昇別館には玉突場の設備があります

高

前橋市片貝町

貴

勝山機織工場

電話二五九番

織

油と糸

確實な品を薄利に願います

君が代香油本舗

澁川町

太田屋油絲店

電話二八番

振替口座東京九四八番

ラージ自轉車

前橋代理店

前橋市連雀町

自轉車
附屬品
修繕一式

都丸自轉車店

都丸義郎

新 [休無中年] 群

群馬新聞

○試に一枚を手にしよ天下の一切を知るを得

▲目覺しき大活躍▼

▲意外ある大發展▼

○今時代の活動的人物は群馬新聞愛讀者也

前橋 群馬新聞社 電話 二四〇九

馬 新聞

最も安心の出来る料理店は

會席

御料理

鈴木樓

丁寧親切は弊樓の特色

國民新聞

群馬版

群馬版

は報導機敏記事正確なり

夕刊報知新聞

群馬版

は趣味と實益の寶庫なり

東京朝日新聞 上武版

前橋市神明町

東京朝日新聞前橋支局

支局長 須

電話一〇三番
永平治

夕刊やまご新聞 群馬版

前橋市南曲輪町一番地

やまご新聞前橋支局

支局長 手塚

電話五六一
番 一郎

夕刊 二六新報 群馬版

前橋市神明町十四番地

支局長 平井霞山

一日も讀まざるべからざる新聞は

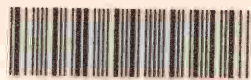
夕刊 中央新聞

東 每號八頁群馬版あり

東京 前橋市 支局長 香川 豊

中央新聞社 前橋支局

群馬県立図書館



0238902-1

58 群馬県立
図書館